

523
50



始



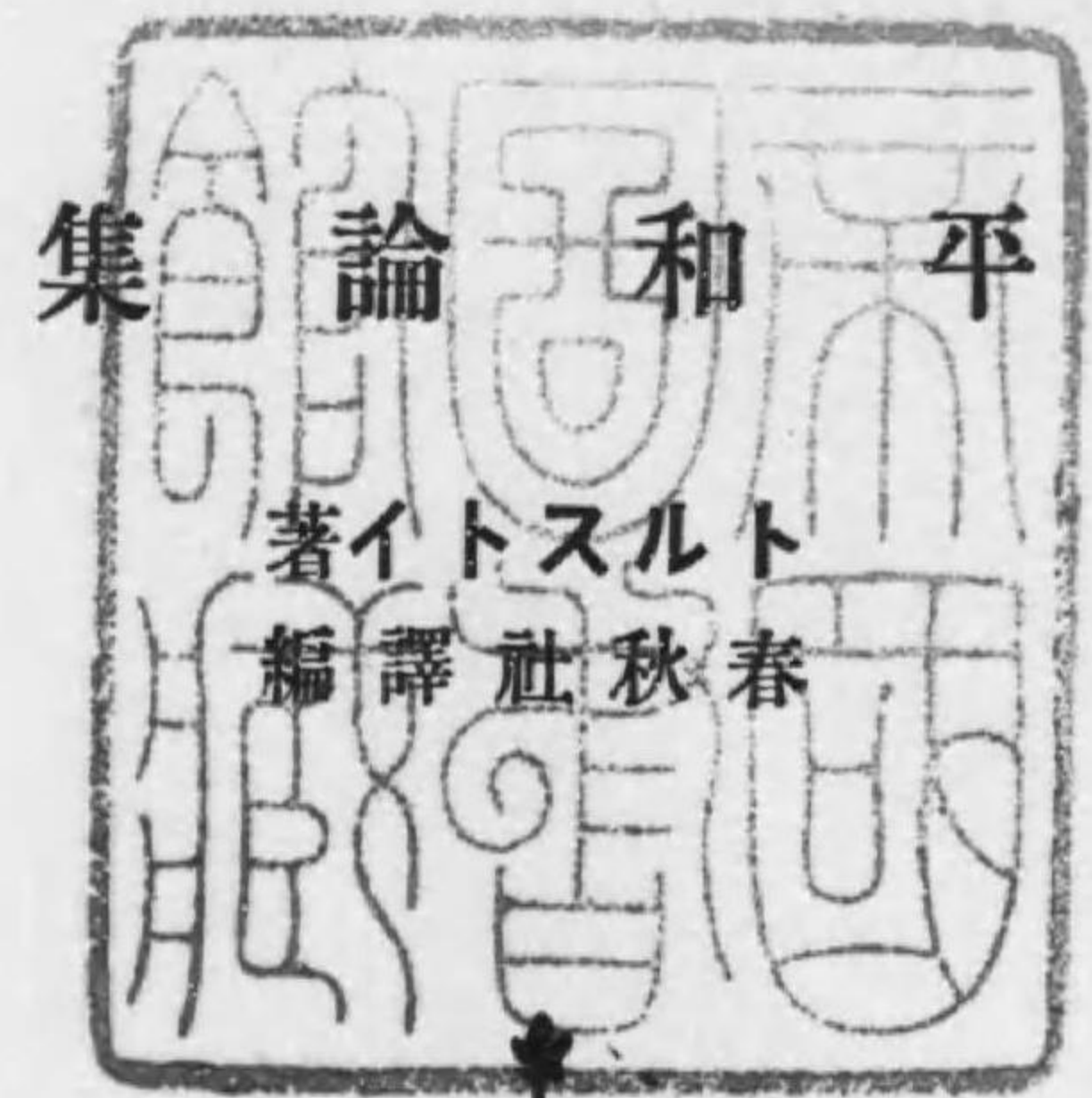
集論和平

著 イ ト ス ル ト

編 譯 社 秋 春



523-60



РОДА ГРАФОВЪ ТОЛСТЫХЪ

春秋社



序

思想家としてのトルストイの生活を一貫する大要素は人間愛であると言へる。彼のアナキズム、彼の無抵抗主義は一つに此處に根ざしてゐる。

Der Anarchismus の名著を以て世に知らるゝエルツバヘルはトルストイをバク
ウニンやクロボトキン同列に並べるけれど、それは單に外觀と、結果の上からの
類別であつて、其間には多大の徑庭が存するのである。成程トルストイは人類
が究竟の平和を得るには權力を廢し、革命の止み難きことを主張した。けれど
も彼は同時に一切、イエスの眞精神、即ち祭司の長の下僕の耳を削いだペテロを
彼が誡めた「暴に酬ゆるに暴を以てするなかれ」といふ精神を文字どほりに尊重
して、無抵抗をとらへ、斯くして武裝的平和と稱するが如き大矛盾、大不徹底のダ
イレンマから遁れ得た。だから彼の革命は決して斷頭臺や、バリカードや、銃劔
や、爆彈やを必要とせないばかりか、又荒き聲一つだにあけないで目的を達しよ

序

うといふ、至極平和なものであつて、語彙の概念に於て、普通に稱せらるゝ革命とは甚しい相違がある。

此處に選定集録した數篇の論文は此見地に基く彼が熱血を注いだ平和論で殊にその中の幾篇かは日露戦争に對する彼一流な犀利な批評であつて、我々とつて特に感慨深いものである。

只甚だ遺憾なのは是以外なほ多く興味饒かに、優秀卓越な論文があるけれど、彼の餘りに卒直眞摯の言は既に本篇の母體たる杜翁全集刊行當時に於てすら官憲の許可するところとならなかつたのだから、今日時勢も進歩したことゝて或は復活再掲しても差支えなからうとは信じたが、なほ萬一を懸念し、以前に危険と認められた分は悉く割愛し、發表の許可があつたものだけに止めたことである。之偏に讀者の宥恕を願ふ所以である。

大正十三年二月

譯者

目次

序

悔 改 め よ 二

惡に惡を以つて報ひず 六

海牙の平和會議に就て 四

二つの 戦 九

ストックホルム平和會議草案 一〇

カルタゴ破壊せざるべからず 一〇八

世の 終 り 一一八

— 目次終 —

平



春秋社編

悔改めよ

唯なんぢの邪曲なる業なんぢらとなんぢらの神との間をへだてたり。又なんぢらの罪その面をおほひて聞えざらしめたり。之はなんぢらの手は血にてけがれ、なんぢらの指はよこしまにて汚れ、なんぢらのくちびるは虚偽をかたり、なんぢらの舌は情をさゝやき、その一人だに正義をもてうつたへ眞實をもて論らふものなし、かれらは虚浮をたのみ虚偽をかたり悪くはだてをはらみ不義をうむ……かれのは工はよこしまの工なり、かれら手には暴虐のおこなひあり、かれらの足はあくにはしり罪なき血をながすに速し、かれらの思念はよこしまの思念なり、残害と滅亡とその路徑にのこれり。かれらは平穩なる道をしらず、その過るところに公平なく、又まがれる小徑をつくる凡てこれを賤むものは平穩をしらず。このゆゑに公平はとほくわれらをはなれ正義はわれらに迫及す、われら光をのぞめど暗をみ光輝をのぞめど闇をゆく。われらは替者のごとく牆をさぐりゆき目なきもののごとく摸りゆき、正午にても日暮のごとくにつまづき、強壯なる者のなかにありても死ぬるもののごとし(以賽亞書第五十九章一—四、六一—十節)

併し、戦争はいつもより重んぜられた。此業の技術家、天才的の殺人者、モルトケ氏は次のやうな奇怪な詞で、講和使に答へた——

「戦争は神聖である、神の制度である、此世の最も神聖な法律の一つである。戦争は人の心にあらゆる偉大で、幸福な感情を留める、名譽、淡白、徳義、勇氣——概言すれば人を唯物主義の誘惑から救ふものである」そこで四十萬の軍が編制せられ、晝夜小歌もなく進軍し、何を思はず、何も知らず、何も教へられず、何を讀まず、誰の用にも立たず、汚穢の中に驅使せられ、泥土の中に寝ね、牛のやうに暮し、不斷の狂燥状態で、都市を掠奪し、おに火をつけ、人を殺し、それから同様な他の人肉の集團に會ひ、それを攻撃し、血の湖を漂はし、裂けた肉で野を覆ひ、屍の山で土をかくし、誰の爲めともなく負傷し、不具となり、遂には知らぬ他國の野に憩ふ、其時、親や妻子は故郷に餓死する。之が人を唯物主義の誘惑から救ふことなのである。(キイドモウバツサン)

私共は歐洲諸國は千三百億法の負債をしてゐるが、そのうち千百億法は一世紀の間になされたこと。又此巨大な負債は總て、一の例外なく戦争の費用であること、歐洲諸國は平時軍備に四百萬の兵を養ひ、それを戦時には一千萬人に達せしめるを得ること、各國豫算の三分の二は此負債の利子と、陸海軍の維持に宛てられることを語るに止めて置かう。(モリナリ)

又戦争だ。又誰にも不用な、何にもならない苦痛だ、又虚偽だ、又人類の一般的な發狂だ、畜生化だ。

互に幾千哩を離れた人民、斯る人民の幾萬が、一方は、人間は勿論、下等な動物までも殺すを禁ずる律戒をもつ、佛教徒であり、他方は同胞と愛との律法を宣した基督教徒でありながら、恰も野獸の如く、海に陸に互に相求めて最も殘虐な方法で殺し、苦しみ、殘害しあつてゐる。

之は何か？之は夢か、現か？あるべからぬこと、有り得べからぬことが起つてゐる——之を夢と言はふか、現と言はふか？いや之は夢ではない、恐ろしい現實だ。

自分の土地を離れた、哀れな、無學な、欺かれた日本人は、佛教はあらゆる生物に對する慈悲より成ることではない、血腥い偶像教だと教へ込まれ、又同様あはれな、ツウリスクの田舎の半ば文字のない小さい者たちは、基督教とは只キリスト、聖母、聖人や、その像に拜跪することであると教へ込まれてゐることが理解し得られる。又此數百年暴力と欺偽とにより、世界の最大惡事たる同胞の殺戮に引き込まれ、勇ましい仕事と思ひ、此恐ろしいことを、その責任を感じずしてやつてゐることが理解される。併し所謂の文明人なる者は、如何にして戦争を宣し、戦争を行ひ、戦争に加はり又何よりも恐ろしいことには、戦争の危険を避けずに、戦争を挑發し戦争に向け自分の不幸な、詐瞞された同胞を送ることが出来るものだらうか？若し彼等がその告白者たることを認むるならば、キリスト教の律法は措いて言はずとも、戦争の殘酷と、不必要と、無意味とに關して既に書かれた、また書かれる、既に言はれた、また言はれること總てを所謂の文明人が知らざるを得ないのである。正しく彼等は之を知るが故に文明人と思はれるのである。彼等の大多數は自ら之を書いたり、言つたりした。世界の稱贊を博した海牙會議、國際間の紛議を國際裁判にて決する可能に關する書籍、小冊子、新聞記事、

演説、ちらしのことを言はずとするも、あらゆる文明人は各國の軍備は必然彼等を一般的無限の戦争或は一般的な破産に引き入れることを悟り得ぬことはなからう、數十億箇の愚劣、無益な失費、即ち、戦備に費した人の努力、を除き戦争そのものに於て其生涯の最も生産的時代の精根、體力の最も強い人間を幾百萬となく殺すことを（前世紀には一千四百萬人が殺された）知らざるを得ない。文明人は戦争をする理由は、常に一人の生命を費すに償しないのみならず、又、戦争に費されるその百分の一の金も費すに償しないものたることを悟り得る筈だ（黒奴の解放には總て南部の黒奴を買つたよりも幾層倍多く費された）

戦争が人間に最下等な動物的の激情を起さして、人を墮落、獸化せしめるものたるを知らざるを得ないことを、人は皆知つてゐる。モルトケやドストルや其他の者が稱へる、戦争有益論を人は皆信じない。何ぜかなればその論たるや人間のあらゆる災難の中にも有益なものが發見されるといふ詭辯に基くからである。或は又その論たるや戦争は、恰も人間の惡しき行爲のやうなものであつたがその惡しき行爲はそれが持ち來す、或は長い時間を費して完成する其益や利を以て是認されたのであつた、故に戦争もそれと同じく是認されるといふ得手勝手な請合ひに基くが故である。文明人と呼ばれる人々は之を知つてゐる。そして、戦争が始まるや否や、瞬間に一切之を忘れてしまふ、そして昨日は戦争の殘酷と、愚と、不必要とを力説した其人々が、今日は、どれ程多くの人を殺さうか、どれだけ多く人間の努力を費し、破壊しようか、又どれだけ一層強く、自分の力で彼等をして此恐ろしい、その良心と、幸福と、信仰とに反する行爲をなさしめる、所謂の文明人を養ひ、食はせ、生命をつながせて

るる、優しい、無害な、労働好の人民に、人間憎悪の激情を燃えさせようかと、考へたり、口にしたり、筆にしたりするのである。

二

そこでミクロメガスが曰ふ――

「噫、お前等、その中に永遠の實在が、其技巧とその力をあらはす賢い原子よ、お前等は、斯くも物質的なること少く、又斯くも靈的に發達してゐて、お前等は此うちに靈的實在の眞の生活があるにより、お前等の生活を愛と思想とに導かねばならぬ故に、お前等は正しく、お前等の地球上で、純潔な喜悅を享受してゐる。私は何處にも眞理を見なかつたが、此處には疑もなくそれがある。」此言葉に對して哲學者は皆頭を振つた、そしてその中の最もひらけた者が言つた、僅か尊敬される住民の小數を除き、其餘の人々は皆無智な者、無賴漢、及び不幸な人から成ると。

「――若し惡が肉體から起るとすれば、君等には肉體が大きい、又若し惡が精神から起るならば、精神が餘りに多い――と彼が言つた――そこで例へば只今帽子を被つた一千の無智な者が他の印度頭布を被つた一千の生物を殺すか、又はそれに殺されかする、記憶し難い時代から、之が斯く全地球に行はれてゐるのである」

「――何の事で此小さな生物が争ふのだね」

「何か君の足の踵程な泥の小さな塊のことからだ――と哲學者が答へた――そして御互に斬り合ふ

何の人間にも此泥の塊は少しの關係がないのだ。彼等に取つて問題といふのは只此土塊がサルタンといふ奴のなるか、それともケーザルといふ奴のなるかといふだけさ、尤も何方も此土塊を見たことはないんだがね。此御互に斬り合ふ生物の殆ど一人だつて、自分等がそ奴の爲めに斬り合ふ此生物を見たものはないのだ」

「――可哀さうに――と狼星の人が叫んだ――そんな馬鹿氣たことが想ひもせられるか！眞個に私は三步進んで、此妙な殺戮をやる蟻共を追ひ散らしてやらう」

「――それには及ばない――と彼に言つた――彼奴自身で此事は心配してゐる。それに又彼奴を罰してはならぬ、宮殿に坐り込んで人殺しを企らみ、又、神に感謝して嚴かに命令を下す奴等こそ罰しなければならぬ」(狼星人と、地球人との對話、ホルターール)

近代戦争の無意義は皇室のためとか、國情とか、歐洲の均衡とか、名譽とかいふものでは認められない。此最後の動機は、何れの國民でも耻辱の行動と罪惡とに汚されぬ者もなければ、あらゆる方法で破廉耻をなさぬ者もないから、最も野蠻である。國民に榮譽があつたところが、それは戦争によつてそれを支持して行かふと云ふ變な方法である。換言すれば、各個人を不名譽ならしめるあらゆる、放火、掠奪、殺人等が此れである。(アナトール、フランス)

戦闘に於ける殺戮の精神は數千年の久しきに亘り、人間の頭に深く根を取つた程、注意して養成さ

れた。併し我々以上に出でて、人間が此恐ろしい犯罪より自らを解放することは望まねばならぬ。併し其時我々以上の人間が、此我々が矜りすとすする所謂典雅な文明を何と思ふだらうか？ 私共が、好戰的であり、同時に敬虔で、動物的であつた、古代墨國人を思ひその人肉を食したこれを思ふと殆ど同じであらう。(ノッソーノル)

時に一人の主権者が、他の主権者の已れを攻撃せないかといふ掛念から、それを攻撃することがある。時に敵が餘りに強いが故に戦争の起ることがあり、又時に餘り弱いが故に起ることもある。時には私共の隣人が私共の支配してゐるものを欲し、或は私共に足りないものを支配してゐることがある。その時は、戦争が起つて、彼の入用なものを取るまでか、又私共に入用なものを渡すまでかする間はそれが續くのである。(ジョナサンスウィフト)

或るわけの分らぬ、あり得べくもない残酷嘘偽、愚劣な事が起つてゐる。

全世界の國民を平和に招いた其政府が、極力平和を保つに苦心したに拘らず、日本人が自らを攻撃したが故に、日本人が露人に爲したと同一の事、即ち——殺人を——日本人を殺すべきことを命令したと一般にふれ出した。此殺人召集に就て自分を辯明して、政府は、神を喚び、世に最も恐ろしき罪惡に對して祝福を求めてゐる。

露人に就いて、日本の皇帝も同様なことを宣してゐる。國際法學者ムラビオーフ氏やマルチンス氏

等は、極力世界的平和を求むる事と、他國の領土を取るが爲に戦争を起すことは矛盾しないと論證してをる。外交家は典雅な佛語で印刷した、撒紙を配り、同じやうなことを極力論議してゐる——尤も誰も信ずる者はないとは知つてゐるのだ——曰く、平和的關係を樹立するあらゆる努力の末、露國政府は問題の解決に對する唯一の賢明なる方法によるの止むを得ざるに至れりと。唯一の方法は則ち殺人である。日本の外交家も同様のことを書いてゐる。歴史や哲學の學者共は又同様自分等の立場から、過去現在を比較し、此比較より深遠なる演繹を爲し、國民進歩の法則白黒人種的關係、佛教基督教の關係等を該博に批判し、その演繹と結論とを基礎として、基督教徒が黄色人を殺すのを是認してゐる。新聞記者はその喜悅を隠さず、競ふて、最も厚々開しい明かな嘘偽にも躊躇せず、一齊に論じて曰ふ、あらゆる點に於て只露國人のみが優れて、正しく、強力である、併しあらゆる點に於て日本人は不正で、弱く、且ついけない、又露國人に敵し、又は敵するならん者共——英米人——はいけない、又露國人に對して、日本人や其味方が同様なことを論證してくれてゐる。

そして本職として殺人を準備する軍人はさておき、文明人と稱せられる人々の群は、教授、地主、大學生、貴族、商人の如く、何人にも又何物にも刺戟を受けない人々は、彼等が昨日までは親切に、或は無關心であつた英米人に對し至大な敵意と、輕侮との念を表はし、且つ何の要もないのに、無限の愛と、覺悟とを以て其爲めに、自分の生命を犠牲に供することを請合つて前に非常に冷淡であつた皇帝の前に、最も低劣な、奴隸根性を表白するのである。

富者はその不道德な富のホンの僅かな部分を其殺人事業に、或は殺人事業の補助に宛てる、そして

貧者は、年々政府から二十萬宛徴集せられて、又同様に政府にその鑄錢を納める義務ありとせられる。政府は怠惰者をそのかして、街路で皇帝の畫像をかゝけ、軍歌を唱へたり、萬歳を呼ばつたり、愛國心の假面の下に、あらゆる醜惡を演ぜしめる。而して上は宮廷より下は小さな村落に至るまで、敵を愛せよと命ずる神に、愛の神に、自らキリスト教徒と稱ふる教會の聖職、惡魔の業を助けよ、人殺しを助けよと祈願してゐる。

祈禱、説教、激勵、行列、畫、新聞などに氣違ひにされた、大砲の餌食たる、數萬の人間は、一樣な服装、一樣な殺人道具を携え、兩親や妻子をおいて、心に苦痛を感じながら、しかも徒な勇氣を以て、戰場に出掛け、死の危険を冒して、自分が知りもせねば、自分に何の害もしない人を殺ろす、最も恐ろしい仕事をやるのである。するとその後から醫者が行き、心根優しい姉妹が行く、どういふわけか斯る女達は、單に、おとなしく、患つてゐる家内の人に仕へることが出来ず、御互に殺し合ふ仕事に忙しい人にだけ仕へることが出来ると思ふ人達である。家に残つてゐる者共は殺人の報道を悦んで、日本人が澤山殺されたと知るときには、彼等が神と稱へる者にそれを感謝する。

そして是は常に高等な心情の發露として認められるのみならず、人の眞似をやつても、こんな發露の出来ない人は、賣國奴、反逆者と認められ、自分の無智と、殘酷とを、暴行の外にはどうすることもならぬ、獸化した人間共に殘害される危険に陥るのである。

三

戦争は人をして市民たることを止めて、兵士となるように教化する。彼等の習慣は社會の中より彼等を抽き取る、彼等の主なる感情は司令者への服従である、彼等は營所で、專制に馴らされ、自己の目的を暴力で達成し、隣人の正義と、幸福とを弄ぶことに馴らされる、彼等の主要な快樂は、荒い行動と、冒險である。平和なことは彼等の意に反する。

戦争は自ら戦争を生み、又戦争を果もなく續ける。勝つた國民は、勝利に酔ふて、新たな征服を企てる。負けた國民は、負けたに立腹して、其名譽と失つた物を回復せんとする。

互に嫉視反目する國民は、御互に、耻辱を與へ、亡ぼしてやらうと欲ふ。彼等は敵が病ひ、飢え、貧乏、敗北することを悦ぶ。

幾千の人が殺されたのに、同情の代りに、喜悅の情が彼等に起る。都市はイルミネーションで輝き渡り、全國はお祝ひをする。

斯く人心は荒み、其惡しき慾情は養はれる。人は憐愍と、道德人からひき離される。(チャンニング)

丁年に達すると、あらゆる青年が、無爲無體な者の譯の分らぬ命令に服従しなければならぬ。彼は自分の意志を否定して、他人の意志に従ひ、殺し、殺され、飢と、暑と、雨と寒とに苦み、理由も分らず負傷して片輪となり、只うまい約束や、架空の事物——死後の不死や、暖かい部屋に居て、新聞記者が自分のペンで、與へたり、奪つたりする光榮などの——と、一日の慰勞に、一盃の火酒を賣ふ以外には何の報酬も受けないのが偉大で、幸福であると信じなければならぬ。

彼が射撃する。彼が負傷して仆れる。我友が彼を踏みにじつて、殺してしまふ。彼が葬られる。そしてその時彼が不死を以て慰められる。戦友も、同胞も彼を忘れる。彼が彼の幸福を彼の苦痛を、彼の生命を捧げた人々は嘗て彼を知らなかつた。若干年の後、誰やらが彼の遺骨を捜し出し、それから、將軍の長靴を磨く爲めの色素と英吉利蠟を造る。(アルフォンス カルル)

彼等は青年の最盛期にあつて、最も力強い人間に打撃を與へる、彼の手に銃を、背に背囊を與へる、併し彼の頭には薔薇花形の徽草をつけ、それから語つて聞かせる『我が仲間、何に王が私を裏切つた、そこで、お前は彼の臣下總てを攻撃しなけりやならんのだから。私は彼等に言つておいた、お前は是の日に、彼等を殺すが爲めに、彼の國境に現はれる』と。

『お前は無經驗の故に、私共の敵は人間だと思ふかも知れないが、それは人間ではない、油蟲だ、佛人だ。お前はそ奴の軍服の色で人間の仲間から、彼等を轉別(まわりの)るだらう。出来るだけ善くお前の義務を盡しなさい、私は家を去つて、お前の中から見に行くから。お前が勝つたら、歸つてきたとき、私は軍服を着てお前の處へ出て、言はふ『兵士達、私はお前達を嘉みするぞ』と。若しお前が戦場に殘される時があつたら、私は必ず、家族の者にお前の戦死を知らしてやらう、お前を哭きお前の後をたてる爲めに。若しお前が手か脚を失くしたなら、其値段を私が支拂はふ。若しお前が生きてるて、背囊を負ふに堪えなくなるなら、私はお前を除隊して、お前は何處へでも好きな處へ行くがよい、それは私のかまつたことではない。(クロッドナーン)

私は軍紀といふものを理解する、則ち、伍長が兵卒に言つてゐるときには、伍長は常に正しい、軍曹が伍長に言つてゐる時は、軍曹が、下士官が軍曹に言つてゐるときは、下士官が正しい、斯くして順を追ふて軍司令官に及ぶのだ、よしや上官の詞が二二が五とあつても？最初は之を理解し難いが、之を助けるに、各兵營毎に表が掲げてあつて、その意をわかるやうに、讀むのである。此表には總て兵士が爲さうと欲するらんことが書いてある、例せば自分の村に歸ること、兵役を拒否すること、上官の命に従はぬこと等で、之に對してそれ／＼死刑又は五ヶ年の懲役に處すとしてある類だ。(ヘルクマンシャトリアン)

私は黒人を買つた、彼は私の物だ。彼は馬のやうに働く、私は彼に粗食させ、粗衣を着せ、彼がまかないと、鞭打つのである。何で之が奇怪だ？私共は自分の兵士を嚙之よりよく待遇するだらうよ。彼等は此黒奴と同様に自由を奪はれてはゐないだらうか？差別は只兵士の方が非常に廉價だといふだけだ。良い黒人は今少くも五百エキューするが、兵士なら五十エキューだ。彼も是も等しく自分を止めてある處を離れ去ることがならぬ、是も彼も等しく極めて些細の過ちで擲られる、俸給は殆ど同様であるが、黒人が兵士にまさる點は、その生命の危険がなく、自分の妻子と暮していけることにある。

(Question sur l'Encyclopedie par des amateurs Art. Esclavage)

恰もヴォルテール、モンテスマ、バスカル、スウィフト、カント、スピノザ及び其他幾百人の、力を極めて戦争の無意義、不必要を示し、其残忍、不道德、野蠻を説いた文人がないかの如く——殊にキリストと、その四海同胞の教義と、神と人とに對する愛の教義が存在しなかつたものゝやうである。此事を回想し、現に自分の周圍に何が爲されるかを見なさい、又戦争の恐怖に對してではなく、あらゆる恐怖中の恐怖に對して——人間理智の無力の自覺に對してお前は恐怖を感じるだらう。人を動物より區別する唯一のもの、彼の眞價を爲すもの——彼の理性——は無用、無益、無益ならぬものですら、馬の頭から切り足の處に落ちて、只それを焦ら立たせる手綱のやうに、一切の行動を困難ならしめる有害な附加物を拒むのである。

異教徒の希臘人や羅馬人、又は教會の命令に盲目となつた中世紀のキリスト教徒は闘ふことが出来た、そして闘つて自分の戰鬪的智識を矜つた。けれどもキリスト教を信する者、或は信じない者さえも、現代の哲學者、倫理學者、藝術家の著書に鼓吹せられる四海同胞のキリスト教思想に、不知不覺に引き寄せられた人々は、どうして銃を取り、或は砲側に立ち、隣人の群に向ひ、可及的多くを殺さんと、狙ふことが出来やうか？

アツシリヤ人、羅馬人、希臘人等は、戰鬪するは、嘗に自己の良心にかなふのみならず、又善事を行ふものとさえ信じ得たのだつた。併し私共は之を欲すると欲しないとに拘らず、私共はキリスト教徒である、又キリスト教はどれだけ腐敗してゐたところが、その一般精神は私共が自身の存在に對して、戦争が嘗に、無意義、殘虐なるのみならず、又全然私共が善とか、義務とか信するものに反する

と考へざるを得ざらしめる、其高等な理性にまで、私共を到達せしめ得べき筈である。故に私共は、嘗に安んじて、斷乎として、又平然として戦争を爲し得ないのみか、又其罪たるを悟らずして、此殺人の罪の絶望的なるを氣付かずして之をやれもしないのである。此殺人たるや自己の犠牲を殺すことを始めた時、その魂の底には、其始めた行爲の罪たることを悟るのであるが、此恐ろしい仕事を遂行する爲めに、自己を激昂せしめるのである。此不自然な、熱狂的、燃ゆるが如き、現に露國の怠惰な上流社會を捕へてゐる此興奮は、爲されてゐる事が罪であると知つてゐる證據である。總て此皇帝の尊敬や、忠誠に關する不作法な、虚偽な言説、生命を犠牲に供する言説（自分ではなく、他人の生命をといふのが至當だらう）他國の土地を劍によつて守るとの約束、此無意義な、いろ／＼な旗や、聖像を以てする御互の祝福、此祈禱や、此シーツや繻帶や、此篤志看護婦の隊や、此艦隊の犠牲や、彼の政府に捧げられて、其直接の目的は、戦争が布告されたので、艦隊を建てたり、負傷者を看護したりするに人用な金を集むる可能をもつことにある赤十字社や、此スラーヴ式の誇張した、無意義、且つ、聖なる物を嘲る祈禱、それを讀み上げることが、左も重大な報道なるかの如く、いろんな都市の新聞に報道せられる祈禱や、此進軍、讚美歌、「萬歲」の要求、一般的新聞の嘘言による此恐ろしい、絶望的な、大膽な發露、現在露國がそのうちに自身を見出す此狂氣と獸化、又それが少數と多數一般とに對する傳染——總て斯るものは、只此やつてゐる恐ろしい事が罪たりとの自覺を示す表徴たるばかりである。

卒直な感情は、彼等がやつてゐることをしてはならぬと人々に告げる、けれども既に其犠牲を殺し

始めた殺戮が止むを得ないと同じく、露國民には、既に始めた戦争を有利に導くの外には致方がないやうに見える。戦争は始まつてゐるから、それを繼續せねばならぬと。小さき感情に拘はれ、發狂してゐる。素朴で、欺かれてゐる、無學な露國人には斯く思はれてゐる。又丁度それと同様に當代の學識ある人々は之を信じ、人は意志の自由をもたぬこと、それ故にやつてゐることが不善と知つても、之を改めることが出来ないと論證する。

そして愚かな、獸化した人々は恐ろしい仕事を續ける。

四

外交や新聞の御蔭で、どれ程まで、ホンノ不協和が神聖戦争を起し得るか驚き入つたものである。英佛が千八百五十六年露國に戦争を布告した時、之は全くツマラヌ事情の爲めに起つたので、その原因を理解するには久しいことかゝつて外交文書をホヂクラねばならぬ程のものだ。併し此變な疑惑の結果は、五十萬の善良な人間の死と五六十億の失費を伴つた。

大體に於て原因はあつた、併しそれは承認されないものである。ナポレオン第三世は英國と同盟し、運よい戦争を以て、自個の罪惡で出来た權力を固めようと欲した。露國人はコンスタンチノーブルの占領を欲した。英國人は自分の商權を確立して、露國東漸の勢力を抑へようと冀つた。此の是かあれかの見解の下に、常に克服の精神が存するのである。(リッヴェー)

彼が河の向ふに栖み、そして彼の君主が私の君主と戦つてゐるが故に、私と彼とは戦つてゐないのに、人が私を殺す權利を有すること以上に馬鹿氣たことが有り得られやうか？(バヌカ)

地球の人間がまだ無智、蒙昧の域に居ることは毎日文明國の新聞に、假想敵に對する同盟とか、戦備とかいふものが、國家の重要な外交事件として論議せらるゝことである。國民は之により、之の指導者に恰も家畜のやうに戦争に逐ひやられて、各人の生命はその人の所有であるといふことに就いて、之に對する何等の疑義を挾ぬやうであることだ。

此妙な遊星の住者は、國家、境界、國旗の在ることを信するやうに教へられてゐる、そして人性といふ自覺が少くて、祖國といふ觀念の前には之は直に破れてしまふ。若し思想家が相一致したら、各個人は誰しも戦争を欲しないから、斯る状態を變じ得られるのである。併し斯る政治的結合があるが故に幾百萬の寄生蟲が生ずるのである。(フラムマリオン)

若しお前が、人間の表面的ならぬ、根本的のいろ／＼な行動を観察するなら、次の如き判断をせざるを得ない、則ち地上に惡の王國を續けるが爲めに、どれだけ人命が浪費されたか、又此惡に、何よりも軍隊制度が助けを爲したかといふことだ。

驚愕と痛心とは、人間の大多數によつて承認されてゐる、此不必要、此惡は、只彼等の愚昧と、只彼等が、巧妙な、腐敗した少數者に自らを利用せしめるから起るのであると考ふるとき、なほ大き

くなつていくのである。(パトリッククラツボルク)

年老ひた両親、妻子を置いて來た年若な兵士、伍長、又は下士に對し、何ぜお前は自分の知りもしない人を殺しに行くかと訊いて御覽、彼は最初は諸君の問ひを怪むであらう、彼は兵士だ、彼は誓つた、そして上官の命令を實行せねばならぬ、若し諸君が、戦争は人殺しで「殺す勿れ」といふ聖訓にかなはぬものだと話すなら、彼は言ふ、若し先方がかゝつて來たら、どうするか？皇帝の爲め、正教の爲にやるのだ。一人の者が私の間に對して言つた「けれども若し彼が聖物にかゝつてきたら、どうしませう？」——どんなものに？「軍旗に」若し諸君が斯る兵士に、神の命令は常に軍旗のみならず、全世界よりも重んずべきものであることを、力をこめて教へるなら、兵士は口を噤むが、乃至は立腹して、上官に訴えるのである。

將校や將軍に、何ぜ戦争に行くかと訊いて御覽、彼は諸君に言ふ、彼は軍人である、軍人は祖國を守護せねばならぬ、と。又殺戮はキリスト教の精神に出でないと、言つても、彼を閉口させ得ない、何ぜなれば彼は此教へを信じないか、或は信じてもその本物ではなく、此教へに與へられた解釋を信じてゐるからである。

中にも彼は兵士と同様、我は何を爲すべきかといふ個人的疑問の代りに、何時も國家とか、祖國とかに就いての問題ばかりがある——今祖國が危急な場合、行動しなければならぬ、批判すべきでない——と、彼は言ふのである。

自己の偽りを以て、戦争を準備する政治家に、何ぜそんなことを爲るか、と、訊いて御覽——彼等は答へる、彼の目的は國際間の平和を來すにある、又此目的の達成は、理想的な、架空な議論では出來ない、外交と、軍備とによらなければならぬ、と、又軍人も丁度同様に、自分の生命の問題の代りに、一般的に、外交家が口にする露國の利益のやうな、他國領有の不信認、歐洲均勢を問題として、自分の生命や行動やに就ては考へない。

新聞記者に問ふて御覽、何ぜお前等はその文章で人民を煽て戦争させるかと。彼等は言ふ、戦争は大體に於て必要で、有益だ、特に今日の戦争は左様であると、そして此自個の意見を、不徹底な愛國的文句によつて、確め且つ丁度軍人や、外交家のやうに、彼新聞記者は個性を有し、生きた人間であり乍ら、御座なりに行動して、國民の利益、國家、文明、白人種などに就て語るのである。

丁度同様に總ての軍備主義者が、軍事に涉ることにて、辯明するのである。彼等は戦争を廢し度いには廢し度いが、それは今日は不可能だ、今彼等は露國人として、又人間として、農業、醫師、赤十字員とかの先達であるから、先づ行爲を以てし、言説を後廻しにせねばならんと言ふ。

同様なことをあらゆる事業の責任者が言ふのである……
彼は兵士と同様、今日戦争の必要があるかといふ問ひに駭くのである。彼は言ふ、全國民から托されたことを、しないわけには行かぬと、よく彼が戦争を大罪惡と認め、之を廢する手段を取り、又は取らないとしても、今それを宣言することも、又提議することも出來ない。之は露國の偉大と幸福とに必要である。

總て斯る人々は、何ぜ、彼、たとへば、イヴァン、ピオートル、ニコラーイの如き、自ら隣人を殺すことを禁ずるところか、却て之に愛を求め、それに奉仕を要求した者が、暴行に掠奪に、殺戮を事とする戦争に加はるかとの問ひに對して、彼等は一齋に常に答へる、彼等は祖國、信仰、宣誓、名譽、文明、人類未來の幸福、こぢつめた、譯の分らぬものゝ名で斯くの如く行動するのだと。その以前、斯る人々は平素、戦争を準備し、整理し批判するに多忙で、只その暇の時は休息するのみ、自分の生命を檢査する暇などはもたず、却て斯ることを怠惰と考へてゐるのである。

五

世の終りには恐ろしい禍が、避け難く期待されてゐて、それに對する準備をして置かねばならぬといふ考へが残つてゐる。十年間(今は既に四十年以上)あらゆる智恵が破壊の武器を發明するに集中され、間もなく、全軍を殲滅する若干の砲彈が出来た。銃を荷ふ者は以前とは違ひ、今は幾千の傭はれた貧乏人ではない、却て國民だ、全國民が御互に殺し合ふ支度をしてゐる。彼等を殺戮に馴らす爲めに、嫉妬を起させ、彼等が嫉まれてゐると信じさゝれる。おとなしい人民は之を信じて、そこで平和な市民の群は、御互に殺し合ふ馬鹿氣な命令を受けて、嘯ふべき國境の擴張、又は、商柔とか、殖民とかの利益の爲めに、互に野獸的の殘忍を以て攻撃するのである。

そして彼等は屠所に曳かるゝ羊の如く、何處に行くかを知りつゝ、自分の妻を残して、自分の子供は飢ゆることを知りつゝも出て行くのである。併し彼等は屠牧は彼等の義務なりと思ひ、神に對ひ、其血腥き仕事に祝福を乞ふ程に、欺かれ、巧言に浮かされ、有頂天になつて出掛るのである。彼等は自分の播いた收穫を踏みにぢり、自分が建た市を焼き、歡喜の歌、愉快な聲を揚げ、華かな樂を奏して進むのである。若し彼等が一致したらば、健全な思想と、友愛とを、野蠻で横着な外交の代りに、建設し得られるをも願はず、苦悶もなく、穩しく、柔順に出掛るのである。(エ、ローグ)

實見者は、彼が現下の日露戦争に、ワーリヤグ號の甲板に何が起つたかを見た話をしてゐる。光景は慘鼻すべきものだつた。到る處血と、人肉の斷片、首の無い屍、千切れた手、馴れた者でも嘔吐を催す血の臭氣があつた。戦闘橋樑は何よりも損害がひどかつた。榴彈が其頂邊で炸裂して其處で針路を指揮してゐた若い士官が殺された。不幸な士官から残つたものは、只器械を握つた一本の手であつた。指揮者と共に居た四人中、二人は微塵となり、他の二人は重傷を負ふた(私が語つた者は兩方の脚を切斷したが、更にも一度切斷する必要があつた)艦長は破片で蟬谷を打たれて殺された。

之が全部ではない。中立國人は、壞疽と熱とが傳染するのでその舟に負傷者を引受けることが出来なかつた。

壞疽や、傳染病が、飢、火事、破滅、チブス、天然痘等が戦争の光榮の一部である——之が戦争だ。

一方ジョゼフ、メストルは戦争の功徳を斯く頌歌した。

「人間の魂が、柔弱になつた結果、その弾性を失ふとき不修となり、腐敗を生ず、之は華美な文明の結果で、之を回復するものは只血である」

學士會員ヴォーゲ氏や、ブルンチエル氏も亦同様なことを語る。

併し自分等のうちから砲の餌食を出す貧乏人は之に同意しない権利を有する。

遺憾にも彼等は自分の確信を言ふ勇氣をもたぬ。故にあらゆる悪がある。久しく、自分の理解せぬ問題の爲めに、自分を殺すことに馴れて、彼等は之を續行し、萬事至極結構にいくものと想つてゐる。

其故に今彼處に死骸が横はつて、水の底で蝦の餌となつてゐる。

榴霰弾が彼等の周圍に炸裂するとき、よもや彼等は、華美な文明の爲め、其弾性を失つた當時代人の魂を回復し、彼等の幸福の爲め之が爲されてゐるのだと思つて、欣んではゐまい。

ジョゼフ、メストルを讀まぬ者は眞實不幸である。私は負傷者に、纏帶してゐるうちにそれを讀めと奨める。

彼等は戦争は絞架として又必要なることを學ぶであらう、何ぜかなれば、絞架の如く戦争も亦神の正義の發現であるから。

又此大思想は、軍醫の鋸が彼の骨をひくときにも慰藉となるだらう。(アルツァン)

私はルウスキヤ、ウエドモスチー紙上で露國の優越點は、人間の無盡蔵なるにある、といふ議論

を讀んだ。

子供の爲めに、その父を殺し、妻から良人を、母から倅を殺したなら、此人間はすぐに盡きる。

(露國の母の私信より)

千九百〇四年三月

足下はまだ文明國間に戦争の必要があるかと御質問なさる、私は御答へします、戦争は常に最早必要がないばかりか、何時だつて必要はなかつたのです、何時だつて、戦争は常に人類の正しい歴史的發展を破り、正義を破り、進歩を邪魔しました。

時に戦争の結果が一般文明の爲め有益な事があつても、其結果の有害なことが遙かに大きかつたのです。其大部分と、一番肝要なところは貴下の眼に觸れないのです。私共は、その有害な只一部分だけが直に見えるので、欺かれます。ですから、私共は未だといふ詞を許すことがありません。此詞を許すと、戦争の辯護者に、我々の間の争では、只時の一致や、個人の尊重やの事であると、主張する権利を與へます、そして我々の不一致は彼等が戦争をなほ有益と解するとき、私共は無益と解するによりといふことになります。彼等は問題を斯く決定するのなら悦んで私共に賛成致します、そして申します、戦争は實際に無益で、害すらある、併しそれは今日のことではなく、明日のことであると。今日彼等は戦争と呼ぶ、至極少數の人間を、私の名譽心を満足させるに用ゐられる彼の恐ろしい流血を、人間の上に来すことは必要と思つてゐます。

多數の者を損ねて、少數者の権力、榮譽富貴、大多數の自然な輕信と、此少數者により命じられ

又維持せられる迷信が戦争を可能ならしめるのです、ですから戦争は昔も矢張り斯うでした、今もそうです。(カストン、モッコ)

我々のキリスト教國の人民、我々時代の人民は、眞の道を外れて、行けば行く程、行べき方でない方に行くことを悟つてゐる人と同様である。而して道の眞實を疑へば、疑ふ程、愈々急速に、愈々自暴に、其道を急ぎ、何處かに行きつくだらうと、心を慰めてゐるのである。けれども彼の行く道は、只彼が既に眼前に見てゐる、滅亡の淵より外には行きつかぬことは全く明白にされる時が来た。

私共時代のキリスト教は今や斯る状態のうちに自身を見出すのである。全然明かなことは若し私共が、今日のやうな生活を續けて、個人にあつても、國家にあつても、一つに自分や、自國の幸福を冀ひ、今日の如く、此幸福を暴力により保證せんとするならば、必然暴力による相互及び國家の對抗は増大して、私共は第一に軍備の大負擔に堪えなくなり、第二に、戦争で相互に最も體力の勝れた者を殺すので、漸次滅亡して、道徳的にも墮落腐敗するといふことである。

若し私共の生活を改めないならば、斯くあるのである。之は又二條の並行せぬ線は合しななければならぬといふ、幾何學的の眞理と同じく、眞理である。況んや是が理論的に眞なるのみならず、一個の説として眞なるのでなく、今日では觀念として眞實となつてゐるのである。私共が墮ちて行く滅亡は既に見え始めた、そして最も單純で、非哲學的、無學な人々は、愈々相互の對抗を相像し、相互に戦争で亡ほし合ひ、私共は網の中の蜘蛛のやうに、只御互に殺し合ふより他には、取るべき道もないこ

とを、さとらざるを得ないのである。

誠實、眞面目に、賢い人々は、嘗て考へられたやうに、羅馬、シマールマン大帝、ナポレオンの世界的帝國、中世紀の教皇の權威、或は神聖同盟、或は歐洲會議、國際仲裁々判が出来れば又二三の人々が思ふやうに武力を増大して、新たに破壊の武器を有力にすれば、事が革まつていくと、安んじてはをられないのである。

歐洲諸邦の大王國又は共和國を建てることは、いろ／＼な歐洲國民が、一國家の下に統合されるを欲しないから、不可能である。國際問題の解決に國際間の仲裁々判を設定するのであるか？併し百萬の軍隊を有する者を、誰が仲裁々判の決定に服せしめ得やうか？軍備の廢止か？併し誰も始めるを欲しないし、始めもならない。さらに恐ろしい破壊の道具たとへば輕氣球で窒息瓦斯を詰めた爆彈、榴散彈を相互の上に撒きちらすやうなものを考案するか？何を考案したところが、總ての國家は斯る破壊の武器によつて建てられてゐるのである、大砲の餌は、嘗て冷たい武器の後に彈丸の下に進んだやうに又彈丸の後に沈着に、霰彈、爆彈、地雷の下に進んだやうに、今また空中船から撒布する有毒瓦斯をこめた爆彈の下に進むのである。

ムラヴィオーフ氏や、マルテンス教授が日露戦争は、海牙の平和會議に矛盾しないと言つたことは何よりも明白に、又此詞はどれ程まで私共世界の思想傳達機關たる言語が任せられ、又その明白、理義ある意味を全然失つたものであるかを、何物にも優つて明白に示してゐる。思想や詞は人民の行爲を指揮するが爲めに用ゐられず、どんな罪でも、その行爲を辯護するに用ゐられてゐる。最近の南阿戰

争や、やゝもすれば世界の大戦たらんとする現在の日露戦争は、聊かの疑もなく此事を證してゐる。あらゆる非軍備主義論が、戦闘の廢止に効果の薄いことは、恰も咬み合つてゐる犬に對して、お前等が争つてゐる其肉を、喧嘩の爲めに、滅茶苦茶にして失くするよりも、分けた方が得であると、雄辯に得心のいくやうに言つてきかすと同じである。私共は滅亡に逐ひやられて、止まることもならず、その中に飛び込むのである。

現に人類がそのうちに自らを見出す状態、又それが必然に曳き込まれて行く状態に就き考へてゐる賢き人には皆、此状態から脱する道は一つもない、私共が力なく曳かれ行く、彼の亡滅より救はるゝ處置も制度も考案することが出来ないことを明白に見ざるを得ないのである。

解き難く、愈々錯雜する、經濟上の危機は言はずもがな、相互の軍事的關係が刻々に戦争の破裂を豫想してゐることは、所謂る文明人を總て彼の不可避な亡滅に導いてゐることを明かに示してゐる。然らば何を施すべきか？

六

其使命を終るに際し、イエスは新らしい社會の基礎を建て給ふた、それまでは國民は一或は多數の主人に従ふこと、羊の群が其所有者に従ふが如くであつた——王侯及び強者はその傲りと慾とを以て人民を苦めた。イエスは此無秩序を廢し、俯した首を延ばさせ、奴隸を解放した。イエスは彼等に教へ給ふた、人は神の前に同等であるから、御互に自由である、何人も其兄弟の上に權利をも

つことは出来ぬ、平等と、自由は人性の神聖な律法で廢し難い、權力は正義たり得ない、社會組織に於ける權力は、義務、奉仕、或る種の奴隸である。全體の幸福から見、自身に對する自由の妨害である。イエスの建て給ふたのは斯る社會であつた。此社會は私共は世に見るか？之が世を支配する教へであるか？私共の世界で國家の王侯は、下僕であるか又主人であるか？千八百年に亘り代々キリスト教を傳へ、之を信ずると言はれてゐる、が世に何が變つたか？損なはれ、苦む國民は皆約束された自由を待つてゐる、そしてキリストの詞が不信用で、實行し難きが故ではなく、國民が或は、教への本旨は、各自の本性を確固たる意志を以て努力して完成することを悟らぬか、或は、自己の卑賤に眠つて、只一つ、眞理の爲めには死を覺悟する、勝利の道をとらぬからである。併し彼等は醒めた。既に何物か、彼等の間に動いてゐる。彼等は既に救ひは近けりと、語る聲を聞く。(ラメネ)

第十九世紀が新らしい路を踏むに努めてゐないとは認められぬ。此世紀の人々は法律や裁判が又國家に對しても設けられねばならぬこと、又國家の犯罪にも設けられねばならぬことを知り始めた尤も遙に大きな仕掛で行はれ、人民對人民の犯罪よりも憎悪が少からぬけれど。(クトレー)

總ての人は同一の起原で、一つの律法に従ひ、悉く一つの目的をもつてゐる。故に諸君も一つの信仰、一つの行爲の目的、一つの土地をもち、其下に闘はねばならぬ。行爲、

涙、それから苦痛は、何人も理解する人類共通の詞である。(イオシフ マザニ)

……否、私は、見た者の良心の刺戟を證據とする、如何にその同輩市民の血が流れたかを、又その故に、それ程の殺戮の重壓を負ふには一個の人で不足であつたかを。闘つてゐる者だけの人が入要であつたらう。彼等が設ける血の法律に責任を負ふが爲めに、彼等は少くともそれを理解するの要があつたらう。併し此處で話のある、最善の制度も、矢張り一時的のものである、何せなれば私はも一度繰り返へして言ふが、軍隊や戦争は廢止しなければならぬからと。私は他の場所で反駁した論辯家の詞にかゝはらず、外國人に對する戦争は神聖だといふことは眞實でない、土は血のアルカリであるといふことは眞實でない。戦争は神にも、又之れに加はつて、その恐怖を経験する人にさえも呪はれる。土は其河に天より水を、又清い露をその雲より求める。(アルフレッドグイニ)

人は強制し、義務つけられるが爲めに出来たものではない。人は互に此二つの習慣に墮落してゐる此處に狂氣、彼處に厚顔、而して何處にも人間の眞價はない。(コンシテラン)

若し朕が兵士の思想するやうになれば、一人たりとも軍隊に止る者はなくなるだらう。(フリード
リヒ第二世)

二千年の昔、洗禮のヨハネとその後キリストが人々に言つた『時は來れり、而して神の國は近けり、

悔の改めよ (Metanoia) 而して福音を信ぜよ (馬可傳第一章、十五節) と又『若し悔ひ改めずば、總て亡ぼさるべし』(路可傳第十三章五節) と。

併し人は彼に聽かなかつた。そして豫言の亡滅は既に近づいた。而して私共現代人は之を見ざるを得ない。私共は早や亡びつゝある、それ故に、時間的には古いけれど、私共には新たな救済の方法を馬耳東風に附し得られない。私共は、私共の、馬鹿な、無智な生活より起る他のあらゆる慘禍を除き只一つ軍備と、それに伴ふ避け難い戦争とは、必ず私共を滅ぼすことを見ざるを得ない。私共は、此罪惡を避けるべく、人間によりて考案されたあらゆる實行手段は、無力として、拒否し、又は、されべきものたるを見ざるを得ない。又相互に軍備を修める國民の慘禍は、愈々大ならざるを得ないとも見ざるを得ない。故にキリストの此詞は、何時、誰に向つてよりも、今日、我々に向つて程、大きな意味をもつてゐない。

キリストは言つた『悔ひ改めよ、即ち、その仕事を爲すに當つて、心に問へ、お前は何か？何處から來たか？又お前の任務は何か？そして此問に答へて、お前のするとは、お前の任務に本質的であるや否やを、責任のある確答をしる。私共の世界、私共の時代の人、即ちキリスト教の本質を知つた人にのみ少時其行爲を止めて、人々が彼を何と思ふか、即ち、皇帝とか、兵士とか、大臣とか、新聞記者とか思ふかといふことを忘れて、眞面目に自身に問ふ價值がある』『お前は誰で、お前の任務は何か？』と、之れ則ち自分の行爲の有益、合宜、合理を審議するが爲めである。私が皇帝、兵士、大臣、新聞記者たる以前に——現代のキリスト教國民は總て自分に答へねばならぬ——何よりも、私は人間でな

ければならぬ、換言すれば、時間空間を超越した世界の至上意志に遣された有限の實在で、その瞬時の試みを経て、死するもの、即ち、それから去るものであると。故に、私が自分に定め、人が又私に定める此個人的、社会的、或は全人類的目的は、虚しきもので、それは私の生命の短かきが故に、又世界の生命の無限なるが故に、其達成の爲めに私が此世に遣はされた、彼の至高な目的に従たるべきものである。此究竟目的は、私が有限の故に、達成し難いのだが、それは存在する（その存在の目的はなければならぬので）そして私の仕事たるや、其道具たるにある、則ち私の任務は、神の労働者として、其事業を爲すにある。斯く自己の任務を悟り、私共の世界、私共の時代の人總ては、皇帝より兵卒まで、彼自身、又は人が彼の上に負はせる彼の義務を見ないわけにはいかないのである。

私が戴冠しない前、皇帝と呼ばれぬ前に、（自分に皇帝と言ふべき筈である）私が國家の元首としての務めを果すべく、義務づけられる前に、私は、自分が見る彼の事に、私を此世に遣はせし至上意志の私に要求するところを果す約束がしてあるのである。此要求は常に私が知るのみでなく、又心に感ずるのである。之は私が神の意志に従ひ、其意志の私に要求することを履行するより、私が宣傳するキリストの律法に示してある如く、隣人を愛し、之に奉仕し、私と共に行動するより、私の欲する如く彼と働くことである。私は人を支配し、権力をもち、刑罰、及び最も恐怖すべき事——戦争を之でやるのであるか？

人は言ふ、私は之をしなくちやならぬと。神は言ふ、私は全然違つたことをしなけりやならぬと。それ故、私は一國の元首として、どれ程、暴力を振り、税金を取り、刑罰を行ひ、中にも戦争を爲し

即ち隣人を殺さねばならぬと言はれても、私は之を爲すを欲しない、又爲すを得ないと。

又人を殺すやうに教へられてゐる兵士も、戦争を準備するが自分の義務と思つてゐる大臣も、戦争を煽動する新聞記者も、同様に自身に言はねばならぬ、又私は何か、何を任務とするかの疑問に逢着する人は總て同様にしなければならぬ。只一國の元首が戦争を行ふを止め、大臣が準備することを止め、兵士が戦ひをやめ、新聞記者が煽動を止めたなら、別に法律も、手段も、同勢も、裁判もなくして、人間が戦争の爲めに陥つてゐる又彼等が自分で背負ふてゐるあらゆる惨苦の爲め遁路のない此状態は自然に消滅するのである。

斯の如く、之は如何にも奇怪に思はれるが、全然眞實、且つ人間を、自らその背に負ふ惨苦、特に其中でも甚しき戦争より救ひ出す疑ひのない方法である。之は何か外的の手段では達し得られない、只キリストが千九百年以前に提議された各個人の自省、則ち、我は何者、何故に生きるか、何を爲すべきか、何を爲すべからざるかを、自身に問ふことである。

七

宗教は人間性質の、永續的原素から成立してゐないといふ説が、廣まつてゐる、多くの者は私共に語つて曰ふ、之は只、昔、比較的人間の開けなかつた時代の人々に特有な、思想感情の一面たるに過ぎない、又之は人が段々と艾除されて、遂には後ろに置き去りにするものであると。

私共は冷靜に此問題を考へ得るのである。蓋し若し宗教が迷信であるならば、明白に私共はそれ

を艾除せねばならぬのだから、若し宗教が人類至高の思想と、至上の生活に固有であるならば、此問題のキリスト教の研究は之を私共に示す筈である。若し足下が、各貨幣に極印を見るなら、又その極印が皆同じであるなら、此極印のある貨幣は何れも眞貨であることを、疑ふことなく信じなければならぬ。されば足下が人間の性質、或は何等か他の生物の性質に、一般的、且永続的な特異性を發見するところには皆、足下は、世には、此特異性を喚起する、之に契合する何物かが存するを信じ得られるのである。足下は、何時、如何なる處でも人間が、宗教的の者たるを發見するのである。足下は到る處彼が、その周囲の不可見世界を信する者たるを發見するのである。如何なる説を土臺として、足下が全世界を觀るとも、世界は、現に私共があるが如く、私共を造つたのである。又若し世界が欺瞞でないならば、私共のうちに此世界に適合する現實が存するのである、何ぜかなれば、現實の世界は私共のうちに此特性を喚び起すからである。(サザエーザ)

宗教は人を教育するに最上な、功績者である。それは文明の最も偉大な力である。一面に又信仰の外的表現と、政治上の利己的行動とは人類進歩の重大な障害である。宗教家の行動と國家のそれとは、宗教の反對に立つ。私共の研究によれば、宗教の本眞は、人の心が感じ、且つ動いてゐるところならば何處でも一樣に滿される。永遠、敬虔なものである。私共が研究の結論は、總て偉大な宗教は同一の基礎に立ち、只一つの教へで、人類の原始から今日に至るまで發達してきたものである……。

一切信仰の根底には、唯一、永久な啓示人間に對して神の詞、唯一の宗教の流れが通つてゐる。パシー人にそのターヴィヂを、猶太人にその護符テラフィムを、基督教徒にその十字架を回教徒にその新月を許るすも、彼等に皆之は單に形式であり、表章であることを語らせ、一方あらゆる宗教の眞諦は——隣人に對する愛である事と、之は麻奴、ゾーラスター、佛陀、モーゼ、ソクラテース、ヒレル、耶蘇、保羅、モハメットによりて皆一樣に求められるところであることを悟らせるべきである。(モリスフリーユゲル)

共通の信仰と、共通の目的なしには、一つの物も存在し得ない。政治行動は末で、宗教は本である。此信仰のなき處、不斷動搖して、他の者の迷惑する大多數の意志が威をふるふ。神なくして人を制し得れど、之を説服し難い。神なくしては多數は暴君となり、人間の教育者たり得ない。私共に入用なもの、國民に入用なもの私共の世紀が求めるもの、之が汚されてゐる利己主義、懷疑、否定の汚穢からの遁路は、それによつて、只私共の靈が、私の追求に遇ふを止め得べく求めるものは、總てが一致して、一つの向上と、一つの神法、一つの目的を認めて進み得べき信仰である。あらゆる力強い信仰は、いろいろな癩れた、舊い、死滅した宗教の上に取り、現存の一般の秩序を送改するものである。蓋し力強い信仰は必然に人間の行爲の諸の部門には附屬物となつてゐるからである。

人間はいろいろの形、いろいろな程度で主の祈りの詞御國を天に於ける如く、地にも來らせ給へ』と、繰り返すものである。(マザニー)

人間は今日生きてゐる生物中の生物として自分を見ることが出来る。彼は自分を又家族の一員、社會の一人と、幾代も生活し來つた國家の一人としてみることも出来る。又（彼の智性が之に導くを支え難き故に）無限の時間に生存する、無限な世界の一部として自分を見る事も出来れば、又相違なく見えさせなければならぬ。それ故に賢い人は人生の身近な現象に關して以外に、時處を絶しそれ故自分には不可知の世界に關係を結び、それを一個の完全なものと悟るのである。自分が其一部たるを感じ、自分の行爲をそれに基かし、斯る不可知の完全に人が關係を結ぶことが、宗教と呼ぶものである。それ故に宗教は存在した、そして賢明な人、理智的人類の生活に閑却し難き必要條件として絶やし得ないのである。

眞の宗教は自分を取り捲く無限の生命との關係の此設定で、之が人生を此無限に結び付け、其行動を支配するものである。（エルト、トルストイ）

宗教は（客觀的に觀れば）神の教へに對する私共の義務を承認することである。（カント）

當代の人間が苦む罪惡は、人間の行爲を理智的に指導する一つ物を缺いで、大多數が生活するによる。則ち無宗教——といつても彼の娛樂、慰藉、興奮を與へる儀式を修める宗教ではなく、人間を萬有と神とに關係せしめ、其結果人類の行爲を、一般的に向上せしめ、それなくんば人は動物の列に残さ

るか、或はそれ以下にすら墜さるゝ彼の宗教が無くして生活するが故である。此人をして避け難き滅亡に導き入れる罪惡は特に現代に著しいといふのは、人生に於ける英明な指針を失ひ、全力を智識の開發、完修、特に實用に注ぐ爲めに、現代人は、自然力の上に、莫大な勢力を振ふに至つた。此勢力の理智的指導を有つた爲め、人は自然にそれを最も卑しい、動物的の快樂を満足せしめることに用ゆるに至らしめた。

宗教を離れた人間が、自然の力の上に大勢力をふるふことは、恰も子供が火藥や、爆發瓦斯を弄ぶと同様である。利用せらるゝ力を、又如何にそれを使用するかを見れば、現代人は、其道徳的發達の程度では、人は常に鐵道、汽船、電信、電話、寫眞、無線電信を利用する権利がないのみならず、又單簡な鍍鋼鐵の細工品すら用ゐる権利がないことを感ぜしむる。蓋し彼等はその修得と技術とを只、自分の娛樂や相互に殺戮し合ふ事にのみ用ゐるが故である。

然らば何を爲すべきか？、此あらゆる人生の修得、此總ての人間の獲得した偉力を棄て去るか？、不可能である。如何に此智惠の實が悪しく實用されても、それでも人の克ち得たもので、人は之を忘れることが出来ない。數百年來の人類の結合を廢して、新らしきものを建てるとするか？、少數者の詐騙を防ぎ大多數を開發する新制度を考案するか？、智識を普及するか？、是等は皆試みられて、熱心を以て爲されたのであつた。此所謂矯正の方法は主に、自家忘却、避け難き亡滅の意識から自己を引き去ることかあつた。國境を改訂し、制度を變更し、智識を普及する、併し人は他の方面では、他の制度、大きな智識を以て、元の動物として残り、常に相互に滅ぼすことを怠らず、又は奴隸として

今まで斯くあり、又將來も然るのである。そして一方には宗教的良心に支配されず、慾情や、批判や出來心に驅られて身を處するのである。

人間には選擇がない、彼は奴隷のうちでも最も厚顔無耻な奴隷とならねばならぬか、又は神の奴隷とならねばならぬかである、何せかなれば、人には自由となる手段は只一つほかないから、則ち自個の意志を神の意志に結び付けるより他に致方がないからである。宗教を離れた人間は一部は宗教そのものを抛つた者で、他は宗教を變化せしめた、彼の怪しい外的の形を承認して、只自分一個の劣情や、苦艱や、人間の法律や、相互催眠やによつて身を處する人々で、動物たり、奴隷たることを止めず、且つ又如何なる外的努力も彼等を斯る状態から出すとが出来ないのである、何せかなれば、只宗教のみが人を自由ならしめ得るが故である。

併し現代人の大多数は宗教を離れてゐる。

八

お前の良心の咎めるとをするな、又眞理にかなはぬとを語るな。之を最も肝要なととして守るなら、お前は其人生の問題を解いたものだ。

何人もお前の意志を拒げるとは出來ない。意志に對する盗人や強盜は居ない。無智なとを望むな、多人數の一員として個人ならぬ、一般の幸福を望め。人生の問題は大多數の側に立つてではない、少數者の列に落ちないものである。

己れに似せて造つた人間から、人間らしい稱讃や、光榮を望まぬ神のあることを記憶しなさい。併し人は自分に與へられた叡智により自分の行爲を以て神に自分を似せたことを記憶しなさい。事實無花果はその仕事に忠實である、犬も蜜蜂も亦同様である。併し人は其任を全うすることは出來ないか？遺憾なるかな、此偉大にして、神聖な眞理はお前の記憶に薄れてゐる。日常生活の浮虚、戦争、無智な心配、靈の孤獨、及び奴隷となる習慣は彼等を壓迫する。

その節から切られた枝は、獨りで其幹から離れる。人は他の人から切り離さるれば、總ての人類から離れる。けれども枝は他人の手でもつて截り去られる。人は自ら其隣人と憎惡により離反し、その事が直に自分を人類から引き離すことが眞なることを知らない。人間を兄弟と呼んで、一般的生活を命じた神は、人間が採用してゐる土臺を壞した後に、彼等の自由を許した。(マールカスアウレリウス)

文明は人間自身によつてたもたれてゐるその幼稚からの脱路である。幼稚とは自分の智恵を他人の指揮なしには扱ひのならぬことである。此幼稚が彼自らによつて保たれてゐるのは其原因が、理智の不足にあるのではなく、却て他人の指揮なしにはそれを利用するだけの決意と勇氣の不足な場合である。Sapere aude (敢て賢かるべし)である。

本來の理智を用ゆべく勇氣あれ。是が文明の標語である。(カント)

イエスの宣傳した宗教を、それ身體がイエスである彼の宗教から、釋き放す必要がある。又私共

が、永遠な福音の始めと、基礎的細胞とを知つた時は、それを止めて置かねばならぬ。

田舎のあはれな燈明皿や、行ふ小さな蠟燭が太陽の偉大な、遠つた光りの前に消えると同じく、ツマラヌ、局部的の、偶然な、又怪しい奇蹟は、靈の生活の法則の前に、偉大な、透明な、神によつて導かれる人間歴史の前に消え失せてしまふ。(アミエル)

私は次の状態を何等の證明なしに承認する、人が神を喜ばせようと、思ふ事は、その善き生活を除けば、只宗教上の迷妄と迷信である。(カント)

眞實神の崇拜法は只一つである——それは自分の義務の履行と、合理的な行爲である。(リヒテンベルグ)

けれども私共が悩む此罪惡のなくなる爲めに、いろ／＼な、浮世の行爲にかまけた人々は言ふ、二三の人々ではなく、あらゆる人々が、自省して、又自省して、一樣にその生活の意義は神の御意を爲し、又隣人に奉仕するにあることをさとするのが必要であると。

そんなことが出来るものだらうか？。

嘗に出来るばかりか——と私は答へる——然らざるを得ない。

人は自省せざるを得ない、則ち、各々の人は自らに問題を提出せざるを得ない、私は何者か、何故に生くるかと、それ故に人は叡智の生物として、何故に生きるかを知らずしては生きることは出来ない

い、されば常に自らに此問題を課し、常に其發達の程度に従ひ、之に對して宗教によつて答へたのである。現代に於ては人が内心に感ずる矛盾が、切實に此問題を喚起し、その答へを求めるのである。そこで現代人は、人に對する愛と、奉仕を人生の法則と認めるより外には、此問題に答へられないのである。何せなれば是が人生に對する思想の唯一な賢い答であるが故である。又此答は千九百年以前に、キリストの教へに表はられ、正しくその如く全人類の大多數に宣傳せられたからである。

此答は現代キリスト教徒の心に潜伏してゐるが、明らかに表れないし、又私共生活の指針に用立てるないといふ理由は人は一面學者と呼ぶ、至大の典據によつて、宗教は、人類進化の一時的のもので、それを生き残してゐる、又人は宗教なしに生きていかれるといふ深い迷妄に陥つて、此迷妄は高等教育を受けた者の頭に浸潤してゐる、更に一方、權力をもつ人は意識的に、又屢々無意識的に人々のうちに、キリストの宗教として通つてゐる深い迷信を支持し、又喚起するが故である。

此二つの欺妄が消滅さえすれば、現代人の心に潜む彼の眞正の宗教は、明々白、且つ否み難くあるのである。

斯く成るには、學問ある者が、總ての人は兄弟で、自己の欲する如く他に爲す原則は、ざらにあるやうな、何か他人の考へに雷同附和するが如きものではない、他人の考へ以上にあつて、疑を容れざる、人と萬有人と神との止み得き關係より出づるものであつて、宗教中の宗教、それ故に常に當然爲さねばならぬものたることを悟らねばならぬのである。

又他面、意識的又は無意識的に、キリスト教の假面の下に、甚しい迷信を教へてゐる人々は、彼等

が支持し、宣傳する彼の神學や儀禮は、彼等が思ふが如き、顯著なものではなく、却て甚しく有害で人より神意の履行、人類同胞の教養、人への奉仕、又己れの欲する如く他に施す原則は、文字上のキリスト教でなく、之が聖書にある如く、總て實行の教であるといふ、唯一な宗教的眞理を隠すものたることを悟らねばならぬ。

現代人が一樣に人生の意義を自分に提出し、一樣に之に答へるには、自分を文明人と思ふ人達が、宗教は野蠻の遺風、人間のよき生活には智識の普及、則ち様々な知識があれば、それが人を正義、道徳の生活に導くといふ考へを抱くことや、之を他人に鼓吹することを止むべきである。そして人間の善良な生活に、宗教は人用である、此宗教は既に存在し、現代人の心に生きてゐることを悟り、故意に又は無意識に人民に迷信を鼓吹してゐる人々は、斯ることを止め、キリスト教に於て肝要且つ偽さねばならぬことは只神と隣人への愛、已れ他人にせられんと欲ふ如く、他にも行ふことゝ是にあらゆる律法と預言者とがあることを承認すべきである。

若し偽せキリスト教徒も、又科學者も一樣に、彼等が今日その偽りの、虚しき、不必要なものを宣傳するが如く、此簡單、明白、必要な眞理を小兒や無學者に宣傳したならば、總ての人は一樣に自分の生活の意義を理解し、一樣にそれより引き出した義務を承認するだらう。

九

けれども、只今、私共露人が、既に敵が私共を攻撃し、私共の民を殺し、私共を脅かす時に、私共

露國の兵士、士官、大將、皇帝、個人は如何に行動すべきか？——と私は訊かれる。敵は私共の領土を荒し、私共の生産を奪ひ、私共を捕虜とし、私共を殺すと、思はれないか？

併し、誰が始めたにしても、戦争を始めるに先ち、——自省した人皆は答へねばならぬ——何よりも先づ、自分の生の事業が始められてゐる。併し私の生命の事業は、旅順口が支那の手にあらうが、それとも日本の手にあらうが、又露國の手にあらうが、一向關係はないのだ。私の生命の事業は私を此世に遣はした者の御旨を行ふにある。そして此意志は私に知れてゐる。其意志は私が隣人を愛し、神に仕へるにある。何の故に一時的、便宜的、無智殘酷な要求に従つて、私に知らされた、永遠不朽の我が生活の法則を無視し得やうか？若し神が在まれば、神は私の死ぬ時（それは刻々に期待される）私が雲南浦をその林産と共に、或は旅順口を、或は露國と名付け、神が私にお任せにはならなかつた此物を防禦したかとお訊きなさいはしない、却つて私は神が私の處置にお任せなかつた此人生をどうしたか、それを指命された如くに使用し、如何なる状態の下に私にそれが眞實であつたかをお訊きなさいるのである。私は神の律法を守つたか？

されば今日戦争の始まつてゐる時、私、自らの使命を悟つてゐる者には、如何なる状態に在つても私は答へて、如何なる事情があつても——戦争が始まつたにせよ、又始まらなかつたにせよ、幾人の日本人や露國人が殺され、又は旅順口どころか、ペテルブルグや莫斯科すら占領されても——私は神の命じ給ふ事以外には身を處し得ない、何せかなれば、私は人として、直接にも又間接にも、處置にても、援助にても、又鼓舞を以てしても戦争に干與する事は出来ない、私には出来ない、欲しない、

又、そうはなれない、と言ふ外はない。私が神意に反することを止めた結果が直に、どうなるか又間もなくどうなるかは、私は知らぬ、知ることが出来ない、併し私は信する、神意を行つたらば、自分にも又他人にも善からざるを得ないと。

人は稱して言ふ、若し私共露國人が今戦争を止したなら、日本人はその欲するものを私共から取り上げるだらうと。

併し若し人間の獸化、亡滅を救ふ方法は唯一つ所といふことが眞實とすれば、則ち隣人への愛と奉仕とを求め宗教を建てることだとすれば、凡て戦争、戦争の部分、私が戦争に加はることは愈々此唯一の可能な救済の實現を困難ならしめ、それから遠ざからしめるものである。されば、よしその結果を豫想して行動を決するとしても、日本人がその欲するもの凡てを露國から奪ひ去るにしても、破壊や殺人を廢する疑ひのない幸福だけが、私共の手に残り、日本人の掠奪が却て人を亡滅より救ふ唯一の手段に近けるのである、蓋し戦争の繼續は、それが如何な結末を告げやうとも、此唯一の救済手段から遠のくものたるが故である。

又曰ふ、そんなことなら、人が皆、でなくとも大部分の人が戦争に加はることを拒む時、始めて實現されることではないかと。一個人が之を拒むは、皇帝であらうと兵士であらうと、誰の爲めともなく無益に自分の生命を失くするものではないか。普通の人々が兵役を拒んだら、彼は軍紀に背くので、銃殺されるだらう。では何ぜ、何の益もないのに自分を殺して、社會の益を計り得るのであるか？ と、自個が人生

の意義を思はず、その故にそれを理解せぬ人々は言ふのである。

併し自個が生存の意義を理解してゐる、宗教的人人は之を感じ、之を口にするのである。斯る人々は其行爲の豫想された結果によつて動かない、自分が人生に於ける使命をさとして動くのである。職工は工場に出て、自分に定まつた仕事をして、其仕事の結果がどうなるかを豫想しない。兵士も亦指揮官の命に従つて同様に動く。宗教的人物も亦同様、神の命せし通りに、その結果が如何なるかを確知しないで行動するのである。それ故に宗教的人物は、自分と同様に行動する者が多いか、少ないかを問題にしない、又彼が爲すべきことを爲すならば、それが時季であるかないかを願感しない。彼は知つてゐるのだ、死生の外に何物も存するなく、死生は只彼が仕へる人の御手にあると。

宗教的人物は斯く行爲すれど、彼が斯く行爲するを欲するが故に非ずして、或は彼に、又は餘人に有益なるが故に、之以外に行動しないのではない、却て彼の生活は神意に在ることを信じて、是以外に行動し得ないからである。此處に宗教的人物の行動の特殊性がある。

それ故に人が自ら招く彼の慘禍から救はれるのは、彼等が利益や、批判で指導せられず、宗教的自覺によりて指導せられる程度による。

……敬神な人物……之こそ世を維持する神祕なる鹽である、何ぜかなれば、世の物は只神の鹽が力を失はぬ限り、保つていけるのであるから、故に鹽若し味を失はば、何を以て之に味をつくべきぞ、

そは土の用も肥料の用をも爲さず、只抛てられんのみ。耳ありて聞ゆる者は聞くべし。私共にとりては、神が試むる者に、私等を試むべく力を與へ給ふ時、試みられるのであるが、神が私共を惱ますを欲し給はざるときは、私共は已れを救ふ此世の眞中にありてすら驚くべき平安を受けるのである。そして私共は「信ぜよ、我世に勝てり」と呼んだお仁の保護の下にあると察しられるのである。ツエルジールは尙ほ曰ふ「歐洲、亞細亞、リビヤの總ての住民が、希臘人も野蠻人も同一の法律に従ふことを諾することは不可能である。そんなことを思ふは——と彼が曰ふ——即ち何にも理解してゐないからだ」と。私共は曰ふ、之は昔に可能であるのみならず、聽て叡智の生物が同一の法律の下に總合する時は來るのであると。蓋し詞と叡智とは人に降臨して、人をその固有な完璧を以て感化したからである。

醫術の及ばぬ病氣や負傷があつても、靈にはそんなものは無い、神である至上な叡智に、醫すべからぬ、斯る罪惡は一つもない。(オリーゲン)

私は時と共に世を感化する力を自身に感ずる。それは押えもせねば、打ちもしない、けれども私は、いかにこれが強く、不可抗に私を惹くかを感じる。

又私は何者かと、私が無意識に他を引くと同様、私を引くのを見る。

私はそれを引き寄せる。すると先方でも私を引き寄せる、すると私共は新たな結合に努力してゐることをさとする。磁石にふれてみよ、お前自分磁石になる。そして私共が自己の使命、自己の力を

知れば知る程、愈々新らしく作られた世界は明瞭になつてくる。私共は神自身より法律を受けて、神の律法の授與者となるのである。又人間の法律は私共の前に消滅し或は枯涸するのである。

すると私は自分に來た此勢力に訊いた、お前は誰かと。

勢力は答へた、私は、天の女皇たる愛だ、愛人たらんと欲する——地の女皇として。

私は天の如何なる力よりも最も強い、そこで私は未來の國を造りに來たのである。(クロスビー)

神の國が私共に來たことは、何處かに、一般的理智の宗教に、教會の信仰が段々變化して行く原則を卸したのを見ても、充分根據のある説である。尤も此王國の完全な實現は、無限に私共より距つてゐるだらうといふのは、此原則には既に、發育生長すべき胚種に於けるが如く、世を照らし、之を支配する一切のものを含有するからである。

世界の生命に於ては千年は一日に同じ事である。私共は忍耐して此實現に努め、之を期待せねばならぬ。(カント)

神に就いて、私がお前に語るとき、お前は、私が何か金銀で造つたものに就いて、お前に語つてゐると、考へないで呉れ。私がお前に語る神は、お前の其靈に感ずる神である。お前は神を自身に持つてゐるのだが、お前の汚ない念ひや、間違つた行爲はお前の心に神を描く邪魔になるのだ。お前が神として拜む黄金の偶像の前では、お前は價值なき些事にも注意するが、お前自身のうちにあ

つて一切を見聞してゐる其神の前では、お前の暗い心や行爲をしても、顔も赭めはしない。若し私共が、内なる神は、私共が思想行爲一切の實見者であることを知らうものなら、私共は罪を犯すことを止め、神は永遠に私共に住み給ふだらう。だから常に神を記憶し之を思ひ、及ぶ限り屢々神と語りなさい。(エヒクテータス)

併し私共を襲ふ敵をどうしやうか？

汝等の敵を愛せよ、然らば汝等に敵なからんと、十二使徒は教へられた。そしてこの答へは、敵に對する愛の教へを比喩的のものであると、そのままに解釋せず、他の事に解することに馴れた人々のやうに、詞ではない。此答へは、非常に明白な、決定的の行爲と、その結果とである。

敵、日本人、支那人、此黄色な人間を愛する。——それに對して迷ひの人々が今私共のうちに憎惡を起すに努めてゐる——を愛することは、則ち、英國人がやつた如く、彼等を阿片を以て毒する權利をもつが爲めに、彼等を殺さぬこと、佛、露、獨人がしたやうに彼等の土地を奪ふ爲めに、彼等を殺さぬこと、道路破壊の故に彼等を生きながら土に埋めぬこと、彼等を束ねて露國人が爲した如く、黒龍江に沈めぬことである。

『弟子は師にまさらず……弟子はその師の如くありなば足れり。』

私共が敵と呼ぶ黄人を愛するとは、キリスト教の名で、馬鹿氣な迷信的な罪や、贖罪や復活などを教へぬことだ。彼等に人を欺き、人を殺す術を教へぬことである。そして正義、無慾、慈悲、愛を曾

に詞を以てのみならず又私共の善き生活を以て模範として教へることである。

私どもは彼等に何を爲したか、又何をしてゐるか？ 若し私共が確に敵を愛したならば、よしや今敵の日本人を愛し始めても、私共には敵はないのであらう。

であるから、是は軍略、軍事、外交、海軍、財政、經濟の計畫、革命、社會主義の宣傳、その他いろ／＼な無益な仕事に忙しく、之でもつて人間を此慘禍から救へると思つてゐる人々には、如何にも奇怪に見えるであらうが、人間を戦争、貧困より救出することは、平和の聯盟をつくる王や皇帝でも、帝王を廢し、乃至は之を憲法で束縛し、或は、王政を共和制に変更する人々でも、平和會議でも、社會主義の實行でも、陸海の戦闘でも、書籍でも、大學でも、今日科學と呼ばれる彼の怠惰な智識の應用でもない、只非聖靈者(聖三位一體の靈)を否定する人々、露國に於けるドロジニー、オリホヰイキの如き、埃國のナザレ派、佛蘭西のゴントヂエ、和蘭のテルヴー其他の如く、其目的を人生外部の變革に向けず、自分を世に遣はした者の意志を自分に加て最正確に守ること、その遂行に自個の全精力を注ぐ、素朴な人々が愈々増加することによつてのみ爲されるのである。斯る人々のみが、自分のうちに、自分の靈のうち神の國を實現するのである。直接に此目的に努力せずして、萬人の靈が期待するその神國を建設するのである。救ひは只此一路あるのみ、又他に何等の路があるのでない。故に今日、人を支配してそれに宗教的、愛國的の迷信を吹き込み、それを排斥、憎惡、殺人に煽て上げる人間や、或は又人を奴隸や迫害から脱れ出でしめる爲めに、それを暴力的外面の革命に誘致する者や、或は又大部分、多くの場合に無益な智恵を人が獲得すれば、獨りで善良な生活がくると思つてゐる者共に爲されること

は、之等は總て、人をその求むる唯一の物より引き離し、只その救ひの可能より遠ざからしむるのみである。

キリスト教國の人が苦む惡は、彼等が一時宗教を棄てたからである。

宗教の本質と、現代人の智識の程度や科學の發達とは相一致しないと思ふ一派の人々は、宗教は全然不必要と極めてしまつて、宗教なしに生活し、宗教は何にかゝりなく無益であると言ひふらす、又他の一派は彼の墮落したキリスト教の外形を保有して、丁度無宗教で生活するが如く、宗教は今、空虚、外面的な形式を教へ指南するにたへなくなつてゐる。然るに現代の要求に應じて、宗教は存在し且つ總ての人々に知らされ、且つキリスト教徒の心底に隠れて生きてゐる。それ故に此宗教が發現、且つ人生の意義となるには、學問ある多數人の指南たる人々が、宗教無しでは人間は善良な生活を送れない、又科學は宗教の代りを爲すことが出来ないと悟るべきである。又權力を有ち、古き宗教の形を保有する人々は、彼等が宗教の外見を以て、維持し、宣傳する舊き、空虚な形骸は宗教でないのみならず、又人が既に知つて、只彼を慘禍より救ひ出す唯一の眞正な宗教を攝取することに主要な障害を與へるものたることを悟るべきである。

斯の如く人間唯一の愛の救ひは、人間の良心に住む、眞の宗教を人が攝取することを妨げぬにある。

一一

此地に驚くべき事と憎むべきこと行はる。豫言者は偽りて豫言をなし、祭司は彼の手によりて治

め、我民は斯る事を愛す、されど汝等その終に何をなさんとするや(耶利米亞記第五章三十一節)

我が國民は目にて見、心にて悟り、改めて醫ひやさんことを得ざらんが爲に、彼その目を替し、其心を頑梗にだせり、此故に彼等を信する能はず(約翰傳第十二章四十節)

最も優れる武器は即ち最も祝福せられざる武器なり。故に賢者は之に頼らず。之は何よりも平安を學す。之は征服するも喜ぶ能はず。勝利の喜悅は則ち殺人の喜悅也、殺人を喜ぶ者は目的を達する能はず。

若し旅人が、何れかの離島に、人や家が武器が備へられ、日夜その周圍を哨兵が巡回してゐるのを見たなら、彼は其島には矢張盜が棲むと思はざるを得なからう。之が歐洲と同様ではないだらうか?

宗教が人に對する勢力の少ないのか、それとも私共が眞の宗教を去ること未だ遠いのかである。(リヒテンベルヒ)

私が此一節を書き終つたとき、旅順口の爲めに六百の無辜むこの人命が失はれた報知を得た。此不幸な人々の無益な苦痛や死は、その滅亡の原因たりしものの迷ひを解かなかつたであらう。私はマカーロフや其他の士官のことを言つてゐるのではない、是等の人々は皆、何を、何ぜやつてゐるかを知つて

るた、そして利慾名譽心から、表面をかくし、一般的な偽りの愛國心に隠れて事を爲したのである。私が言ふものは、彼の不幸な、全露國から蒐められた人々である、宗教的欺瞞にたすけられ、刑罰の脅かしを受け、其正直な、賢い、有益な労働、宗教的生活から引き離され、世界の彼方に追ひやられ、残酷な、愚かな殺人器械に乗り組み、微塵に碎かれ、此機械と共に、遠くの海に沈み、何の用にもならず、其辛苦、艱難、努力、死を何物にも利用することのなかつた人々のことを言ふのである。千八百三十年波蘭土戦争の時、プロビーツクからベテルブルグに遣られた副官、ヴィレジンスキーが、露國軍隊がポーランドに入るについてヂウイチユの示した條件に就て、ヂウイチユとの佛語の會談で、ヴィレジンスキーは言つた。

—元帥閣下、私は、此條件で、ポーランド國民が此布告を承認することは、不可能と存じます。皇帝は讓歩なさらんと御信じなさい。

—では遺憾ながら、私は戦争を豫見します。多くの血が流され、多くの不幸な犠牲があります。貴下は無益なことを御考へです、雙方最大の損害は一萬で、是だけが皆ぢやありませんか。

ヴィレジンスキーは心に附け足した『それぢや軍司令官は此戦争での損害が露國人だけが六萬以上あつて、之が敵の銃砲火によるのみならず、病氣によること、又彼の人自分がそのうちの一人であることを思はないのだな』

“Tis milles homms eh folia dou?”

と、ヂビーチが獨逸流のアクセントで言つた、彼が他の者と共に、數千、數百の、露波兵士の死を宣

告し、又は宣告しない權を有つことを充分に信じて。

斯ることがあり得べしとは信じられない——斯る馬鹿な、愚かなことが。併し是はあつたのである、家族を養ふ六萬の人がその意志により失はれたのであつた。そして今又左様のことが起つてゐる。日本人を滿洲に入れまい、朝鮮から放逐しようとするれば必ず一萬より少からず、五萬以上の人をつかふ必要がある。私は知らない、詞が出されたか……ヘクロバートキンはヂーチと同様、此爲めに露國の方から五萬人より多くは、いらぬ、たゞそれだけだと言つたらう。併し彼等は思はざるを得ない、何故かなれば、彼等が爲す事は自ら口をきくのであるから、此今極東に不斷に流れ込む、欺かれた、不幸な露國の農民は則ち生きてゐる露國民のうちの五萬より多からぬ人間で……それをアレクセークロバートキンが、不道德、虚榮にして、安閑と宮城のうちに座し、新らしい光榮と新らしき利益と、儲けとを、何の罪咎もない、自分の身を苦め、自分の生命を棄て、何にも得るところのない、不幸な、欺かれた、露國労働者の此五萬人の死から待ち受けてゐる者共の爲めに殺すことに決定し、又これから殺すのである。露國民が所有權をもたず、其法律上の所有者から奪ひ、又實際露人に必要のない他國の土地の爲め、其上なほも朝鮮で、他國の山林の爲め金儲をすることを望む山師の暗い行爲の爲め、鉅億の金を浪費する、即ち全露國民の労働の大半を奪ひ、次の國民に負債を残し、労働者から、其最上の労働を奪ひ、假借なくその子息の幾萬を死に引き入れるのである。而して此不幸な人々の滅亡は既に始まつてゐる。況してや戦争は、それを斯の如く、愚劣に、輕卒に計畫する人々によつて行はれるのである。或る新聞が、露國が成功の最大の機會は其無盡藏の人力によると書いた程皆先見な

く、無川意なのである。幾萬の露國民を死地に送る人々は之を算勘に入れてゐる。

人は直に言ふ、私共の艦隊が不幸な敗北は陸に於て復讐されねばならぬと。露國人が斯く言ふ意味は統帥者が海戦に失策をやらかして數百萬の國費と數千の人命とを損じたから、私共は更に數萬の人命を殺す覺悟で報るねばならぬと言つてゐるのである。

歩るく蟋蟀が川越をする時には、下になつた者が溺れて、その溺れた者が橋を爲し、之れを上のが渡つて行くのである。露國民が丁度斯く如くせられてゐる。

そして現に第一番の下層の者が溺れ始めて、同様に死に行く、次の者にその道を示してゐる。

然らば此恐ろしきその擁護者、處理者、煽動者等は其の罪を悟り出したか？少しも彼等は自個の義務を果したし又果してゐると全然信じて、自分の行爲を自慢してゐるのである。

勇敢なマカロフのみを話しては、異口同音彼は人殺しの名人であつたことを言ひ、幾百萬留に位した、精良な殺人器の損失を惜み、あはれな、迷つたマカロフにも劣らぬ殺人の巧みな者を如何にして發見するかを論じ或は更に有力な殺人機械を考案し、此恐ろしき事の凡ての責任者等は……最後の新聞記者に至るまで、皆異口同音に、新たな無智殘虐、動物的、憎人間的の努力を喚起してゐる。

「マカロフは露國に一人あるのではない、誰でも彼の位置に置かれ、提督となさるれば、彼は仕事を、そして故マカロフの戦略、戦争を忠實に續けるのである」と、「ノヴォーエ ヴレーミヤ」が書いた。

「私共をして熱心に神に祈らしめよ、私共の靈を此神聖な祖國の爲めに注ぐことを、而して私共の

祖國は、私共に新たらしき、又同時に光榮ある子息を極東の戦争に與へ、その無限の貯により、事件の有利な終局に對する力を發見すべきことを寸時も疑はずして……」と。ペテルブルスクヤ ウエドモスチーは書いた。

「成熟した國家は自分の名聲が揚らずとも、戦争を繼續し、發展せしめ、之を終局せしめねばならぬので、別に敗北を除くことをしない。私共のうちに、新たな力を發見することを望まふ、然らば新らしき靈の武者が現はれる」と「ルウン」が書いた。

そしてなほ猛烈に殺戮と、あらゆる犯罪とが續くのである。突然その隣人五十を驚かして、悉く斬り、又は村を占領し住民を逐ひ、又は間牒の疑のある者を木に架け、射殺する獵人的の戰鬪的精神に悦ばされる。彼等は之が必要と思はれて、私共の方でも爲すことを止さないのである。そして斯る惡事が電信で堂々と報知されるのである……

若し斯る状態から脱れ得るの望があらば、それは只一つキリストの教へ給ふたことを爲すにあることが明かではなからうか？

汝等先づ神の國とその正しきとを求めよ（汝のうちなる）然らば、則ち人の努むる其實際の幸福は自ら成るべし、と。

之が人生の法則である。實際の幸福は、斯る實際の幸福に人が努力するとき達成されぬ——斯る努力は多くは反對に彼が求めるところより遠からしめる——人が實際の幸福を達成せんとは思はず、彼が神の前、主の前、人生の律法の前に爲さねばならぬと信ずることを、最も完全に遂行するこ

とを努めるときにのみ達成し得られる。只その時にのみ實際の慶福は得られるのである。されば人の救ひは只一つである。則ち人各々に與へられた神の意志を自身のうち、則ち彼の權威の下にある其世の一部たる自身のうちで遂行するにある。

此處に主要な各人の唯一の任務が在る、そして是と共に各人が他に對する行爲の唯一の手段が之である。それであるから是に向つて、只之に向つてのみ、各人の一切の努力は注がねばならぬのである。

千九百四年四月十七日

一一一

只今戦争に關する最近の布告が出された、如何にして此新しい悪行が、輕卒な、暗愚な勝手に權利を盗んでゐる支配者等が、露國民の上に持ち來されたかに就て、恐ろしい報知が到着した。

又もや金びかの衣裳に装はれ、野蠻な奴隸の奴隸、各階級の將官共が、他を凌ぐ光榮を得たり、又その狂氣めいた金ピカの軍服に更に勳章や袖章をかざる權利を得度いところから、或は暗愚、怠惰から——又もや此下らぬ、情ない人間共は、自分を養ふ、數萬の尊敬すべき、善良な、勞働好きな、勞働者を、恐ろしい苦艱のうちに亡ぼした。又もや此悪行は、此事の責任者共によつて、反省され、後悔されなかつたのみならず、又一層迷になほ多くの人間を殺傷し、なほ多くの日本及び露國の家族を離散せしめようとしてゐることばかりが見聞される。

況して斯る新たな悪行に人民を赴かせるが爲めに、此犯罪の責任者等は營に、是は露人に取つては愛國的、軍事的立場から見ても、恥づべき戦争であることが、皆に知れてゐることを承認しないばかりか、輕信な輩を煽て、民に落ちた不幸な露國の人民を驅つて戦争に赴かしめ、その幾千を一人の將軍が他の命令を解しなかつたが故に殺傷する。是等の人々は英雄的の行爲をなし、そのうち逃けることの出来なかつた者は殺されて、逃けたものは生き残つてゐる。又是等の恐ろしい、不道徳な、殘虐な人間の一人、偉大な大將、提督の一人は多くの平和な日本人を溺らして、露國人を悦ばすべき、偉大な、光榮ある行動をしてゐる。そして總ての新聞は恐ろしい殺人を喚起する記事を掲げてゐる。

『鴨綠江上露兵の死者二千を以て、レトヴィザン號の負傷者と、その同僚と、私共の死んだ者共に私共の軍艦に、卑しい日本の濱をどれだけ荒してやらねばならぬかを悟らせよ。日本は露人の血を流すべくその兵を派遣した、日本に對して何物も惜むべきでない、今は感傷的なることは不可能だ、今はそれが罪である、戦はねばならぬ、斯る苦しき敗北を、日本人の狡猾な心をひやりとさせる程喰らはしてやらねばならぬ。今こそ軍艦は海に出動して日本の都市を灰燼に附し、その美しき海岸に恐ろしき不幸を齎らざねばならぬ』

『感傷主義はモウ澤山だ』

そこで始まつてゐる恐怖の事業が繼續されるのである。掠奪・暴行・殺人・偽善・強盜、中にも恐ろしい虚偽、キリスト教にも佛教にも共に悖る虚偽が繼續されるのである。忠義の臣は新たに、其財産と生命とを、彼等により偶像化された王の任務の前に投するのである、併しそれは只口先だけのこと

である。行爲で他を凌がんとする者ですら、居所に送らんとして、頼りない家族の父や扶養者を引き離すのである。新聞記者は露國の狀態が悪ければ、悪い程、愈々無良心に嘘言を吐き、誰も非難せぬことを知りつゝ、恥辱の戦を勝利と言ひくろめ、平然として購讀料や賣上高を蒐めるのである。戦争に愈々國民の義と努力とが入れば入る程、指揮者や事務家は愈々多くを盗むのである。彼等は誰もそれを露くことがないと思つてゐるから、盗むのである。十數年間、非人道、野蠻、怠惰を學び、人殺しに育てられた軍人は、懐中の暖まるばかりでなく、不幸の戦死者が残した空位に、昇進の出来るのを悦ぶ。キリスト教の役者共は人民に此最大の悪事を命ずることを續け、神に戦争の補助を求めて、神聖なるものを弄ぶことを止めず、非難どころか却て、人殺しの現場に立ち、十字架を手にして、人民に殺戮を稱推する役者を辯護し、賞讃する。同様なことが日本でも起つてゐる。その勝利の結果、更に大なる熱心を以て、迷ふた日本人は、歐洲を攪亂する殺戮に突撃する。斯くて勇往邁進するのである。斯くて有用な仕事と家族とから離れた不幸な露國の労働者は呻吟する。斯くて新聞記者は嘘を吐いて發行高の殖えるを擇び、又あらゆる頭株や山師は斯くて眞に金を蒐める、又日本人の僧侶共は佛教の偉大な教を偽り、營に殺人を容許するのみならず、又佛陀が殺戮を禁じたことを枉げて辯護する。

佛教の碩學、八百寺の管長たる釋宗演は説明して曰ふ、よし佛陀は殺傷を禁じたにしても、萬有が無限の慈悲心に於て一致しない間は安んじては居られない、それ故に現在の不秩序を秩序に導く爲め

には戦争をして、人を殺すも必要であると。

經典に曰く「三界は我に在り。萬物はそのうちにありて、我が子なり……そは總て我が「我」の分身なり。故に實在の最小部もその天賦を果さざる限りは、我は安んずるを得ず……」と。

佛陀の世に對する此關係は、我等その衣鉢を繼ぐ者の、承繼せざるを得ないところである。然らば我等は何故に闘ふか？

如何となれば世に、有るべきが如くあらざるが故、無智なる主觀の結果人間の悖戻、虚偽の思想心意の愚用の在るが故である。故に佛徒は決して一切の野蠻と闘ふことを罷めない。そして戦争は苦い終局まで續けられる。彼等は決して容赦しない。彼等は、生の不幸の出づる根本を滅ぼす。

之を達成するが爲めには、彼等は自分の生命を惜まぬ。

更に我等の克己、溫和に關する錯雜せる論、輪廻其他に就ては、皆之單に、殺す勿れといふ佛陀の彼の單簡明白な教訓を覆ふものである。

なほ曰ふ「打たんと振り上げた手、狙ひをつけた眼は個人の物ではない。變轉を超越せる主宰の用ゆる武器である云々」(The open Court, May, 1904 Buddhist Views of War The Right Rev, Soyenshaku)

そして恰も、人間靈魂の唯一、人間皆同胞、愛、同情、人間の不可侵な生命に就て、基督教も、佛教も教へなかつたかの如くである。既に眞理の光りに照された人々たる日本人も露國人も、恰も野獸の如く、否野獸よりもモット悪しく、どうしたらなるべく多くの生命を亡ぼさうかと冀つて、相互

に攻撃しあつてゐる。幾千の不幸な者共は既に残酷な苦惱に呻吟し、萎縮して、日露の病院でむごたらしく死ぬるのである。彼等は何が故に此恐ろしいことが彼等の頭上に爲されたかを疑つてゐる、そして又他の幾千かは土の中、土の上に追はれ、或は水の上に浮ばせられ、裂かれ、溺らされる。すると幾萬の女房達、父、母、子供等は何のわけもなしに殺された自分の扶養者を哭くのである。併し之はまだ些事だ、まだく、新らしい犠牲が供へられる。殺戮指揮等の主要な心配は、露國側から、殺されに送られる砲の餌食の流れ——一日に三千人——が一分でも中断しないようとのことである。日本人の心配も矢張り同様である。歩るく蟋蟀が川中に駆け込むのを止めないのは、溺れた者の上を後列の者が渡るが爲めである。

併し然らば何時之が終るのであるか？、何時、欺かれた人々が遂に悟つて、曰ふだらうか『行け、お前等、冷酷、不信な……』**皇帝**大臣、警視總監、法主、將軍、記者、投機師、お前達が命じられたやうに彼處で、銃砲彈の下に行け、私共は望まぬ、私共は行かぬ。私共に邪魔するな、耕し、種播き、お前等、居食者を養ふことを。」と。眞實今は斯くいふが當然である、露國に於て私共が幾萬の母妻、子供が所謂の豫備と呼ぶるゝ其扶養者を奪はれた哭聲や呻吟を聞くのである。眞實此豫備の大多數は文字ある者共である。彼等ば極東が何であるかを知つてゐる。戦争が露國人に必要なものゝ爲めに起つてゐないことを知つてゐる。所謂る他國の土地を租借して、道路を築き、投機師共に何等かの仕事をしてやるのだと知つてゐる。又日本人が最新の殺人術を修めてゐるから、彼等は屠所の羊のやうに殺されるのだことを知つてゐる。然るに私共には之がないといふわけは、露國の將帥部は、日本

のもつてゐるやうな武器を採用することを思ひ及ばないで、彼等を戦場に送るのである。故にどうしても殺されるのを知つてゐる、又知り得るのである。眞實自然に之を知つて言ふべきである『お前達之を企てる人達、お前達、戦争の入用な人達、又之れを是認する人達は行きなさい、お前達日本人の砲弾に地雷に當りに行きなさい、併し私共にはそんなものが入用でもなく、入用である理由を知らないから、私共は行かない』

然るに彼等は是を言はないで、行つてゐる、又行くのである、彼等は行かざるを得ないのだ、身體を亡ぼす者を恐れて、身體と魂とを亡ぼす者を恐れない間は……。

『私共が騙ひやられる雲南浦あたりでは、殺され、傷けられすることはまだ分つてゐない——と彼等が判断する——或は無事に免れて來られるかも知れない、其上に彼の全露西亞が、日本人の爆彈や彈丸は彼等に落下しないで、他の者へ落つると思つてゐる、彼の水兵等のやうに、勳章を貰つて、威儀堂々と凱旋して來ないとも限らぬと思つてゐる。併し出征を拒めば、牢屋に抛ち込まれるは間違のないところ、飢死か、斬られるか、ヤリソックスへ徒刑にやられるが戦争なら直ぐに殺されるのだ』と。そこで棄鉢になつて、善良にして、賢い生活、妻子を置いて、彼等は出征する。

昨日私は母や妻に送られて行く豫備兵に逢つた。彼等は馬車二臺で行いた。其兵士はいくらか泣いてゐた、妻の顔は涙で膨れてゐた。彼は私に向つた。

——左様なら、レーフ、ニコラーエヴィチ、極東へ參ります。

——何に、戦争にかい？

——誰かゞ戦はねばなりません。

——誰も戦つてはならない。

彼は、考へ込んだ——どうしてそんなことが？私は何處へ逃げませうか？

私は、彼が私を理解したことを知つた、彼は自己が送られる仕事が悪事であることを悟つた。

「私は何處に逃げませうか？」之が公報や新聞界の語に翻譯されると「信仰、皇帝、祖國の爲め」となる心理状態の正確な發表である。飢える家族を抛て、死と苦艱とに赴く者は此の如く「私は何處へ逃げませうか」と思ふのだ。貧乏なその居城に、心配なく坐つてゐる者は、全露の民は、尊皇の爲めに、又大露西亞の光榮の爲めに其生命を抛つと言つてゐる。

昨日、私の知己の農民から、次々に二つの手紙を受取つた。

第一のものは次の如くである。

「親愛なるレーフ、ニコラーエヴィチ、私は本日動員召集の令状を受け取りました、私は昨日指定地へ出頭しなければなりません。それだけの事です、私は極東に日本人の彈丸の下に送られるのです。

「私と、私の家族の悲みに就ては、私は何も貴下に申し上げませぬ。貴下は私の状態、戦争の恐怖を御存じないでせうか？貴下はとくに斯るものを經驗して、總て御存じの事です。けれども私はどれ程貴下に御目にかゝつて、御話し度いでせう！私は心の苦みを述べた長い手紙を書いて上げ度いのでしたが、召集状を受けたので書き上げることが出来ませんでした。私の家内は四人の子供をかへて、今どう致しませうか？老人として、貴下は勿論私の家族の運命に關係なさることは出来ませ

ん、けれども貴下は、御散歩の折に私の頼りない家族を御訪ね下さるよう、誰か貴下の御友達に御話し下されませう。若し私の妻がその子供を抱へて辛棒しきれずなり、貴下に御援助と、御教へを受けに上りましたなら、何卒會つて、慰めて下さるやう、心からお願ひ申します、妻は貴下の御顔を存じませんけれど、貴下の御詞を信じ、澤山それを存じてをります。

「召集に應ぜぬことは私には出来ません、けれども私は今申します、私によつて一日本人の家族たりとも、寄る邊ないものとして残されることはありませんと。主よ、如何に此事が恐ろしく、如何に辛らく、不快に、貴下が生き且つ興味をもたるとことに影響するでありますぞ。

第二の手紙は次の如くである。

「親愛なるレーフ、ニコラーエヴィチ！

服役第一日を此處に過ぎしました。けれども私は既に最も絶望的な苦艱の百年を過ぎました。朝の八時から夜の九時まで、私共は動物の群のやうに、營庭で練兵です。三度身體検査の喜劇が行はれました、そして病氣と申出た者は皆受付けられずに、十分間氣を付けさせられて、「合格」と記るされました。私共此合格者二千人が指揮官に、營舎に追ひ込まれました時、街上には殆ど一里に亘る父母、子を抱いた妻の群がありました。若しや貴下は此者の如何にその父、夫、倅にまつはり付き、その頬に摺り付き、絶望の涙を流したことを、見聞なさいましたらうか。私は一體に自らを控えて行動し、自分の感情を制するのですが、私も堪え兼ねて、泣きました」(新聞紙の詞では此光景が、(絶大な愛國心の發揚)となるのである「今や殆ど地球の三分の一に擴がる此あらゆる悲痛を測る秤器は何處にあり

ますか？ 併し、私共は今大砲の餌食です、遠からぬうちに、復讐恐怖の神に犠牲として捧げられるのです。

「私は決して心の平静を保たれません。噫私はどれ程此の只一つの君主たる神に仕へる事の邪魔をする此二重性格を憎むことでせうぞ」

此人は、恐るべきは身體を殺すことでなく、身體も魂も殺すことであると。未だ不充分に信じてゐる、それ故に拒否することが出来ない。併し家族を抛てゝも、前以て、日本人の一人の家族も、私によつて、頼りなくされることがないと誓ふのである。彼は神の主要な戒律あらゆる宗教の戒律を信する、則ち己れの欲する所を他人に施せと。現代の斯る人々多少、此戒律を悟つてゐる人々はキリスト教國にばかり在るのではない、佛教、回教、儒教、波羅門教等にも、數千、否數百萬あるのである。

眞の英雄は、他人を殺すことを欲して、自分は殺されまいと思ふ者ではない、眞の英雄は今牢獄の中、ヤークツスリ地方に、彼等が殺戮に赴くを、直ぐに拒絶したが故に、キリストの戒律を犯すよりも罰を忍ぶを可なりとしたが故に遂ひやられた者共である。私に手紙を送つた者のやうに、出征はするが、人は殺さぬものもある。併し出征する者の大多數は、自分等のなすことを考へもせねば、考へようともしない。魂の奥底には今彼等を仕事と、家族とから引き離し、彼の靈と信仰とに反する必要な殺戮に送る強權に服従して、悪い事をやると思つてゐるのだ。けれども「ぢや何處に逃げやうか」と、いろいろな事情にとらはれてゐるばかりで、出征するのである。

残る者共は皆に思ふのみならず、之を感じ、之を公言するのである。昨日ツールスクから空手で歸

て来た農民に大道で出遇つた。そのうちの一人は馬車の傍で、一枚の紙を讀んでゐた。

私は訊いた——何だねそれは、電報？

彼は立つた——是は昨日のですが、今日来たのもあります。

彼はポケットからモー一つのを出した。私共は立ち停つた。私は讀んだ。

——昨日停車場で惨事が起つた——と書いてあつた——千以上の婦女子が、泣き喚いて、汽車に縋り付いて、離れなかつた。他の者は之れを見ながら泣いた。ツールスク婦人の一人は悲鳴を上げて、氣絶した。五人の子供があつた。孤兒院に分けられたが、孤兒院ではそれを皆遂ひ出した。私共に彼の滿洲とやらが何だ？ 自分の土地は廣い。然るに國民を殺し金を浪費するとは何事だ？

左様、今回の戦争に對する人民の關係は以前、近く七十七年のものとするも異つてゐる。今日起つてゐるやうなことは決して無かつた。

新聞は書く.....

諸方面から話が聞える、其處では召集された豫備兵四人首を吊つた、彼處では良人を失つた妻が子供を、軍憲の前に持つて行つて、棄てゝ来た、又他の女は司令部の庭で首を吊つた。皆不満、憂愁、憤慨してゐる。『信仰、皇帝、祖國の爲め』といふ詞、軍歌や『ウラー』の叫びは最早以前のやうに國民に効果がない。戦争の不正と、人々が召される此行爲の良心に反することは愈々多く國民の心を捕へた。

左様、今の大戦争は、日露の間にあるのではない、又黃白人種間の争ひでもない、地震、爆弾、銃

丸による罅でもない、不斷に行はれた。又今も人類の光輝ある良心を輝かさんとする者と、其周囲を取り捲く、暗黒、重苛との間に行はれる戦争である。

キリストは其當時なほ期待を以て仰せられた「われ火を地に投入ん爲に來れり、我なにをか欲む、已に此火の燃たらん事なり」(路可傳第十三章第四十九節)

キリストの望まれたことは成るのである。火は燃えてゐる。私共は之に逆ふまい、彼に従はふ。

千九百四年四月三十日

私は決して戦争に關する私の論文を終るまい、若しその重大な意議を決定する一切のものがその中に含まれることが續くならば——。昨日私は日本裝甲艦擊沈の報を受取つた、すると所謂上流の露國知識階級、富豪等は、聊かの良心もなく、數千の人命が失はれたのを喜んでゐる。今私は此の手紙を最下級に屬する人、一水兵から受取つた。

「一水兵よりの書信(姓名がある)」

——尊敬するレーフ ニコラーエグイチ様へ申し上げます、私は貴君の御本をよみました、それは大變愉快でした私は貴君の本の、アイ讀者でした、戦争をするのは神様の御心にかなひますかそれとも司令官が命じます人殺しはいけませんかどうか御手紙を下さい今眞理の光りがありますかありませんか御手紙を下さい私ども教會の祈禱はキリストに記憶されますか御手紙を下さい神様は戦争がお好きかお好きでないか御書き下さい貴下は眞理があるかないかを書いた本を御持ちですかそんな本を送つて下さい私は金を拂ひますどうか私の願ひをお聞き下さい何も本がなかつたなら御手紙を下さい私

は御手紙をいたゞくのが嬉しう御座います私は御手紙のくるのを持違しがつてをります云々」

次に住所が、旅順口と筆者の乗組む艦名、職名、姓名が記してある。

私は此平和な、眞面目な、誠實な人に直接に返事は出來ない。彼は最早電信も手紙も通信の斷絶した旅順口に居る。併しそれでも私共には彼に通信の途がある。途とは私共双方が信する、又私共兩人が戦争はその意志でないことと知る神のことである。彼の靈に起つた良心は、既に彼の決斷である。

而して此疑問が起つて、今や幾千人の心靈に生くるのである。獨り露國民の心にものみでない、日本人の心にものみでない、又人間の本性そのものに悖ることを、暴威によつて強らるゝあらゆる不幸な人々の心に起るのである。

人を是まで發狂せしめた催眠術は、今又人を發狂せしめんとして、急いで出て來た、がその働は段々力強くなつた。『指揮官の私共に命ずる人殺しは神の御意に叶ふものでせうか』といふ疑惑は、愈々力強くなつて、何物にも滅ぼされず、愈々擴く行き渡るのである。

指揮官の私共に命ずる人殺しは神の御意に叶ふものでせうかといふ疑問は、キリストが地上に呼び下し給ふた、そして燃え出してゐる彼の火花である。

之を知り、之を感じるは——是ぞ偉大なる喜悅である

ヤースナヤボーリヤナ 千九百四年五月八日

悪に惡を以て報ひず

某氏への書信

親愛な某君

私は貴下に「親愛な」と書きますのは、一般がそう書くからではありません、貴下の第一信を受取つて、殊に第二信を受けて以来、貴下が、大に私に近い方であり、又私が貴下を愛すると感じたからです。私が貴下に對して努める感情の中には主我が多く存在します。貴下は眞個まことそうは御考えなさるまい、が貴下は、私はどれだけ孤獨で、どれだけ私の周囲の總てから輕蔑されて、眞の「私」が存在してゐるかを御察しが出来ません。私は終まで忍ぶ者は救けられると知つてをります、私は人は只其勞働の果實を利用すべき權を半途にもつてゐるか或はほんのそれを見るだけの權しかもつてゐない、併し永遠である神の眞理の事業に於て、人は自分の事業の結果を、特にその短かき一生の中の、短かき期間に見ることが出来ないのを存じてをります。私は總て之を存じてをりながら屢々情なく感じます。それ故貴下にお目にかゝり、殆ど確信に近き希望を、貴下のうちに私と同一の道を辿り、又同一の目的に向つて進む人間を發見しましたのは、私に取つて非常な喜悅よろこびであります。

扱て是から願を追ふて貴下に御答へ致します。

貴下がアクサーコフにお遣しの手紙は何れも私が嬉れしく存じたところですが、別して最近のもの

は愉快に存じました。貴下の御説は反駁されませんでした、反駁するものがないのです。彼が言つたことは總て、とほに私に知れてをります、是は總て、人生に於て、文學に於て、社會に於て、皆一々繰り返へされてゐます。即ち斯うです、貴下は申されず、私は之を眞と見るが、之は偽りだ、その理由は斯くく。又之は善で、之は惡だ、その理由は斯くく。アクサーコフやその仲間の人達は之を正しいと見ます。貴下があの人々に御話なさらぬ以前に、彼等は眞理を知つてをりました。けれども彼等は今も偽りに居るといふわけは、彼等も、他の者と同じく、善を愛し、惡を憎む心をもち又眞と偽とを分つ聰明をもつ人間であります、その人間が偽りと、惡の中に居て、それに従つていかれたのは、きつと早くから、その眼を眞に向けて閉じ自分に好ましい惡を續けていつたからでなければなりません。そして斯うしたいいろいろの楯は誰でもが同じくもつてをります、即ち、歴史的觀念、客觀的傾向、他に對する配慮、喜と眞とに對する關係の問題を不問に附すること等であり、アクサーコフも之をやり、ソロビオーフも之をやり、總ての聖職も之をやり、總ての官吏、總ての政客、實業家も之をやり、總て眞と善とに反對する人々、自らの前に自らを正しと爲すべき必要ある人々は皆之をやります。

之を最も明白に記したのはヨハネ傳三章十九節から二十一節にしくものがありません。之により私の推しますには、斯る人々に對する關係については、眞珠を投げてはなりません、却て彼等に對する或る關係を自身につくり上げることで、その關係により暴力を用ゐないやうにすることです。彼等と論争することは、嘗に暇潰しであるのみならず、又私共の目的に害を興へます。彼等は貴下に對して

無益で、要點を外れたことを言ひかけて、争つてきます。そして貴下が仰つしやつた最も主要の點を忘れて、只それだけを固執します。私自身に成就し、且つ他人に傳へやうと致しました彼等との關係は私の十六歳になる息子を、自分の放蕩に引き入れやうとした、放蕩な、飲んだくれ者との關係と同じです。私は此放蕩者をあはれみましたが、だめだと知つてゐましたから、彼を矯正しやうとはしませんでした。彼は、叱られながら、息子の前で私を嘲るのです。私は又伴をその昔から力づくで引き離すことは出来ません、何ぜかならば、今日でなくとも明日、彼が、又彼のやうな者に出會ふのは、息子に取つて避け難いのですから。私は又伴に、彼の醜行を説いて聞かさうともしません。伴自らが、それを見出さなければなりません。併し私は伴の魂に、青年の誘惑が彼を捕へぬだけのものを満たしてやるやうに努めます併しこんなに僅かな珠を投げることを浪費して御覽なさい、嘗に踏みよごされ、引き裂かれるものは私や、貴下、又某君でなく、暗の中に輝いた一點の光りは消えてしまひます。

擧て話が傍へそれましたが、私は此處で貴下の書翰の第三の主要なる點に直に入つてゆきます。人々の眼を開き、彼等を誘惑から救ふには、如何なる時も暴力を用ゐてはいけませんか？ 如何にせば福音の精髓を得べきか？、若し、よしや暴力によつてなりとも解放してやらねばならぬ場合、人が私に救ひを求めたら、若しや私の眼前に人が殺され、苛まれてゐたら、私はその人の爲めに盡してはならないでせうか？ 人を解放し、人に盡すに暴力を用ゆることはなりません。それは効力がないから、又善を暴力——即ち惡によつて爲すことは愚かなことでありませぬ。してはなりません。

どうか、貴方が御仕へなさる神の眞理の爲めに、急がず、焦らず、又私が貴下に書いてあけること

ではない、聖福音に於て、且つ、キリスト又は神或はその他の詞としての福音に於てでもない、最も明白、簡單で、何人にも了解、實行され得る教訓私共各自及び總ての人間が如何に生活して行くべきかを教へた教訓としての福音を熟考するに先ち、貴下の新意見の正しいことを證明する心を起さぬやうにして下さい。

若し私の唄に母がその伴を鞭で打ち殺すとしたら、私は何と致しませう。私が爲すべき善く、賢い方法が何かといふのが問題で、そんな場合に私の最初の興奮がどうなるかといふことではないことを御考へ下さい。暴行に於ける最初の激昂は、復讐の念です。けれどもそれは問題です、それが果して賢い仕方ですか？、そしてそれが又直に、伴を打ち殺した此母に對して、暴力を用ゐて然るべきかといふ問題になります。若し母がその子を斬りますなら、それは私に不快を感じさせ、私はそれを惡事と思ひます。伴に不快なことは、母に愛の喜悅の代りに、惡の苛責を感じさせますまいか？、私は兩方にとつて惡からうと存じます。惡は一人では出来ません。惡は人々の離反です。ですから私がやらうとするなら、只此離反をなくし、母と子の關係を復舊する目的で働くことなら出来ませう。然らば私はそれを奈何致しませう？、暴力で母を制しますか？、私は母と子との離反をなくすることが出来ず、却て私は新しい罪——私との離反をおこします。然らばどうしませう？、只一事——自身を子供の位置に置くことです。之は愚かなことではありません。ドストイエフスキーが書いてをりますとして私が大變反對なことは、修道士や大主教が私に申しました、戦争はしてもいゝ、之は防禦であつて、同胞の爲め生命を抛てるものであると。私は之に對して常に答へました。自分を先に立て、その

同胞で禦ぐことです、けれども銃で、自分の爲めに人を射つことは、之は禦ぐのではなく、殺すのであると。

福音書を御調べあれば、貴下は短かい四つの教へを御覽になりませう（馬太傳第五章第三十八、九節）惡に敵する勿れ、即ち惡に酬ゆるに惡を以てする勿れと、之は重要であるとは私は申しませんが總ての教訓のうちに、確りとした響を傳へます。そして偽せ基督教の總ての教へを排しましたし、又現に排してをります。又之は貴下が、如何にも有理に御嫌ひなさる状態をも排してをります。基督の御教へを、知らず、即ち善と基督の名を以て暴力により、多くの惡を爲したニケア會議のことは言はぬとして、使徒時代に於て既に（使徒行傳の保羅）善の名によつて此暴力が生れ、聖訓の意味が損はれました。

私は聖職、革命者、監督者達が福音を外部の目的を達する手段であるかのやうに語つてをるのを聞いて、幾度か嘆かはしく感じましたらう、極端な人達は、一概に基督の此基礎的の條件を否定します第一に信仰の分裂を除き、抑壓し、殘虐な戦闘や、刑罰を緩和することが出来ません。第二に秩序と呼んでゐる現在の紊亂した無秩序を暴力を以ては制することが出来ません。聖職や權力者は、暴力のない人間の生活を想像することが出来ないのは明かです。革命家にも矢張りそうです。木はその實によつて知られます。善の木は暴力の實を結びません。基督の教へは抑壓し、艾除したりする用にたちません。ですから誰も彼も教へを枉げて信仰が眞に與へる——その一部ではなく、眞全部に——その唯一の力から身を離します。劍をとる者は劍によつて亡びます。之は談ではなく、總て確な事實の證明です。

あるところです。

馬太傳第六章第二十二節から第二十四節殊に第二十三節を御参考なさいまし。若しお前が善と思ふことが惡であるならば、お前の命と、行爲の惡とはどんなものか？ 惡魔に仕へることの出来ぬ者は神にも仕へられぬ、と。斯んなことを言ふ者があります。けれども聖書は聖者達が私達に説きますやうな愚かな本ではありません。總ての事情はそこでは徒に話されたのではなく、一切の教へにきつちりと結び付くやうになつてゐます。ですから惡に對して暴力を用ゐぬ説は皆聖福音を通じて出たものでそれがなければ、私にとつて福音書の教へは、價值が非常に落ちるのです。嘗にそれは幾度となく、それを枉げるもののない程、簡明直截に書き記るされ、嘗に基督の生涯や其業績は此説に合致し、嘗に約翰傳に於て祭同のキャバが此眞理を解せず、その無理解の結果は、國民の幸福てふ名に於てキリストの生命を奪ふたことが示されてあるばかりでなく、其處には明白に惡に逆ふ者は、最恐ろしい危險な誘惑で、之は單にキリストの教へを亡ぼすばかりか、殆ど自らをも失ふものです。けれども今にして思へば、私は、よしやキリストと、その教へがなかつたにしろ、私は自ら此眞理を闡明したらうと存じます。此眞理はそれ程今は私に簡明、直截です、そして私は貴下にも同様であると信じます。私が、絶大な惡を正すを名として、最少の暴力を自分に許すと致しませう、すると他の者も自分に同様小さな暴力を許すこととなり、遂には、第三、第四、否幾百萬の暴力が、現に私共を支配し、壓迫してゐる恐ろしい惡に結合致すことが、今や私に明かとなつてをります。

若し貴下が私の願ひを満たし、貴下の御意見を控へて、飽まで、落着いて御讀みになり、私の説明

を御討究なさつたならば、貴下は、貴下の御意見に反する有力なる論證の存することを御認めなさらんことを私は望みます。又貴下が、此處に御送り致す四福音書と、短かい註釋とを御一讀なされば、層一層私に御賛成なさると信じます、私の推する限りに於て、貴下は今、次のやうな状態においでなさいます、貴下の叡智は貴下に申します、『我は正しい』と、併し貴下の感情は、惡に對する無抵抗の状態に苦みます。貴下は自身におつしやいます『あるものは斯うではない、斯んな工合になるのは判斷の謬りである。私はそれを發見して、發明してやらう、何ぜかなれば、キリストの教へは、兄弟に對する愛の教へで、世に惡の蔓るのを手を拱ねて、觀ては居られぬ筈であるから』と。貴下は申されます『お喋りをしたり、惡を忍ばねばならんといふやうなことは、老ひほれの長老には結構だ。彼は飽き足らひてゐるから満足なんだ。一切をもち、其上にまだいくらか期待してゐるものもあるのだ。人生の苦を彼は既に過ぎ越してゐる。けれども私は、考へるまでもなく、自分のうちに、善と、眞とに對して愛を、惡と偽りとに對して憎惡を、徒には議してゐないと感ずる。私はそれを言ひあらはせもしない、又其名で暮してもいけない、けれども私は一步毎に惡と闘つて生きて行く。私は、既に示された又是から示されるをして又あらはれるその方法により、惡と共に格闘して行かねばならん。國民に宣傳、背教者との接近、政府に對する運動等が必要である』と。

此意見を貴下に呈する心持は善い心持で、即ち貴下を愛するが故であります。併し此感情こそは彼得をして劍を抜き奴僕の耳を切らしたのです。若しキリストが之を刺めなかつた場合を想像して御覽なさい。争闘が起つてイエスの徒が勝を制し、次でイエエルサレムに争亂が起つたでせう。彼等は敵を斬

り、又斬られましたらう。基督の教へはそんなものでせうか？、若し此處へ行なかつたなら、私共はたよりとするものをものたなかつたでせう。然らば私共はアクサーコフやソロヴィオーフよりも惡しかつたでせう。

充分に私の意見を貴下に披歴致します爲めに、私は貴下に對し、私が察するところによりますればキリストの教へは曖昧な形而上的の智識ではなく、明瞭で、生命に充ちたものであると、申し上げます。

皆申します『キリスト教は、神と隣人を自己の如く愛することである』と。けれども神とは何でせうか？、神といふ、理解出来ないものは何で愛するののせう？、隣人とは何ですか？、自己とは何ですか？

是等の詞は私には次の如く解されます——神を愛するとは、則ち眞を愛すること、隣人を自己の如く愛するとは、則ち魂と、生活のそれ自らの存在が、總て他の人々の生活、永遠の眞理や、神と一體であることを認めるのであります。私にはさうなつてをります。けれども斯る不確定な詞が別な意味にとられることも、又大多數の人は、私のやうに此詞を理解すらしてゐないことは、私によつて知られてをります。肝要なことは此詞が私にも、誰にも、何の義務も負はせねば、又何事をも決定しないことです。どうして此方は、各々自らが判つたとほりの神を愛するのに、他の人々は又全然神を承認しないで、そして隣人を自己の如く愛するののせうか？、一瞬も私を離れない自己愛を、又甚だ屢々、殆ど不斷ともいふべき程な他に對する憎惡とは、どうして私の中に入つたのでせうか？、是はちつと

も分りません、私の考へでは、此形而上のことは、思索の問題としては非常に重大であります、之を生活の規準法律として見ますときには、甚だツマラヌものであります。併し遺憾なことには、人は屢々之を斯く見るのです。

私が斯く申しますのは、キリスト教の肝要な點は、いろいろな信仰のやうに形而上の原理ではありません（人間に於ける形而上の原理は佛陀、孔子、ソクラテース、昔から皆一つで、今後も同一であります）生活にそれが有する關係であり、此原理が生活に關係して得られた各個人、全人類の幸福の生きた表現であり、又そうした關係の可能であることを示すことであり、依て以て幸福に到達した此道徳を確定するにある明かにし度い爲であります。

尙ほ第二の戒律に言つてあります『神と隣人とを自己の如く愛せよ』と、併し此原則を第二の戒律に當て、割禮、安息日及び刑律が起つて來ます。基督教の眞は、愛の掟を守ることの可能と、幸福とを示したところにあります。基督は山上の垂訓で、自らの幸福の爲め、又總ての人の幸福の爲めに、如何して此戒律を守らねばならぬか、又守り得られるかを決定的に御示しになりました。キリストは山上の垂訓に於て（是なかりせば、總てが承認されるキリストの教へといふものは存じなかつたでせう）智者に向はずして、愚かなる者、卑しきものに向ひ、——此故に人もし誠の至微の一を壞り（馬太傳第五章第十七節、第二十節）と、冒頭に言ひ、終りに、口で言ふことではなく、實行することだ（馬太傳第七節、第二十一節、第二十七節）といふ説教に於て——此説教に於て一切のことが説かれ如何に教へを守るべきかに就いて五つの訓示を給はりました。山上の垂訓に於て、最も簡易、明快、理解し

易き、神と隣人とに對する、是なくんば、又是を守らずんば、基督教を語り得ないが原則説いてあります。一千八百年以後是を妙な風に説きますが、私に取つては此原則は何かしら新らしいものを啓發して呉れます。私が只此原則を理解した時、私はキリストの眞の教へを理解したのです。此教へは驚くべき個人及び全人類の生命を擱んでたら彼等が一度此原則を地上に於て行はふと致しますや直に、地上に於て眞理が支配致します。そこで此原則一切を分解して、その一つ／＼を自分に當てはめて御覽なさい、想像もつかぬ力強い、偉大な結果が、此簡易、自然で、嘗に容易なるのみならず、守るに愉快な此原則を遵守することによつて得られます。眞理の支配を來すが爲めに此原則に何か加へることがあるとお考へですか？ 何物を附加する必要があるありません。眞理の支配に支障を來さぬやう原則の一つを除くことが出来ますか？ 出来ません。よし私が五ヶ條の原則を除き、他のキリストの教へを何にも知らないとしても、私は現在の如く矢張りクリスチャンであります。怒る勿れ、憚む勿れ、誓ふ勿れ、裁く勿れ、戦ふ勿れ——之が私にはキリストの教への眞諦であります。

併し此明かなキリストの教は、人の眼から隠され、其結果人はたえずそれから兩極端に退いて行くのであります。即ち一部はキリストの教へに、靈魂の永遠の救のあるを見て、世を避け、只自分達自らのことにのみ努めます、此獨りを完くするといふことは、歎すべきことではないとしても、嗤ふべきことでもあります。そして、此人々は恐しい力を浪費してゐます、そして、他人にかまはず、自分の爲め、一人で善をしやうと、馬鹿な無駄骨を澤山折つてゐるのです。然るに他の一部は之とは反對に未來の生命を信せず、其うちの最善の者等は、只他人の爲めに生き、しかも彼等自分の爲めに必要なも

のを、或は何の名で他人に善を又如何なる善を爲すべきかを知りもせねば、知らうともしません。私
 は一方が缺ければ、他もあり得ないと存じます。私は、宗教的の遁世者や、そのうちの最善の者共が
 爲す如く、他人の爲め、又は他人と共に爲さずしては、自分と、自分の靈魂たましひとに善を爲すことは出来
 ません、又人は、信仰のない社會的事業家がやるやうに、自分自身に必要なことや、何の名によつて
 爲すかを知らずしては、他人に善を爲すことは出来ません。私は第一の種類の人間を愛しますが、そ
 の教へを、全精神をこめて排斥します、又私は第二の種類の人間を愛しますが、大に愛しますが、その
 教へは同様排斥します。靈魂たましひの求めるところを満たす生活、そしてそれと共に又人の爲めに働くこと
 を教へるのが眞實の教へであります。是こそキリストの教へであります。此教こそ獨り、宗教の靜寂
 主義や、自分の靈魂たましひを心配し、眞の、間違のない幸福のある此教へに合致することを知らずに、他人
 の幸福を爲さうと欲する革命運動(政治、宗教の運動は革命です)などは、遙に距たつたものであり
 ます。キリスト教徒の生活は、自身と、自身の聰明な靈魂たましひに善を爲さなければ、他人に善をなすこと
 が出来ず、他人に善を爲すことが出来ねば、自分に善を爲すことも出来ないのです。キリスト教的生
 活は靜寂主義や争闘とは遙にかけ離れてをります。若い人や、貴下がたと反對の考へをもつた人々は
 眞のキリストの教へと、靜寂主義の迷信とを混同してゐるやうです。惡に對して暴力を用ゐることを
 拒むのは非常に好都合で、容易で、又是によりキリスト教の働が鈍り、力が抜けると、その人々は思つ
 てるます。是は眞實ではありません。キリスト教徒が暴力を用ゐぬのは、貴下が御望みのことを愛し
 ないが爲めではなく、暴力が、人に向けられる惡の第一であることを明かに見てゐるからでもなく

暴力は彼を目的より遠ざからしめ、それに近かしめず、暴力は、水源を求めて、彼を水脈より距てる
 土に棒を刺さうと欲する人にそれが賢い仕方でないやうに、賢くないからであると、御悟りでありま
 せう。又暴力を用ゐぬことは容易なことではなく、却て棒を以て地を打つよりも、蹶をとり之を掘る
 のが容易でないと同様です。惡に酬ゆるに暴力を以てせず、却て善と、眞實とを以て之に酬ゆるのは
 キリストにより示された天なる父の御旨みこころを爲すものであると信することによつてだけ、只是が容易に
 あるのであります。火でもつて火を消されず、水を以て水を乾かし得ず、惡を以て惡を亡なげばすことは
 出来ません。一度それが斯くなるや、世界が創まつた時以來その通りに爲し來つて、現在私共が生活
 してゆく状態が出来上つたのであります。時は舊い風習を抛てませう、そして新らしいものを取りま
 せう、そして彼は一層賢くなればなる程、なほ新しくなませう。若し行動が進歩でありますなら、
 それは單に惡に善を以て報るたが故であります。若し人が惡に加はらずして、惡を廢し、各々かくかくに與へ
 られた此世界を光輝あらしめる努力が百萬分の一もあつたとしたら什麼なんなものでせうか？ 一見何でも
 ないやうで、實は是少しも行はれてをりません、是程明かに、悦ばしいことでありながらやつてみる
 ことをしないのです。一例ですが、最近二十年の露西亞を考へてみませう。どれ程善に對する至純の
 冀求と、犠牲の覺悟と、どれ程私共の若い智識階級インテリゲンチヤが人民の爲めに眞理を押し立つべく力を盡しまし
 たらう！ 而して何が出来ましたか？ 何物もありません。無いよりも悪いのです、大きな精神の力を
 殺しました。轍くわはこはされ、土地は以前よりも一層悪く荒され蹶くわも亦施すに由なくなりました。

得なくてならぬものに關する貴下の疑問に對して、私の答へは斯うであります。キリストの自らに與へた戒律を履行する爲めに又人々に光りとそれを履行することの喜悦とを與へるものは得なければなりません。總て此事は又、立派に福音書にかいてあります(馬太傳第五章、第十三節、第十六節)もう少し御答へを進めませう。貴下はおつしやいます。此戒律をどう守るかは明白でないだらう。そしてそれは私共をどうするだらうか? 此戒律と財産、政府、國際關係とはどういふふうに関係するかと。

キリストの教へに何か曖昧な點があると、お考へなさいませぬ。政府に對する關係はデナリ(小錢)

の話にあらはれてをります。金錢財産はキリスト教徒のものすべきものではありません。財産に關するは——財産は福音にかなひませぬ。財産をもつものは禍なるかなと。即ち財産をもつ者に善いことがない、それ故キリスト信徒はどんな境遇に居ても、財産の名目により成就せられる暴力に加擔しない爲に、又財産は荒唐無稽なものであつて、財産といふものは存在しない、只物を用ゆる關係に、或る習慣的の暴力がある、それがいけないものであることを他人に對して知らせるより以外に爲すことはない。下着を望まれて、上着をも與へる人に財産といふ話はありません。又國際關係も問題とはなりません。總ての人は一様に皆同胞です。私の子供等を焦慮させる惡が起つたなら、私が爲し得る只一つことは、私はその惡に對して、それはお前には何の利益もない、いけないことだと教へてやることです。彼の力に服して、自分は惡と抗争する積りではないと教へることです。彼が勝ちまして、なほ一層私の子供を苦めますか、或は私が勝ちませうけれど、私の子供は明日から苦惱して、その苦惱の爲めに死にませう、私が従へば眞個至善を爲すのでありますが、反抗すればそれが疑はしいのでありますから、そうする積りがありません。私の答は斯うです私共が爲し得る最良のことは、自らキリストの教へ全部を履行することです。併し之を履行するには、教へは總ての苦にも、又私共各個人にも眞理であることを信じなければなりません。貴下は斯る信仰をお持ちですか?

貴下の文は印刷なさるがよろしいと思ひます、尤も幾分か削除して。

なほ貴下が、私に下さらねばならんと思ふ二つの答、或は問題があります。第一は、若し私が言ふやうに、惡にも、警官にも服従して、私から彼が取らうと欲ふもの總てを渡してしまふとしたら、若し裁判所教育機關、大學等の政府の施設にたづさはらず、自分の所有權を認めないならば、私共は社會の最低級に落て、自らを蹂躪し、自らを落しめ、破戸漢となり、乞食となり、我がうちにある光りは徒に消えて、誰もそれを見る者なく、最上の人々と交際し得られず、進化もなければ、生計上、或るきまつた程度の獨立をよく保つてゆく事も出来ないではなからうか。事實さう思はれますが、それは只そう思はれるだけです。そう思はれる理由は私共の道は私共に便利で、私共の文化や、その總ての快樂は想像的で、私共は之を口にするときには私共が間違つたふうと言ふが故です。

人はどれだけ下の位置に居ても、常に他の人々と共に居て、その結果は他に善を爲すので、是は間違ひであります。若しそれ大學の教授は、基督教の夜間宿泊所に居る人間よりも善良で、重要なのであるや否やは、それこそ誰もきめることの出来ない疑問であります。私自身の感情と、イエス自らの範例とは、卑賤の者の肩をもちます。只卑賤な者のみが祝されます、即ち立派な生活を教はります。私は立派な判斷を爲し、又誠實なることが出来ます。併し誰も私を信じてはくれませんが、私が大層に住み、家族と共に、貧乏人一年の費用を一日に使ふと思つてをります、又私共の所謂文化に就ては祝福と共に、最早語るを止めるべき時でせう。一人の者を墮落せしめることは、百人の中九十九を皆墮落せしめることです。しかも人間に對して一物をも添加しません。貴下はシュータエフのことを御

存じてせう。彼は無學な男です。併し彼が智識階級の人に對する威勢は、トレヂャーコフに始まり、現代に至る、露西亞の全學者、文人、ブウシキンも、ベリンスキーの徒も一緒にしたよりも大きく、顯著であります。ですから失ふが如くにして實は何物をも失はないのです。そして誰でも家、父母、兄弟、妻子を棄てた者は此世に於て百倍を受け、家、父、兄弟、及び永遠の生命をも得ます。多く光ある者は後にあります(馬可傳第十章第二十九節)

さて此度は第二の問題ですが、之は前のから直ぐに演繹されます。××氏、貴下は御宣傳はなさるがさてそれをどう履行なさいますか？是は極めて自然な問題で、私も屢々行き當り、何時も私の口をつぐませられるものです。貴下は口で言ふことを、どう實踐なさいますか？、私は答へます、私は宣傳することは山々だがそれが出来もしなければ、もしません。私は行ひで宣傳することが出来ますで私の行ひは錯過つてゐます、私の申しますのは宣傳ではありません、只キリストの教義の誤解を指摘して、その眞意を明かにするにであります。キリスト教の本旨は、その名により、暴力を以て、社會を強制するではありません、その要點は實に現世に於ける生活の意義を發見するにであります、五ヶ條の教訓を遵奉するのは此意味であります。若し貴下がキリスト教徒たらんとお望みならば、此教訓をお守りにならなければなりません。若しお守りになり度くないならば、此教訓を行はずしてキリスト教を違説きなさいますな。併し、——人が私に申します——若し貴下が、キリスト教を守らねば、他に大きな生活がないと御存じになり、此生活を御愛しなさるなら、何ぞ此教訓談を履行なさらぬのですか？私は答へます。私が之を實行しないのは罪であり、醜惡であり、又見下げたものである。

けれどもそれでもつて私の空論の辯明にも、又是正にもなりません。マア私の従前と、現在の生活を御覽なさい、然らばどれだけ私が此教訓を履行するに努力してゐるか御分りになりませう。私は此真理の萬分の一も遂行してゐません。私は此點に於て罪を負ひます。けれども私は欲しないから遂行せぬのではなく、出来ないから、しなかつたのです。私をとらへる誘ひの綱から如何にして脱がれるかを教へ、私に助力して下さい、然らば私は遂行致しますせう。けれども又助力なしに私はやつてみ度いし、やれる望みをもつてゐます。私をお責めなさるなら、私は自分を責めます、が私が行く道、私の私の意味する道の所在を訊ねる者に指し示す道を非難するではなく、却て私を非難なさい。私が家へ行く路を知つてゐて、酒に酔つてふらくとした歩調おどで其道を行つたなら、此事から私の行く道は信じ難いと申されませうか？、若し信じられぬとならば、若し私が迷つたり、蹣跚よろめたりしたなら、私をお扶けなさい、私が貴君が通過しやうとする通り、私を眞の道におつれ下さい。決して迷はせず、私の迷つたのを悦んで、歡呼して「あいつを見ろ、家へ行くと云つて溝ぞうに墮ちて居る」と。左様、悦ばずに、私を助け、私を支持して下さい。

眞個まご貴下は溝の中から出た惡魔ではなくて家に行く人間です。眞個私は單獨です、又眞個私は溝の中に墮ち度くないのです。私をお扶け下さい。相共に亡びてしまふ自暴の爲めに裂けてしまふ臟を私は持つてゐます。私が勢一杯に打たれるとき、貴下がたはよろける毎に、自分と私とをあはれむ代り私を罵り、歡喜の聲をお揚げになります（見ないか彼奴、私等と一緒に溝の中に居る）

私のキリスト教と、その實行とに於ける關係は斯如くであります。全力をふるつて遂行に努め、一

失敗毎に之を悔るす、却て遂には遂行し得られるやうに扶けを請ひ、喜悅を以て私と同じ道を行くさまんくの人にあつて、その人の言ふところを聞きます。

若し貴下が私が、此處に送るものをお読みなされば、此手紙の内容が貴下に一層明瞭になりませう御手紙を下さい。私は貴下と通信するのが大に愉快であります。貴下の御返事を衷心より期待してをります。千八百八十二年

海牙の平和會議に就て

瑞典のある團體ヘトルストイの答信

一 諾 覽

貴書にありました、世界の軍備廢止は、至極容易に且つ確的な方法、則ち各個人が兵役に服することと拒絶することによりて、達し得られるとの御意見は、至極御道理であります。私は漸次強大となる最も恐ろしい、軍國主義の悲惨から人類を救ふ唯一の方法は之であるとまで思ひます。兵役の履行を拒絶した個人が兵役の代償として、公共の事業に従ふべしとの問題が、ツアル提議により開ける平和會議に見られるとの貴下等の御考へは、私には全然誤謬と思はれます。第一、會議そのものが、平和を求むるよりも、寧ろ、先覺者が知るやうになつた、世界の平和を來すべき唯一の方法を人々より隠くさうとする多くの偽善な催しの一に過ぎぬからであります。

聞くところによれば、平和會議は、軍備撤廢でなければ、軍備の増大を制限する事を目的としてゐるさうであります。此會議に於て、各政府の代表者達は、各自國の軍備是を以上に擴張しない申合せをするらしく受取られます。若しそうでありますなら、問題は本心から提出されたものでありません。平

和會議召集の際、偶々隣國よりも自國の兵備の薄弱である國の代表者は如何に行動致しませうか？斯る代表者等が賛成して、自國を將來隣國よりも一層劣弱な状態に止まつてゐることは疑はしくありません。若し彼等が、平和會議の効力を確信して、斯る劣弱な状態に止まることを承知致しますなら、彼等はいやが上に劣弱となり、遂には全然戦争を爲すに堪えなくなりませう。

若し會議の事業が國家の武備を平均して、それに止まるにありとすれば、それが不可能であつた場合には、何故政府はその軍備を今日のまゝとして置かねばならぬか、何ぞそれよりも一層低劣な程度に止めないかといふ問題が起つて來ます。譬へて申さば、何ぞ獨逸、佛蘭西、露西亞は、各百萬の兵を有する必要があつて、五十萬なり、一萬なり、一千の兵を有してはいけないのでせうか？若し縮少が可能なら、何ぞ最少限度に縮少し得ないのでせうか？又遂には選手を出すことが出來ないのでせうか？ダビデとゴリアテとを出して、國際間の争ひを其勝負により決することが出來ないのでせうか？

政府間の争議は仲裁々判で決せられるやうになるとの話であります。併し事を決するのは各國民の代表者ではなく、各政府の代表者であつて、其決議が正義であるか誰も知るを得ないといふことは假に不問に附するとしても、此裁判を一體誰がするのですか？軍隊ですか？何れの軍隊ですか？何の國も軍隊があります。けれども此軍隊の力は平等ではありません。例へば大陸に於て、私共が提出した決議が、獨逸や私共の同盟國である露佛に取つて不利益である場合誰がそれを履行しませうか？又海上に於て其決議が英米佛に不利な場合に誰がそれを履行致しませうか？政府の武力に當る仲裁々判の

裁定は武力の行使によつて遂行せられます、別言すれば、制限されねばならぬ其物自身が制限の手段となります。鳥を捕らへんとせば、その尾に鹽をまかねばなりません。

私は嘗てセバストーポリ攻圍の時、副官サーケンの處に居りましたときのことを記憶致します。彼は衛戍兵の指揮官でありました。その時、面會にウールソフ公が見えました。公は非常に勇敢な士官で、面白い人物で、且つ當時歐洲將軍の名手の一人でありました。公は指揮官に用があると申しました。副官は公を指揮官の室に導きました。十分後ウールソフ公は不満な顔で、私共の傍を通り過ぎました。副官は公を送り出してから、私共のところへ歸つて来て、哄ひながら、ウールソフ公が何用でサーケンの處へ来たかを語りました。公は既に幾度も彼我の間に争奪を繰り返へし、數百の人命を損じた第五號堡前の交通壕を英國方に將軍で勝負を挑んで、取り上げてやらうと提議をする爲めに、副官の處へ来たのでした。

勿論人を殺すよりも、將軍で勝つて塹壕を取る方が遙にましであります。サーケンは、此條件を履行する者共が、御互に充分の信用をもつてゐるときには、之は可能で、善いことだと理解しては居ましたけれど、ウールソフの提議に賛成しませんでした。斬壕前に軍隊が居り、斬壕に向つて大砲が照準されてある以上、斯る信用の成立しないことは知れてをりました。彼にも我にも軍隊のある間は、一事は將軍で決せられずに、銃剣で決せられます。國際間の問題も丁度それと同様であります。仲裁々判により決定せられやうとするなら、裁判の決議を實行するに就て、完全な相互の信用が必要であります。此信用があれば、軍隊の必要は全然ありません。軍隊があれば、斯る信川はないので、國際間

題は只武力に訴ふるより他、解決の方法がないことが明瞭であります。軍隊がある間は、現に亞細亞阿弗利加、歐洲等の凡ての政府が行つてゐる如く、嘗に新に之を得るのみならず、既に力により獲得したるところを力に依つて保有する爲め、その必要があるのであります。併し征服は只力によりて得保つが可能であります。故に數の多い方が何時でも征服します。ですから政府が軍隊をもつなら、それは及ぶ限り大きなものでなければなりません。政府は國內の統治をも非常に多くなすことが出来ません。國民を自由にし啓發し、富有とし、道路河川を修築し、荒蕪を拓き、公共の事業を興すが如きであります。けれども只一つ爲し得ないのは、自國の武力を低下せしめる會議を開くことです。

若し平和會議の目的が近頃發表された如く、代表された國民に特に殘酷な破壊の武器の使用を禁止しようとするにありますが、(何ぞ此機會に於て、一飛に、何よりも先づ書信の沒收、電信の變改、探偵等軍事に必要な、恐ろしい、醜惡を止さうと努力しないのでせうか?) あらゆる方法で、斯の禁制を争闘に適用することは、自身の生命の爲めに闘つてゐる人間に對し、争闘中、身體の最も微妙な局所に觸るゝなかれといふに等しく、全然不可能のことです。而して又破裂彈の殺傷は、何故に急處に受けた普通の彈丸や、極度の苦惱を與へる發彈の傷よりも悪いのでせうか? 武器の何によれ、皆死するは同じではありませんまいか?

成育して、精神の健全な人間が、斯る妙な考へを眞面目に口外するのは呆れてしまひます。

私共は思ひます。自分の生活をいつも嘘偽に結び付けてゐる外交家は、斯る惡事に馴れて、且つ斯る不潔な嘘偽の空氣の中に不斷に生き、且つ働いて、その提議を全然無意義にして嘘偽なることに自

分では氣付かぬのです。併し一部の人——正直な一部の人々、即ち詐かれたが故に、お可笑な提議を褒める人々でない人々は——此會議の結果は、嘗て歴山第一世の神聖同盟であつたやうに政府が其人民を押し込めて置く其詐瞞を強めるに過ぎないことを、正直な一部の人々がどっして認め得ないでせうか？

會議の目的は平和の樹立ではありません。人をして、悲惨な戦争から解放される唯一の方法は、只各自が戦争といふ殺人罪に参加するを拒むにあるといふことを押し匿す爲めでありませぬ。其故に會議は本問題の解決を受けません。

露國の政府がゾホボル教徒(三位一體即ち靈聖の一)位を否定する教徒に對して爲したと同様に致します。政府の所謂平和愛好の意圖を全世界に宣言したと同時に、之を總ての者に隠すことに努め、最も平和を愛好する露西亞人が、口の先だけでなく行爲を以て平和を愛好し、その結果兵役を拒んだのを、迫害し、殺戮し、追放致しました。之より幾分か愚かではありませんが、兵役の拒否者に對して、歐洲の諸政府は矢張り同じやうなことを行ひ來りました、又現に行つてをります。即ち、埃も、普魯西亞も、佛も、瑞典も、瑞西も、和蘭も、政府は是以外に爲すことを得ないのです。

彼等は訓練された配下の軍隊の力により支配してゆくのですから、是以外に仕方がありません。彼等は此力と又、其結果一部の者の利益になつてゐるその勢力とを削がふとは、どうあつても思ひませぬ。況してや、總ての人に兵役の代償に勞役を許すこととしましたなら、確に大多數の人は(誰だつて人殺しや、殺されることを好みませぬ)兵役の代りに勞役を擇びます、そして非常に迅速に多くの

勞働者が蒐集されて、何れの勞働者も勞働を強むられぬ程軍人は少くなりませう。

自己の饒舌にとらはれて、社會主義者や、世の所謂先覺者なる者は、自分等の議會や、集會に於ける演説、其團結、綱要、小冊子等は重大な現象の核心を爲すものであるけれども、各自が兵役を拒否することは何等の要點にでもなくそんなことに注意を向ける價值はないと思つてをります、併し政府は自個に取つて大切と、大切でないことを善く知つてをります。又政府は好んでいろ／＼な自由、急激な言議を帝國議會に於て許し、勞働黨、社會民主黨を許容し、自らそれに同情するらしく見えかけます。斯る現象は國民の注意を、肝要唯一な自由の手段に注意を向けさせまいとしてゐるのです。是は彼等政府に取つて大に有害なることを知つてゐるからであります。併し彼等は何時でも、徴兵の拒否や、軍事的の寄與の拒否を許しません。之は全く、此一點が政府の詐瞞を暴露し、其權力を根底より覆すものであると知つてゐるからであります。

諸政府が自國民を力で支配し、且つ現在のやうに領土の獲得を望みます間(比律賓旅順口其他のやう)そして其獲得を維持しようとしませぬ間は(波蘭土、アルス、印度、アルゼリアのやうに)政府自らか營に軍隊を減少しないのみならず、却て益々増大を致します。

近頃米國の其る聯隊はイロ／＼に出征することを拒んだ報道がありました。此報は少しも怪むべきことではありません。只、今日では斯る事件が不斷に起らぬのが奇怪であります。近年、他人しかも其の大多數は自分等が尊敬もしてゐない他人の意志に基き是等露人、獨人、佛人、伊人、米人等が他國の民を殺し、自身をも苦痛と死とにまかせることがどうして出來たのでせうか？

よしや兵隊に取られぬ以前ではなくて、既に敵に向つて引卒される最後の瞬間にでも、歩を止め、銃を抛ち、敵にも同様にせよと、叫ぶことが、斯る人々に取つては、明白に、自然らしく思はれます。是は誰でも爲さねばならぬ程、簡單、自然なことであるらしく思へます。併し若し斯く行ふことが出来ないなら、それは人々が政府を信じ、人を戦争させる此重荷は、人々の幸福の爲め自身の上に課せられると、信ずることから起るのであります。何れの政府も驚くべき横着を以て、軍備や、又戦争すらも、平和を保つに必要なものであると、信じさせました、又現に信じさせます。今や此偽善、詐瞞は一步を進めて、軍務や戦争によりて存立する政府自體が軍備の縮少と、戦争の廢止の方法とを熱心に討究してゐる眞似を始めました。政府は、各個人は何も戦争を避けること心配することはない、政府自らは其會議に於て、先づ軍備を縮少し、次に軍隊を廢止することになると、人民に信じさし度いのです。が之は眞實ではありません。

軍備を縮少、廢止することは政府の意旨に従ふのでなく、却て其意旨に反してこそ達し得られます。軍備の縮少、撤廢は、人々が政府を信認することを止め、自らその悲惨な境涯を脱する救ひを求め、其救ひを外交家などの偽りで、貧弱な結合に任せず、總ての宗教上の教訓に録るされ、又各人の胸中に存する、人各々の義務、即ち、人は「己の欲せざるところを人に施すなかれ、況んや他人を殺すに於ておや」と、いふ教訓を實行するによつて出来るのであります。

軍備を縮少して、後撤廢することは、利害によつて自分の自由を賣り、軍隊と名付くる殺人業に従事するは耻づべきこと、又今は世に知られず、或は罪にまでおとされてゐるが、自分の自由を他人の

手に委して、殺人の道具になることを肯じなかつたが故に、あらゆる迫害と苦難とを受けたけれど、それをも堪え忍び、人道の最先に立つ戦士及び恩人たるべきことを示した人々があることが、一般人の頭に銘記される時代が來てのみ實現されるのであります。

先づ軍備を縮少し、次に之を全廢した時にのみ、人類の生活に新時代が参ります。そして其時は近くあります。

これにより人を戦争の悲惨から救ひ出すといふ考へは現在に於て正しいものであると、私は思ひます。平和會議が此點に協同し得やうと思ふのは全然謬りであります。平和會議は只自由を救ふ唯一の方法から人民の眼を背けしめ得るに過ぎません。」

千八百九十三年

二つの戦

最近基督教國が二つの戦の舞臺となつた。で一つは決末がついたが、もう一つは今だに續いてゐる。兩者は暫くの間は自發的に進んで行つた。然し兩者の呈する對照は極めて面白い。前者はスペインと米國の戦で古く無益な愚かな、さうして慘酷な戦、若かも時宜を得ざる、時代晚れの、異教的な戦である。即ち一國民が他の一國民を如何にして又何人に依つて統治せらるべきかを解決せんとして一國民を殺すのであつた。後者は今尚ほ續いて居る方で、恐らく世界に戦のある限りは續くのであらうが、新らしく犠牲的で、神聖な戦で、全く愛と理性の基礎の上に立つて居る。此の戦は久しい以前に（ヴィクトル、ユーゴーが一集會に於いて聲明したやうに）人類中の最善にして最も進歩せる一派黨（基督教徒）が他の粗雑にして野蠻なる一派黨に對して宣せられた戦である。此の戦は最近に於いて少數のクリスチャン（カフカズのドウホドール教徒が有力なるロシアの政府に反抗したのだ）に依り特別なる勇氣と成功を以つて實行された。

先日私はコロラドの一紳士シエツシイ、グロドウィンから一通の手紙を貰つた。その手紙に彼は「、、、アメリカ國民の此の崇高なる事業と、その兵士及び水兵の勇敢なることに對して私の感情を表白する言葉なり、思想なり」を書き送るやうに云ふて來た。此の紳士はアメリカ人の莫大なる多數者

が殆んど武装しないスペイン人（何故なればアメリカの武備に比べてはスペイント人は殆んど武器がないと同様であるから）の數千人を殺戮しつゝある此事業を疑もなく「崇高なる事業」と確信して居る。而して多數の同胞殺戮の後健全で凱旋した大多數は英雄として自らに有利な地位を占むべきものと思つてゐる。

スペイン對アメリカ戦争も、あのキューバに於けるスペイン人の虐殺、がその口實となつたのであるが、それを除けば次のやうな事と大した相違がないのである。即ち弱はくしく且つ小供見たやうな老人若かも誤れる名譽心の舊弊に育つた老人が何か誤解が起つたとき、それを解かうとして挑戦すると元氣旺盛な若者はそれに對してとつくみ合ひをやること云ふやうなものである。さうして若い者は先入主と宣告せられた感情とに依つて、その問題の落着どころか、とつくにそんな所を通り起して挑戦を受けて掛かる。

Case told. それから彼はその弱い小供のやうな老人に掛つて行つて、老人の齒を抜いてやつたり、手足をもぎ取つたりする。さうして後には、そんな老人を斯様に殘害してやつたそんな英雄を悦んで稱賛するやうな多數の連中に向つて熱烈に其の功業を話すのである。

基督教世界の注意を惹いて居る第一の戦の性質はこんなものである。もう一つの戦については何人も口を開かない。何人も殆んど知らないのだ。

此の第二の戦は次のやうなものである。凡ての國民は、彼等の支配者が彼等に告ぐる次のやうな言ひ草に欺かれて居る。「我々の支配を受くる諸君は、他の國民に依つて征服せられる恐れがあるから

我々は諸君の福祉安寧を見守つて居る。その代り我々は諸君に數百萬ルーブリの年金を要求する。その金即ち諸君の勞働の果實は諸君を擁護する爲め色々の武器、大砲、火藥、軍艦を備へる爲め用ゐられるのである。我々は又諸君が我々の組織した制度の内に入り其處で諸君が大いなる機械即ち我々の統率する軍隊の無感覺なる一分子となることを要求する。此の軍隊に入つた以上、諸君は諸君自らの意志の人たることを止めなければならぬ。さうして我々の要求する所を單に爲さねばならぬ。然しながら以上述べた外に我々の望む所は優越權を握ることである。而して優越權を得る手段は殺戮である。故に我々は諸君に殺戮を教へるのである。』

人民は他の國の政府から、又その政府は更に他の國の政府からと云ふ順に攻撃さるゝと云ふ立論の矛盾にも不拘全く同一の危険（平和を彼等が欲するにも不拘）の内に入つて首肯する。しかも彼等が軍隊に入隊することに依つて従はなければならぬあの奴隸的な屈從にも不拘、又彼等の召集せられたる事業の無殘なることにも不的彼等は此の欺瞞に服従する。さうして自らの屈服の爲めに彼等の金を捧げる。さうして又彼等自身他の人々を奴隸にすることを援助する。けれども今に次のやうに云ふ人民が現はれて来る。

『我々を威嚇する危険に就いて諸君の語つた處及びその危険より我々を守ると云ふ諸君の憂慮は欺瞞である。諸君は凡ての國家が平和を希望すと我等に言明する。しかも同時に凡てが他に對して武装して居るのみならず諸君自ら是認すると云ふその律法に依れば萬人は同胞である、さうして彼の國此の國何れに屬するも變りがないのだ。それ故に諸君が以つて我々を恐れしめんとする他國民の攻撃と

云ふ視念は我々には恐しくない。我々はそれを何の大事とも思はない。大切な事は神に依りて與へられた律法、即ち殺戮に参加せよと我々に要求する諸君ですら是認する律法は明白に殺戮を禁するばかりでなく斯様な暴行を見て禁することである。故に我々は殺人の爲めの諸君の準備に與り得ない、否斷じて與らない。我々はそんな目的の爲めには我々の金を捧げまい。人々の精神と良心を墮落せしめんとし、人々を暴行の機械とならしめ多くの人々を勝手に使用し得る惡人に服従せしむる目的を以つて設置された集會には我々は出席しない。』

これは第二の戦争を形成するのである。此戦争は世界の最善なる人々に依り野獸的勢力の代表者に對して長い間戦はれた。而して最近にてはドウホポールとロシヤ政府との間に著しき光彩を放つた。ロシヤ政府はその権内にある有らゆる武器を用ゐた。即ち難多なる警察權を以つてした。或は逮捕、或は彼等の土地から土地への移轉の禁止、相互の交際の禁止、交通の遮斷、偵察、ドウホポールに關する一切の事件、即ち印刷物上に表はれたる彼等に對する誹謗、贈賄、鞭撻、入獄、追放、家庭の廢殘等を報ずる爲めに新聞を發刊することを禁する等有らゆる方法を盡した。

けれどもドウホポールの方では彼等の唯一の宗教的武器のみを採用した。即ち温順なる知識と、忍耐強き固執を用ゐた、さうして彼等は云ふ『神より外に人は何人にも従つてはならない。故に諸君が何事を我等に爲さうとも我々は諸君に従ふことは出来ない、又斷じて従はない。』

人々は野蠻なるスペイン對アメリカ戦争の勇戦者、即ち彼等自身を世界に著名ならしめんと欲し、而してその報酬と名譽を得んとして無數の同胞を殺戮した者或は殺戮せんとして殺戮された者を稱賛

する。然しながら戦争に對して戦ふ戦争の勇者に就いては何人も口を開かない又知りもしない。彼等
は見られず、聞かれずして死んだ。而して今現に或は杖に打たれて、或は不潔なる牢獄にて、或は苦
難多き追放の中にて死につゝある。けれども彼等は最後の呼吸まで善と眞理とに依つて固く立つので
ある。

私は既に死んだ所の幾十人の殉教者を知つて居る、又幾百人かの人々が世界中に散らされて此の眞
理の信捧の爲め今現に殉教しつゝあるのを知つて居る。

私はドロツデンと云ふ田舎者が刑罰隊で死に至るまで苛責されたのを知つて居る。私は又イシウ
チエコと云ふドロツデンの一人が刑罰隊に暫く留め置かれた後世界の終端に追放されたのを知つて
居る。私はオルホウイコフと云ふ一人の農夫が兵役を拒絶して、その結果刑罰隊に送られた。その時
彼を追放に送りつゝありし汽船の甲板上で護衛兵であつたセリョーヂアと云ふ兵士を改心させたこと
も知つて居る。セリョーヂアはオルホウイコフの云ふたこと、即ち兵役服務の罪惡なることを悟つて上
官の所に行つた。さうして古の殉教者のやうに「私は責める者の間に伍することを欲しない、私を殉
教者の間に入れて下さい。」と云つた。それより彼等は彼を責めた。さうして刑罰隊に送つた。さうし
た後にヤクツスク地方に彼を追放した。私は幾十人かのドウホポールが彼等の内多くは死んだり、盲
目になつたりしたがそれでも尙ほ彼等は神聖なる律法に反する要求に屈しなかつたことを知つてゐる
先頃私はサマルカンドにある聯隊にたつた一人で送られた若かいドウホポールから來た手紙を讀んだ
ことがある。又もそれらの同一な要求が出て、同一の威嚇と取扱に逢ふた。而して何時も同じ單純な

しかも如何とも爲難き答「神に依れる私の信仰に反することは爲すことが出来ない。」が答へられるの
であつた。」

『それでは我々は汝を死ぬまで責めるぞ。』

『それが諸君の仕事であらう。諸君は諸君の仕事をするがよい。私は私の仕事をする。』

而して、此の二十歳の青年は凡ての人から離れて、異郷に行き、彼を屈從せしめんとすることを仕
事にし、それに勢力を集注して居る人々、即ち有力にして教育ある、富者に圍まれてゐるけれども屈
從しない。今尙ほその英雄的行爲を堪え忍んでゐる。

然し人々は云ふ

『此等は無益な犠牲である。此等の人々が亡ぶ。然しながら生活状態は依然として同一である。』と
私思ふに、是はキリストの犠牲に就いても同一のことだ。現代人、殊に學問ある者は非常に粗野にな
つた。その粗野の程度は精神的勢力の意義と効果を了解することすら不能となつた位である。五十磅
の爆裂弾が人込みの中で爆發したとする。是れならば彼等は一つの勢力として了解もし又認めること
が出来ぬ。然し生活に於いて實現せられ、實行せられ、殉死さへも拂はれた思想、眞理、即ち今日で
は幾百萬となく知られたる眞理、是れは彼等の概念に依れば、勢力ではない。何故なればそれには音
響がないさうして、誰れも碎けたる骨と、血の池を見ることが出来ないからだ。學問ある人々（實に
そんな人の學問こそ脱線した學問と云ふもんだ）は概博なる學力を全部傾けて、人間は家畜のやうに
群をなして生活するものだ云ふこと、人間は經濟的考察のみに依つてのみ指導されるものだ云ふ

こと、而して人間の理智は單に慰みの爲めに與へられて居ると云ふことを證明せんとしてゐる。然し政府は何が世界を支配して居るかよく知つて居る。即ち世界は自己保存の本能に導かれ、精神的勢力の發揮に主として係つて居ることは疑を入れないと云ふ事をその精神的勢力にその存立も廢滅も掛つて居ると云ふ事を。

これが何故にロシア政府の全勢力が無害なるドホポールを孤立せしめ國境の彼方に追放せしめんとして集注されたかと云ふ適確なる理由である。

けれども凡て斯かる努力にも不拘ドホポールの奮闘は幾百万人かの人を醒ました。

私は幾百かの軍人、或は老人、或は若者が温順にして勤勉なドウホポールが迫害さるゝことによりその迫害を加へる行爲が果して合法的であるや否やを疑ふやうになつたことを知つて居る。私はこれらの人民の生活とその加へられた迫害につき見たり聞いたりしたばかりで、初めて人生と基督教の意義を沈思するやうになつた人々のあることを知つて居る。

而して無数の人民を虐げて居る政府はそのことによつて彼の急所を打たれたことを感じて居る。

以上は現代に於いて戦はれつゝある第二戦争の性質であり又その結果である。而して此の重大なる結果が常にロシア政府のみに對しての問題でない暴力を基礎とし軍隊に依つて支持されて居る有らゆる政府は同様に此の武器に依つて傷いてゐるのである。キリストは云ふた「我既に世に勝てり」と。

而して、人間が彼に依つて與へられた武器の力を信じさへするならば、實に彼が世を征服したことを悟るのである。

此の武器とは即ち凡ての人が自らの理性と良心に従ふことである。これは實に單純で、明白で、萬人を結合する處のものである。諸君は私に〇〇に參與するやうに希望する。諸君は私に武器の準備に要する錢を要求する。さうして組織せられた〇〇の團體に参加するやうに要求する。」

理性ある人即ち良心を賣つたり疊らしたりしない人はさう云ふのである。然し私はあの律法を信奉する。それは諸君も同じく信奉する律法である。此の律法は永き古より單に殺人罪のみならず、凡ての憎しみを禁じた。故に私は諸君に従ふことが出来ない。」

世界が征服されつゝあるのは實に此の單純な方法により、否、此の方法のみに依るのである。

千八百九十八年

欠

欠

上の事で未信者と争ふも矢張り同様であるべきだ。如何程悪く、又變つてキリスト教が説かれても、キリスト教徒たる者は(彼がキリスト教徒であればある程)富が最上の幸福であると思はない、それ故に、富以外には最高の理想をもたぬ人、或は富のみが神より給はつた恩恵である人のやうに、自分の全力をそれに注ぐことは出来ないものである。キリスト教的でない科學や、藝術の領分に於ても亦然りである。而して快樂や優先を目的とした實證的、經驗的科學又は藝術は昔も今も又未來も、常に最もキリスト的分子の少ない人間や國民のものである。私共が世の爲すところを見るにキリスト教の眞理を直に離れ去る軍事的行爲が愈々多くなるが必要である。此處に於て之が軍事に於て非キリスト教國民がキリスト教國民に優る必要な長所、戰術に優る所以で、日本が何故に露國に光輝ある勝ちを得たか充分明かに分る。

又此避け難き必須は、非キリスト教國民のキリスト教國民に勝る點が、日本勝利の重大なる意味を爲すものである。

日本が勝利の意味は、明白な形に於て、嘗に負かされた露國に對してのみならず、又一般キリスト教國民に對して、彼等が誇つてゐた外面的文明の全然空虚なることを示した點にある。此外面的の、キリスト教國民が幾百年間努力の結果として克ち得たる重大と思はれた文明は、甚だつまらぬ、且つ虚しいもので、別に何等の高い情神的素質を以て秀でもせぬ日本國民か、一度それに接するや、キリスト教國民の科學的智識を細菌學も、爆發物もこめて十年のうちに自己のものとなし、巧みに之を實地に應用し、それを又軍事に供し、キリスト教國民に非常に尊重せられる戰爭に於て總てのキリスト

教國民の上に出でたといふことは、此文明のつまらなさを示してゐる。

キリスト教國民は數百年、自家防衛を口實に、御互を滅ぼす最有力な方法を一つ／＼考案した（其方法は直に總ての敵に採用せられた）そして此方法を以て、阿弗利加、亞細亞等未開の國民からあらゆる利益を得る爲め、又相互に威嚇することに利用した。そこで非キリスト教國民の間に、賢い、秀た戰爭國民が出て、自國及び非キリスト教國たる隣人が危険に陥つてゐるを見て、非常な容易、敏速を以て、キリスト教國民に軍事的優越を與へる、有らゆるものを採用して、『若し大なる、強き棍棒にて人汝を搏たば、汝は更に大にして、強き棍棒を以て汝を打つ者を打て、』といふ秘決を悟り、彼等より以上の強者となつたのである。日本人は非常に迅速、容易に、此智識と共に戰術を會得し、それに加ふるに有利な宗教的の專制と、愛國心とを利用して、最強國の軍備にまさる強大な、軍事能力を發揮したのであつた。日本人の露人に對する勝利は總ての軍國民に、最早軍事的威力は自分たちの手になく、既に移つてしまはんども、速に非キリスト教的國民の手に移らねばならぬものたることを示した。何ぜかなれば、日本人の例により、私共が誇りと爲してゐる軍事上の技術を、キリスト教國民により迫害されてゐる、亞細亞や阿弗利加の非キリスト教國民が皆採用して、營に自らを解放するのみならず、又地上からあらゆるキリスト教國を一掃するからである。

されば此戰爭の結果、最も明白に、キリスト教國諸政府は一層その軍備を擴張する必要に迫られ、其軍事費の爲めに國民を苦める、そして此軍備を二倍にしなから、彼等のより壓迫された異教國民がたとへば日本人の如く軍事的技術に熟達して、その轡を脱し、彼等に復讐することを知つてゐるのである。

既に理屈でなく、此戰爭の苦い經驗により、露國其他のキリスト教國民は、暴力は只益々慘禍と、苦惱を増す外に何物とも與へぬといふ眞理を確めた。

此勝利は、自らの軍備の増大は、キリスト教國民の、愚劣、不徳なる行爲なるのみならず、又自身の中に活くるキリスト教の精神に反するもの、斯る行爲に於ては、キリスト教國民としては、常に非キリスト教國民に打ち勝たずに、打ち負かされるが當然たることを示した。此勝利はキリスト教國民に對し、その政府がやつてゐる事は皆彼等を滅ぼすもので、彼等の力を浪費し、就中、自己に對し、非キリスト教國民の間に、最も強大な敵を出現せしめるものたることを示した。此戰爭は、最も明白にキリスト教國民は、キリスト教の精神に反する戰鬪力に秀づることが出来ない、又彼等が依然キリスト教たらんと欲するならば、彼等の努力を決して戰鬪力に向けてはならない、只キリストの教へから出て、暴力によらず、愛と理解とにより人間に至上の幸福を與へる生活の經營に向くべきものたるを示した。

日本人の勝利はキリスト教國の世界に於て斯る重大な意味がある。

三 露國革命運動の核心

日本の勝利は、キリスト教徒の世界に對し、彼等が今日まで經來つた路の眞ならぬことを示した。露國人その者に對しては、此戰爭は、その恐ろしい、無意味な苦惱や、人命、勞力の徒費を以て、強權的政府の組織と、キリスト教との間に存するキリスト教徒の矛盾と共に彼等が不斷そのうちに自己

を見出す、彼の大危険を指し示した。

何の必要もなしに、支配者の頭の中に湧いた、暗い私的の爲に、或る人間共の虚榮の爲めに露國政府は露人の損害を除けば、何の益もない無意味な戦争に人民を引きずり込んだのである。數萬の生命を失ひ、國民の生産力を失ひ、以て誇りとした露國の光榮を失つた。而して何よりも悪いのは、是等悪事の責任者等が皆自分の罪を認めず、却てあらゆる事に於て他を非難することである。斯る状態に止らんか、明白に露國民は一層悲惨な状態に陥るだらう。

凡そ革命は、社會が依て以てその生活の様式を保つてまた世界觀を超えて成長した時始まるものである。其時生活の矛盾、今斯くあるが、斯くなければならなかつた筈、斯くあり得るといふことが明白に知れて、最早以前のまゝでは生活してゆかれなくなるのである。人民の最大多数が之をさとする國民の中に、此革命が起るのである。革命に用ゐられる手段に至つては、その革命の目的如何によるのである。

千七百九十三年に、人民の平等觀と、王、宗教家、貴族、官吏等の専制權との間に存する矛盾が、嘗にその迫害に苦しむ人民のみならず、又總てのキリスト教國民の最上有力の階級の中に自覺せられた。けれども此不平等に是程注意した階級、又國民の自覺が斯程少く奴隸的卑屈にわづらはされたものは、佛國より他にはなかつた。そこで千七百九十三年の革命は佛國に起つたのであつた。平等を實現する最も捷路は、腕力により支配者を排することである、それ故にその革命家達は、自己の目的を暴力により成就した。

現在千九百〇五年に於て、自由な生活の可能合理と、人民から擅に際限のない軍備に無要な軍備の爲め其努力の生産を掠奪する強權——不斷、力を以て人民を無意味に、殘虐な殺人に加はらせる強權——との間に存する矛盾は、嘗に此權力に苦められてゐる人民達により感じられるばかりでなく、支配階級の善き人々にも感じられるのである。此矛盾の鋭く感じられるは露國以外何處にもない。此矛盾が殊に鋭く露國で感じられるのは、愚昧で、耻辱な、戦争に、露國民が政府によりて、引き込まれた爲、なほ露國人の間に行はれる農業状態の結果、なほ主として此國民が特に活潑なキリスト教的自覺をもつが故である。それ故に、人を強權から罷脱せしめることを目的となす千九百五年の革命は露國から始まらねばならぬ、否現に始まつてゐるのだと思ふ。此人民の解放を目的とする革命の手段は、今日まで平等の實現に努めた暴力以外のものによらなければならぬは明かである。偉大な革命により、平等を得んとする人々に、平等は暴力によりて得らるべしと思つたら、それこそ間違になる。暴力はそれ自身が不平等の精確な現象であるが故に、平等は暴力によつて得られないのである。現在革命の主要目的たる自由は、如何なる場合にも暴力を以て得られない。併し今露國に革命を起しつゝある人々は、歐洲革命に何が起つたか、壯嚴な葬列、牢獄の破壊、「行きて、汝の主に語れ」といふ光彩ある演説、建設會議等を宣傳し、現政府を顛覆し、新らしき政府——立憲君主政體、又は社會共和政體すらも——を建て、其革命の目的を達せんと欲つてゐる。

けれども歴史は繰り返されない。暴力革命の時は過ぎた。それが人に與へ得るだけのものは皆與へた。同時にそれは成功しないことを證した。現在露國の革命は、全然特殊な風をなす一億の民の中に

起り、時も千七百九十三年でなく千九百五年で、六十年、八十年、百年の前、自耳曼、瑞典の全然別な氣風の國民の中についた革命と、同様な目的を有することも出来ねば、又同一の手段に依て實現されることもならない。

一億の露國農民、そのうちには又本來總ての國民を含む——には議會も、どんな自由の資物もいらぬ——その表中には何よりも明かに簡易な、眞の自由が缺けてゐる——一つの強權に代ゆるに他の強權を以てすることもいらぬ。只眞實、完全に一切の強權から自由になることが入用だ。

露國に始まり全世界の前に置かれてゐる革命の意義は所得税や其他税金の設定、政教の分離、公共事業の固有、選挙法の設定、國民の政務關與、最も民主的な共和政治、又ば多數の輿論に基く社會主義政治ではない、事實上の自由である。

思考だけでない、事實上の自由は防塞でも殺人でもない、どれ程新らしくとも、強權的政府でもない、只如何にもあれ人間の權力に對する義務を破壊して始めて獲得せられるのである。

四 現在革命の根本原因

現在變轉の根本原因は過去、將來の革命と同じく、宗教的である。

宗教といふ詞は普通、或る不可見の世界が神秘的な定義とか、或は何か人を助け、慰め、勵ます修徳、儀禮、又は世の出來事の豫言、神より出づる御托宣とかいふ意味に取られてゐる。併し眞の宗教とは、何よりも先づ、いや高い、廣く、總ての人に示され、其當時至上の幸福を與へる教へである。

未だキリスト教が創まらぬ以前に、宗教的律戒が、高德な人々に修示され、宣傳せられた。それは、人は只己れの幸福の爲めにのみ生きるものではなく、各自他の幸福の爲、御互に用立つ爲に生きてゐると云ふのである。(佛教、イザヤ、孔子、老子、ストア) 律戒が宣傳せられ、それを知つた人は、その眞理と、幸福とを無視するを得なかつた。併し御互の爲めを基礎として、生活を整へて行かずに、暴力によるの結果は、相互扶助の律戒の幸福を認めながら、人々は暴力の法律に従つて生活し、それを威嚇、應報の必要にもとづく辯解するに至つた、彼等は惡に對して惡を以てする威嚇や、應報がなければ、社會生活は成り立たないものと思つた。一部の者共が自ら責任を帯びて、人の幸福と正義とを整頓する爲めに法律——暴力——を採用し、命令し、他の者共を従へた。けれども命する者は、彼等が利用する權勢の爲めに腐敗せしめられるを免れなかつた。自分が腐敗して、彼等は他人を矯正する代り、自身の腐敗を他人に移すことになつた。従へられた者共は強權に加はるゝが故に、又強權を眞似るが故に、又奴隸的屈服の故に腐敗せしめられる。千九百年以前にキリスト教が現はれた。キリスト教は新勢力を以て相互扶役の律法を確定して、その上に此律法の不朽なるべき原則を明かにした。

キリストの教は非常な明瞭さを以て、此原則により、應報として暴力の必要を言ふは律法の偽りの表現であることを示した。而して種々の方面から、應報の、律法にかなはず、害惡であることを説明し、人間の主要な厄災は、應報に籍口して、一部の者を他の上に立たしめる暴力より生ずることを示した。キリスト教は常に應報の不正のみならず、又害惡なることを示した。暴力より脱れる唯一の方

法は之に逆はずして、穩かに之を忍ぶに示した。

『汝等、目にて目を、齒にて齒を償へと録るされたることを聞きしならん。されど、我汝等に告げん、惡に逆ふなかれ、されど若し人が汝の右の頬を打たば、左の頬をも向けよ、人若し汝を訴え、汝の下着を取らんと欲せば、汝は又上着をも彼に與ふべし、人若し汝と一里を行かんことを求むれば、汝は二里を行くべし。汝に願ふ者に與へ、汝に爲さんことを求むる者を斥くる勿れ。』

此處へは、若し、或る場合に人が暴力を收めて、裁判をすることが出来ることなれば、暴力に限定がつかなくなるであるから暴力をなからしめる爲に、如何なる辯辭の下にも、殊に應報なる言辭の下に、暴力を用ゐてならぬといふことが教へてあるのだ。

此教訓は、惡は惡では根絶出来ない、暴力に惡を避ける唯一の方法は——只暴力を忍ぶにある。

此教訓は明白に表はされ、制定された。けれども生活の必要條件として應報を正しとする謬見が根を下して、キリスト教を知らぬ人々や、キリストを受入れた人が暴力の法律に従つて生活を續けて行く墮落した有様だけを知つてゐる人が多いのである。キリスト教に於ける人の指導者等は、無抵抗の教訓がなくして、相互扶役の教へが受入らると思つてゐる。相互扶役の教へは人間相互の生活の一切の教への鎖鑰であるのだ。無抵抗の教へを受入れずして、相互扶役の教訓を取るのには、恰もアーチを造るに、その契合石を強固にしないと同じである。

世のキリスト教徒は、無抵抗の教訓を受入れずして、異教徒に優る生活を爲し得ると想像し、嘗に非キリスト教國民が爲したことを自らも行つたのみならず、又一層甚しく悪い事やつて、多々益々

キリスト教徒の生活に遠ざかつた。キリスト教の眞髓はその不完全に受入れられた結果として愈々包み隠され、キリスト教國民は、遂に現在の如き状態、則ちキリスト教國民相互が敵視して、互に極力軍備を修め、暇もあらば互に亡ぼさんとしてゐるが如き状態となつた。嘗に相互に軍備を爲すのみならず、又自國に對し又彼等を嫉視し、擡頭し來つた非キリスト教國民に對しても軍備を修めるの狀態に立ち至つた。就中、人間の生活に於て、嘗にキリスト教のみならず、又如何なる高貴な律法をも、人生から悉く排除するに至つた。

此律法の實現を可能ならしめる爲めにキリスト教により與へられた、相互扶役及び無抵抗の至高な律法の悖戻——是が現在革命の根本原因である。

五 無抵抗の教を受けない結果

キリスト教は、復讐や、惡に酬ゆるに惡を以てすることは無益で、無智で、却て惡を榮えしめるものであると教へるのみならず、それは又暴力の惡に抵抗せず、あらゆる暴力に暴力を以て闘はずして、耐え忍ぶことが、人が自らの物となす、眞の自由を獲得する唯一の方法であることを教へた。キリスト教は教へる、人一度暴力を以て闘ふや、彼はそれだけで己れを自由から引き離す、何ぜかなれば、他人に對して自分に暴力を許せば、それで又他が自分に對する暴力を許すこととなり、其結果、以て闘ふ暴力に自らを屈することになるからである、又よし勝者となつたところが、表面上の闘争では、いつも又自分が後より偉大な力の爲めに打ち負かされる危険がある。

此教へは人は只人間全體に與へられた至上の、侵すべからぬ律法を完全に履行することによつてのみ自由となることが出来る。教へは又曰ふ、暴力の滅滅も、完全な自由の獲得も、只穩しく、逆はず、如何なる暴力をも堪え忍ぶにより達成せられると。

キリスト教は人の完全は自由の律法にある事を宣言した。けれども其眞意に於て、至上の律法に服従するの必要を以てしてゐる。

『又身體を移して、靈魂を移し得ざる者を恐るゝ勿れ、靈魂をも身體をも地獄に滅ほし得る者も更に恐れよ』(馬太傳第十章、二十八節)

此教へを眞意の存する通りに受入れ、至上の律法に奉仕した者は、總て其他の義務より免れるのである。彼等は穩かに人の暴力を忍んだ、けれども至高の律法にかなはぬ行爲に於ては、誰にも義務を負はなかつた。

初代のキリスト教徒等は、異教國民の間に僅かな人數しきや居なかつた時、斯の如く振舞つた。

彼等は、神の律法を信する無上法にかなはぬ行爲を政府の爲めになすことを拒絶し、その爲めに迫害懲罰せられた。けれども彼等は何人にも義務を負はず、全く自由であつた。全國民が外形上の儀禮により聖洗を受けキリスト教徒の名を冠つた時、キリスト教徒の權勢に對する關係は一變した。政府は自宗に從順な僧侶の扶けにより、其下の人民に對し、暴力や殺戮は、報復の爲め、又は迫害される者や、力弱き者を保護するが爲めには用ゐても差支へないものであると吹き込んだ。又人民をして神の前に權力によりて定められたことは、相違なく履行しますといふ誓を立てしめ、政府をその人民をし

て、自らキリスト教徒と信じながら暴力や殺戮が禁制であることを思はなくなつた。暴力や殺戮を爲して、彼等は自然に、是等によりて爲さるゝものに服従することになつた。その結果、キリスト教徒はキリストの宣傳した自由の代りに、又以前のやうに暴力を堪え忍ぶのが自分等の義務と思ふ代りに、又神より外には従ふべきものでないと思ふ代りに、其義務を全然反對の方に解釋するやうになつた、則ち、暴力に抵抗しないのは恥(名譽) 政府の權威に服するのは、神聖極る義務と思ふやうになり、奴隸となり終つた。

斯る傳統の教育を受けた者は、嘗にその奴隸たるを恥とせなばかりか、却て奴隸がいつも自分の主人の偉大を誇るやうに、自個の政府の強大を誇るに至つた。

近頃此キリスト教の悖戻から、キリスト教國民を、一層ひどく奴隸的境遇に沈淪せしめる新たな迷妄が生れ出た。此迷妄は、複雑した選舉や、代議制度で、間接、或は直接に自個の代表者を出して、政務に干與せしめることは、聽て自分が政治をとる譯となるから、自分等は自由であるといふに在る。併し之は明かに迷妄で、理論上からも、又實際からも、最も民主的な國家で、どれ程廣汎な選舉權の下でも、國民は自分の意志を發表することは出来ない。第一に、幾百萬の人間總てに共通な意見なるものが有り得ないし、第二に、よしそんなものがあつたにしろ、投票の大多數が決してそれを表現し得ない。此迷妄たるや、選ばれた代表者達が、政治に涉はつて、法を立て、國民を支配するは、その福趾の爲に非ずして、實は黨争の間に自家の勢威を張らうとするのが多くは其唯一の目的であることは言はずとしても、又此迷妄により、嘘偽、愚昧、賄賂等のあらゆる墮落が起つたことは言

はずとしてもそれに陥つて来た人々を奴隷の境遇に満足せしめるが故に、特に其害が甚しい。……一方又斯る所謂自治國民の政府の行動や施設は、黨争、陰謀、虚榮、誇衒の争闘にわづらはされ、全國民の意志や、冀望に關すること尠きは、丁度最も專制的な政府の行動や施設の如くである。是等の人々は恰も牢屋に入つた者が、牢内の事を始末するが爲めに當番を選擧する時、賛否の發言が出来るから、自分は自由だと想像するに等しい。

よしや強權の暴力の下に苦むとも、世にも暴惡專制な國民の一人でも全然自由たることが出来る。彼はその權力を設立しなかつたのだ。立憲國民は常に奴隷である、其理由は、自分等が政治に干與してゐる、又は干與し得られると想像して、自分等の上に押つ被ぶされたあらゆる法律を承認し、總て強權の所置に服従するからである、彼等は、自ら自由と想像して、其想像の結果、何により眞の自由が成り立つかといふことすらも悟らなくなるのであるから。

斯る人々は自分等が愈々自由になると想像しながら、愈々益々政府の奴隷となり行くのである。社會主義の傳播と其説の成功程度の奴隷化の愈々大なることを示すものがない。それは愈々人を奴隷化するに努めるものだ。

此點に付いては、露國民は、今まで政權に接し、此接觸により墮落はしなかつたので、大に有利な位置には立つてゐるけれど、露國民も亦他國民と同様に、權力の隆興、宣誓、大國の威勢、祖國の發

展といふが如きに迷はされ、尙ほ政府に忠實なるべき義務があると思つてゐる。近頃露國でも輕卒を人々が歐洲人がそのうちに自分を見出す立憲の奴隷制度に國民を曳きずり入れようとしてゐる。無抵抗の教へを受入れぬ結果は、斯くの如く、一般的軍備と、戦争との慘禍を招き、キリストの教へにより示された眞の自由から愈々人をして遠ざからしめてゐる。

六 現今の轉換の外的第一因

キリストの無抵抗主義をば採用せずして、墮落の結果は、キリスト教國民をして相互に敵對せしめその結果たる厄災を受けしめ、愈々強められる奴隷の境遇に陥れた。而してキリスト教世界の人々は此奴隷の苦みを感じ始めた。現在の革命は、此根原的、一般的な原因の上に立つてゐる。此革命が今始まつた部分的、時機的原因は、第一、日本との戦争で、キリスト教國に、下らぬ軍備主義が根を下ろしてゐることが知れたこと、第二、土地利用の相當な自然の權利を奪はれた勞働者等の困厄不滿の増大したことである。

此二個の原因は、總てのキリスト教國民に共通であるが、露國民の生活の歴史上特殊の状態により、特に他國民にまさり、いや鋭く、いや活潑に露國民により、又現下に於て感じられるのである。

政府に義務を負ふことにより生ずる自分の位置のみじめさが露國人に明白に分つたのは、自分等が政府により曳り込まれた、此馬鹿けた戦争の爲めばかりではないし又露國人は常に歐洲人とは違つたふつに權力に關係してきたからである。露國民は決して權力と争ふたことがない、とりわけ權力に參

與して、之に腐敗せしめられたことがない。

露國人は、歐洲人の大多數（遺憾なことには今や露國人の墮落した或る人々のやうに）のやうに權力を、本質的各人が努力する幸福とは見なかつた、却て人が之から遠ざからねばならぬ罪惡なりと見てゐた。それ故に露國民の大多數は常に、權力に干與することにより受ける精神的の災殃（ちやくわく）よりも肉體の困厄（くわんいつ）を受けるをましであるとなした。そこで露國民の大多數は權力に従ひ來り、又従つてゐるが、その理由は革命家が教へんと欲ふやうに、それを避けることが出来ないからではない。又彼等は政務に干與することを承知しなかつたが、それは自由主義者が教へるやうに、それを受けることが出来なかつたが爲ではない、彼等の大多數は暴力や、暴力の争鬭や、暴力に加はるよりも、之を忍ぶ方を選んだからである。その關係で露國には常に、専制政治が行はれたのである。別言すれば、只力強い、喧嘩好きの者が、弱い喧嘩を好かぬ者の上に立つてきたのである。

ワーリヤグ人がスラーグ人を征服後に出來た昔語は、露國民が權力に對する、キリスト教にすら對する關係を完全に示したものである。『我等は權力の罪惡にかゝはらうと思はぬ、若しお前達それが罪惡でないと思ふなら、來て支配しなさい』權力に對する此關係を以て、イワン第六世を始め、露國人でない暴君の最も殘虐、無法な惡政に對して従順であつた所以を説明する……

斯く昔から露國人は、力と、權力に對する自分の關係を見てきたのである。斯くの如く彼等の多數は今でも見てゐるのである。他國に於けると同様キリスト教徒をして不知不覺強權に服従し、教へに反する行爲を爲さした迷妄の精神が露國人の間にも起つたのである。けれども此迷妄に捕らはれたは

只墮落した上層のみで、大多數の國民は、權力に干與せんよりは、暴力による苦痛を忍ばんことを優ると爲した。

私は思ふ、此露國人の權力に對する關係は露國民が、他國民に優り、友愛、平等、謙遜、愛、即ち權力に忍従するか又はそれに義務つけられるかの劃然たる分岐點を爲す眞のキリスト教が、ヨリ多く保存されてゐるが故である。眞正のキリスト教徒たる者は忍び従ふことが出来る、否争はずして、一切の暴力に従はざるを得ない、併し權力に義務つけられない、即ちその合法なるを承認し難いのである。一般の政府、殊に露國の政府は、その正教を國教として、どれ程此權力に對するキリスト教の眞理を變更せんと努めたし、今も努めてゐるけれど、權力に對する忍従と、之に負ふ義務との區別、及びキリスト教の精神とは、國民の最大多數を占める露國勞働者の心中に生きてゐる。

此矛盾は正教の悖戻した教へに屬しない、所謂の背教者（セウクシヤ）なる熱心なキリスト教徒の間に特に大なる注意を喚起した。此變つた名をつけられたキリスト教徒等は決して政府の權力を合宜と認めなかつた。大多數は苦痛の故に、承認されない、不法の政府の要求に服従し、或る少數の者は、いろいろの手段で此要求を切り脱け、又逃けてしまつた。一般に強權により徴兵制が布かれ、キリスト教徒に對して、各殺戮に赴くことを要求するや、多くの露國正教徒は強權とキリスト教の兩立しないことを悟り始めた。すると正教徒ならぬ、様々な信條を有するキリスト教徒が直に兵役を拒否した。此拒否は僅かで（承認した者の千分の一も疑はしい）あつたが、其影響は偉大で拒否者は殘虐な處刑を受け

政府から迫害せられたが、政府の要求の非キリスト教的なることは、常に背教者のみならず、總ての露國民の眼を開いた、そして在來神と人との律法に矛盾の存するを氣付かなかつた大多數の人々は此矛盾を見るに至つた。そして露國民の中には彼の醜い、馬鹿氣で、つまらぬ良心解放の仕事が始まつた。

露國民の状態は、殘酷な、何等申譯の立たぬ日露戦争が起つたとき、斯の如くであつた。而して此處に戦争が起り、文運進歩の下、一般不滿の下、就中數萬の人間は露國の此處彼處の家と重要な事業から引き離され、下らぬ殘虐な仕事につかはれた。此戦争は見憎らしい、馬鹿げた國內の事は、政府に對する義務に基く罪や、不法によると明らか悟らした一閃であつた。

而して此自覺はいろいろに表はれた、又今ではまつたく様々に、且つ重大な現象となつてあらはれてゐる、*Сознание, что мы живем в эпоху величайших исторических событий, что мы живем в эпоху величайших исторических событий, что мы живем в эпоху величайших исторических событий.*

政府に義務つけられることの不法、不必要の自覺的證據は怎麼ものである。此もの、無意識的の證據は、今や皆革命家によつても、又其敵によつても造られたものである。黒海及びクロンシュタットに於ける水兵の反亂、キイエフ其他に於ける陸兵の反亂、荒掠、自治農民の一揆等は則ち之である。政府の威信は地に墜ち、現代の人民の前に、その大多數の前に、政府に従ふべきものか、又従つて行くべきかといふ問題が起つてゐる。

此國民のうちに問題の起つた事に於て、來るべき、併し既に始まつた、大きな世界的革命の原因の

一つがある。

七 革命の外的第二因

現在革命の外的第二因は、労働者が自己の自然な、土地利用の權利を奪はれたことと、此剝奪はキリスト教徒を、愈々益々増大する労働者の困厄に引き入れ、その労働を利用する階級に對する憤怒を増大せしめたことにある。此原因が殊に露國に於て痛切に感じられるわけは、露國労働者の大部分は未だ農業により生活を立ててゐるからである。而して人數の増加と、土地の不足の結果、自分が唯一のキリスト教的社會生活と信じて、在來馴れた農業を抛てるか、或は、人民から掠奪して、私有してゐる政府に従はぬかどつちかにしなければならなくなつた。

Сейчас же, когда мы живем в эпоху величайших исторических событий, когда мы живем в эпоху величайших исторических событий, когда мы живем в эпоху величайших исторических событий.

併し此考へは全然謬つてゐる。

ヨセフが埃及人民に爲した、あらゆる戰勝國民が戰敗國民に爲したこと、現に人間が人間に爲すと、即ち土地の利用を奪ふことは非常に恐ろしく殘酷な奴隸制度である。個人の奴隸は一人の奴隸であるが、土地の利用權を剝奪された人間は、總ての人の奴隸である。併し重大な土地奴隸の慘事は是

ではない。奴隷の主人は如何に残酷でも、自己の利益の見地から、奴隷を強制して仕事を止めて、自分の利益を削ぐやうなことはしない、苛責を加へ、飢えしめるが如きことはない。土地を奪はれた奴隷は常に労働を強ゐられ、苛責を加へられ、飢い目にあはされ、一分の小休みもなく、全然安心してをられることがない、換言すれば人々の意志から自由でない、別してよくない人々の欲張根性から自由でない。而して之にも土地奴隷の主なる困厄があるのではない。其最なるものは、實に彼等が道徳的の生活を送れないことに存する。土地を以て労働せず、天然と闘はず、其結果彼は人と戦はざるを得ないのである。腕力を以て、又は奸智を以て、人が土地から得た、又他人の労働から得たものを奪はふとするのである。

土地の奴隷は、土地の剝奪が奴隷制度なりと承認する人でさえ思ふやうな、奴隷制度の残物ではない、却て之が抑もの奴隷制度であつて、あらゆる他の奴隷は此處に發生、生育して、其殘虐なることに到底個人の奴隷制と比すべくもない。個人の奴隷制度は只土地奴隷制に見る種々な悪用の一に過ぎない、であるから、人を土地の奴隷制度から解放しないで、個人の奴隷制度から解放するのは、解放ではない、只奴隷制度の害悪の一つを廢止したゞけである、而して露國に於て、少許の土地をもつて農奴を解放した際あつたやうに、多くの場合、それは只一時奴隷から彼等の状態を隠すに止まる詐購である。

露國人は農奴制の下にあつて、常に此事を悟つてゐた、そして曰つた『俺等は貴下がたの物、土地は俺等の物だ、そして解放されても、全國民に向つて土地を要求し、且つ土地解放を待つてゐた。國民

は之を悟り、農奴を廢すると共に少許の土地を與へたので、一時は穩しくしてゐたが、其土地に住む人口の増加につれて、それに關する問題が改めて起り、しかもそれが最も明白、且つ決定的の形を取るに至つた。

未だ國民が農奴制の下にあつた時には、國民は土地を、自分の生活に必要なだけ利用した。増大する人口の振り割に就て、政府も地主も心配した。そして二三の人々によりて土地を獲得する根本的不公正は國民に分らなかつた。併し農奴制が廢止せられるや否や、經濟的、農業的——よしや繁榮でなくして、國民生活の可能に關する政府や地主の心配はなくなつてしまつた。農民が支配して來た若干の地積はそれを擴げることが出來ず何時も元のまゝであつた、然るに人口が増殖して、人民はそのまゝでは暮していかれぬことを愈々明白に悟るに至つた。そこで人民は政府が土地掠奪の法律を改めることを期待した。十年、二十年、三十年、四十年を待つたが、土地は段々私有に歸して、人民は飢えて、口が減るか又は田園生活を全然抛つて、其子女を泥棒に、織工、錠前職に仕立るかしなければならなくなつた。五十年経つて、彼等の状態は愈々悪くなり、遂には彼等がキリスト教的生活を營むのに必要と思つた其生活組織さえも懷れてしまつた。然るに政府は彼等に土地を與へないで、却て土地を自個の臣に與へ、それを其者共の爲に維持し、人民には土地の自由を諦めさせるに努め歐州風に工業の職工徒弟たらしめるやうに獎勵した。斯る生活は人民が見て以て愚かしく且つ罪あるものとすらである。

禍の原因である。只其相違は、歐米人が土地の私有権を認めて之を取られたのは久しい以前で、新しい關係は此不公正以外なりとし、歐米の人民は自己の境遇の基く眞因を見て、却て、市場の無き事、關稅、不法な課稅や、資本主義等あらゆる處に原因を求めてゐる。

露國人民はまだ彼等の上に根本的不義が全部成し遂げられてゐるとは見ない。

無思慮、危険な軍備、戰爭、國民の土地共有權奪奪等のものは、私の考へによれば、現在キリスト教の世界に於て起つてゐる革命の原因である。革命が他ならぬ露國に起つたといふ理由は、キリスト教的世界觀が何處でも露西亞程に純潔と、力をもつてゐないからで、又何處でも露西亞程、農業が國民の大多數によつて行はれてゐないからである。

八 義務を拒んだ者はどうなるか

露國民は、其生活組織や状態の特殊な御蔭で以て、他のキリスト教國民よりも早く、強權の政府に從屬することより起る災禍に就て自覺した。而して此自覺と強權を罷脱せんとする努力とが、私の考へでは、此革命、獨り露國のみならず總てのキリスト教國に起りつゝある此革命の核心をなすものである。

併し人民が享受する斯る安寧、幸福が、政府の威力により保證せられることを確言するのは、全然

獨り合點である。若し政府組織の下にある人民が享受する災厄と幸福なるものがありとすれば、私共はそれを知るが、政府を廢した人民が如何なる状態にあるべきかを知らない。若し大國以外に往々今までも人が生活して來た小團體の生活が成立するものとせば、斯る團體は、政府の暴力から解放された、社會組織のあらゆる幸福を享受して、國家の權力に服従する人民に臨む災厄の百分の一を受けないのである。

私は幾度も私の本で——

は愈々人を驚かすことだ。殆ど到る處悪い人の手に權力が歸してゐるから、斯る状態は總ての國家に於て元から存在してゐる。悪い人々は政權に近づく必要上あらゆる惡辣、陋劣を爲し得るだけでも斯くならざるを得ないのだと書いた。私は幾度も、人民が苦む、最大の困憊は、一部の者が巨大な富を集めて、大多數が貧乏であること、耕作しない者が土地を掠奪すること、軍備戰爭の撤廢せられぬこと、人間が強權を認むるが故の墮落であることを示すべく努力した。政府がなければ人間の状態が善くなるか、悪しくなるかの問題を決するに、何故政府が何人より成るかの問題より先にしなければならぬかの理由を示すべく努力した。人——政府をつくる人は概して悪いか、善いか？若し概して善

いなら、その政府は善政を爲し、悪しければ、悪政を爲すであらう。ジョン第四世、ヘンリー第八世、マラー、ナポレオン、アラクチェエフ、メツナルニヒ、タレイラン等の人物は如何、歴史は彼等が水準以下の悪い人物たることを示してゐる。

何の社會にでも、*Misgovernment is inevitable*。政府の無い社會では、斯る人間は、半ば自分を侮辱する人々との争闘と、半ば又特に——人々に對する行動の最強力なる武器を以て——輿論との扞格に支持せられて、強力となるであらう。強權の政府に支配せられる社會に於ては、斯る人々は權力を獲得し、買収によつて後援、稱推、擴大され、人爲的に喚起された輿論による權力を利用するのである。之を聞く、政府、即ち強權なくして人は如何にして生きていけやうかと。之に對して言ふべきである。叡智の實在たる人間が、聰明なる合意にあらすして、祕かに自個の生命が暴力と結ぶことを承認して、如何して生きていけるかと。

二つに一つである、人は叡智の生物か、又朦昧の動物か？若し朦昧の動物であるならば、其間の事は暴力に訴え得べく、又訴ふる事こそ然るべしである、一方が強權を有して、他が有しないといふ理由はない。若し又人が叡智の實在であるならば、其關係は暴力に非ずして、叡智を本としたものでなくてはならぬ。

此結論は、自己を叡智の實在と認める人に取つては當然と思はれる。けれども政府の權力を辯護する人々は、人間を、其本質を、其叡智な天性を考へなかつた。彼等は人間のある結合を云々して、そ

れに何か超自然にして、神祕なる意味をくつゝけた。

彼等は曰く、「露國、佛蘭西、英吉利、獨逸等はどうなるか、若し人民が政府に従はぬとなれば？」露西亞はどうなる——露西亞は？露西亞は何か？その始は何處？其終りは何處？ポーランドは？バルチック洲は？其民と共にカフカースは？カザンの韃靼人は？フェルガン地方は？黒龍江は？是等は悉く露西亞ではなく、異邦であつて、露國と名付る連續から離れ去らすことを欲してゐる。是等の諸國が露西亞の部分なりと思はれることは、偶然な、一時的の現象で、歴史的の事件、殊に暴力、不正、殘虐の結果である。今日なほ結合を保つは、其國々の上に加へられる強權あるが爲である。

我々の記憶するところでは、ニースは伊太利のものであつたのが、突然佛領になつた、アルサスは佛國のもので、獨逸のものとなつた。沿海洲は支那のもので、露國の有となつた。樺太は露國のものであつたのが日本のものとなつた。今や地國の權力は匈牙利、ボヘミア、ガリシヤに、英國の權力は愛蘭土、加奈陀、濠洲、其他多くの國々に、露國の政府はポーランド、ジョルジャ其他に權を擴げてゐる。けれども明白に此權勢は破れ得るのである。露、墺、不列顛、佛蘭西等を統一してゐる唯一の力は皆之強權である。此強權は、自己の叡智な天性、キリストの與へた自由の律法に反して、其暴力の悪業を求むる人間に對して義務を負はせる者共の所産である。叡智なる本性にかなふ其自由を悟り、その良心と、律法に反する行爲を罷めることは人のなすべきことだ。彼の人爲の、表面だけ、偉大な統一してゐる露西亞、佛蘭西、英吉利になつてはならぬ——何かの名によつて、人をその生活の犠牲に供するのみならず、又其叡智の本性的自由の犠牲となしてはならぬ。

人は、想像より外には成立しない、唯一の露西亞、佛蘭西、不列顛、北米合衆國等の偶像の爲めに、權力に服従するが如きことを止めねばならぬ、然らば今日人間の靈肉共に滅ぼしてゐる此恐ろしい偶像は獨りで自滅するのである。

争闘を繰り返してゐる小國家から、大きな國家の成立することは、(小さな區劃を大きな國境にして)その小さな戦争や、戦争の流血及び罪惡を減少するものであると、言ふ者がある。併し斯る斷定は全然得手勝手である、なぜかなれば、何人も此の場合には、又彼の場合にも、罪惡の分量を計つてみた者はないのであるから。又露國の分邦時代の戦争、佛國に於けるブルガンデー、フランドル、ノルマンデー等の戦争がナポレオン、アレキサンドル、又は今終つたばかりの日露戦争と同じ犠牲を拂つたと思ふことは困難である。

國家が大きくなることの只一つの申譯は——一大王國の出現で、それが出来れば戦争をなくすることが出来るといふにある。併しアレキサンドル大帝、羅馬及びナポレオンに至るまで、斯る帝國の設立計畫は其世界統一の目的を達せず、却て國民の大難儀を惹き起した。此くの如く國家の努力と其増大とによる人々の世界統一はどうしても出来ない。統一の成功は只其反對のことを爲すにある、則ち、強權を有する國家を無くすればよい。

殘酷で、恐ろしい、迷信、人身供御、妖術、宗教戦争、拷問等が嘗てあつた。けれども人は斯る迷妄を罷脱した。然るに政府に對する迷信は残つてゐる、何かそれが神聖なものでもあるらしく依然として人間を支配してゐる。恐らく以前にあつた迷信で、是以上殘酷で、恐ろしい犠牲を納めたものは

有るまい。斯る迷信の成立は、土地、氣質、利益の違つた國民が、同一の權力が自家の頭上加はつてゐるが故に、自分等は皆同一だと請合ひ、國民は又それを信じ、此統合に自分の屬することを矜ととするからである。

此迷信は随分古く、且つ根強く維持されて來て、嘗に、王、大臣、將軍、軍人、官吏、等此人爲的の統一の所在、確立、擴張は、此統一の傘下に集まる人民の幸福であると信ずる人達が此迷信を利用するのみならず、又其人民自個が、從屬といふことが不必要で、只善惡の外には何物をも齎らさぬのに、露西亞とか、佛蘭西とか、獨逸とかに屬することを自慢する程、馴れつこになつてゐる。

それ故に、人民が穩しく、反抗せずに、従つて、政府に義務を負はぬことになる結果、大きな國家が潰れたならば、それはそうした人間のうちに暴力と、惡の惱が減少し、斯る人間が二千五百年以前に人に示され、段々少し宛人間の意識に上つてきた、相互扶役の至上律にかなふ生活を營むことが遙に容易になるであらう。

一般に露人にとりて(市に居る者も村に住む者も)現今の如き重大な秋に際して爲さねばならぬことは、他人の經驗、他人の意見、理解、詞、いろ／＼な社會民主主義者、立憲主義者やその他のものによつて生きず、自分の頭で考へ、其既往より、又その靈的基礎より其既往に對して本質的で、又此基礎にも本質的な生活の新様式を選び出して、己れの生活を生きて行くことである。

九 現在の革命に對して人は如何に行動せば可なるや

現在人間のうちに起つてゐる革命は、自己を人間の謬まつた権力から解放するにある。此革命は在來キリスト教國に起つた革命と其性質を同じうするが故に、之に加はる人民の行動も従前の革命に加はつた者の行動以外には出でないのである。

以前の革命家の行動は暴力を以つて主権者を覆へして、自らそれを掌握したことであつた。今日の革命に加はる者が従前の革命運動と同一轍に陥つてゐるとは言へ、しかも此革命の重立ちたる者は全然別で、その起つた處も異なれば、加はつた者の數も違ふ。

従前の革命家等は——特に勞働をしない、高級な職業の人々と之に操縦された都市の勞働者共であつたが、今次の革命家は特に農民の多數でなければならぬと、又そうであらう。従前の革命が始まり、又起つたところは都市であつた。現在の英命は、特に村落である。加擔した人數は前革命では全國民の一、二割であつたが、現に露國に起つてゐる革命は九割に達する筈である。

であるから露國都市民の運動は、總て歐洲に倣ひ、團體をつくり、必要な宣言、示威運動、反亂を起し、新政府を考察し——殺戮が此革命に用立つと思つて、既にそれをやつてゐる不幸な、墮落した人選のことは措いて言はず——あらゆる行爲に於ては常に革命を成功せしめる目的にかなはぬのみならず、又政府よりも一層甚しく（自ら覺らずして彼等は政府の最も忠實な援助者となつてゐる）革命の進行を止め、之を嘘偽の方向に導き、阻害する。

今露國民を脅かしてゐる危険は、露國民が、穩和、眞正の自由の道を示されたその特殊な位置によらず、革命成功の要訣を理解しない者共の爲めに、以前の革命に等しい奴隷の位置に曳き入り込まれ、彼等が現に立つ道を棄て、他のキリスト教國民を亡滅に導く彼の偽りの途を行くことにある。

此危険を避ける爲めには、露國民は何よりも先づ英、米などの立憲主義者や社會主義者の計畫などに傾着なく、自らの良心に従つて行動するやうにしなければならぬ。露國民は此自己に臨む偉大な事業を完行する爲めには、獨り露國の政治や、露國家が公民の自由を保證することだけに注意せず、併せて先づ何より自己の考へを露國々家といふことから解放せなければならぬ、其結果は又此國家の公民權などに目を呉れぬこととなるのである。現在の露國民にとつて、自由を獲る爲には、何かの計畫を立てるはならぬ、却て、政府が彼等を陥れ、又は革命家や自由主義者等を引き入れ得るあらゆる計畫から、其身を保留せねばならぬ。

露國民は、自らの良心に従つて行動するやうにしなければならぬ。露國民は此自己に臨む偉大な事業を完行する爲めには、獨り露國の政治や、露國家が公民の自由を保證することだけに注意せず、併せて先づ何より自己の考へを露國々家といふことから解放せなければならぬ、其結果は又此國家の公民權などに目を呉れぬこととなるのである。現在の露國民にとつて、自由を獲る爲には、何かの計畫を立てるはならぬ、却て、政府が彼等を陥れ、又は革命家や自由主義者等を引き入れ得るあらゆる計畫から、其身を保留せねばならぬ。

現在の革命の幸福な結果を得んが爲めには農民等は斯く爲すべきである。

都市の人々則ち、貴族、商人、醫師、教師、記者、技術家等現に革命に従事してゐる人には、其人員だけから言つても農民に比べて百に對する一の割合であるから、そのやつてゐることの虚しきことを何よりも先に理解しな。而して其爲には現にやつてゐる馬鹿けた、間違つた、善くない行動を全然改めねばならぬのである。斯る人々は、『與へよ、さらば我等革命を起さん』と故意に革命が出来るのではない、革命は百年以前、全然異つた状態の下に爲されたものに似寄つた定型に基いて爲し得られるものではない、と悟る必要がある。就中、是等の人々は、人々が従前の生活が皮想で、貧弱なものであることを悟り、自己に眞の幸福を與へ得る根本的な新しいものにその生活を打建てようとする時——人々が理想的、最上の生活をもつに至つた時、革命が人々の状態を改善するものたることを覺らねばならぬ。

を基礎として、暴力を以て立つので、軍備、兵役、牢獄、刑罰、土地の掠奪等、最もキリストの教に反することを止めないのである。されば人間の肉體上の幸福と同じく、精神上的の幸福も只一つ、あらゆる暴力に逆はず、しかもそれに加はらず、それに義務を負はぬことによつて得られる。

であるから都市の人士が若し現に此革命に眞實力をつくさんとならば、彼等が現に行つてゐる、殘

虐が不自然。荒唐な行爲を止め、村落に移住し、農民の仕事を分擔し、彼等が権力を用ゆるの冷淡と輕蔑とを、忍耐とを、殊に其勞働愛好心とを學び、今日のやうに、人民を暴行に誘ひ入れず、却てあらゆる暴行を避けしめ、如何なる強權的政府にも義務を負はざらしめ、若し必要とあらば、政府の廢止によりて必然に惹起さるゝ問題の闡明に、其文字の智識を以つて、人民に仕へねばならぬのである。

一〇 強權的政府より解放された社會の組織

是に對する答は純粹の露國人が與へる。蓋し私が思ふに現在革命は露國を措いて、何れの處にも始まらなければ、又完成することもないからであると。

露國民は、その大多數が農民であるが爲め、巢の中の蜜蜂のやうに、全然その共同の生活に満足して、確然とした社會的關係を自然に結んできたのである。只露國人ばかりの政府の干涉なしに住つた處では何處でも、*the Government of the people by the people for the people*、露國の東境全部に移住して、斯る團體は又土耳其に入り、

そのキリスト教的社會組織を維持して、土耳其回王の治下に穩かに生活をつゞけてゐる。斯る團體は何時かしら支那や、中央亞細亞に移り、其處に長い間の自己の精神を整へるもの以外には、何等政府といふものを必要としなかつた。正しくその如く露國民の大多數たる農民は、只政府を忍び居るのみで、毫もそれを必要としない。政府は露國民に取りて必要でないのみならず、全く邪魔物である。

は只、露國の人民が善い生活を送るに必要と感ずる農業的共同生活を助け、土地私有を支持する權力を破壊するに助けとなり、土地を解放し、之を萬民平等に分與するは扶けとなるのである。

それ故露國民にとつては、政府を廢してから先に、従前のものに換へる新らしい共同生活の様式を考察する必要はない、そんな共同生活は露國民の爲には疾くから存在して、其本性にかなひ、その共同生活の要求を常に満たして來たのである。

現にキリスト教國に迫つてゐる、又露國に始まつてゐる革命は、前の革命と變つてゐる。前の破壊の後に何物をも建てなかつた、或は一つの政府の代りに他の政府を以てした。此革命では何物をも破壊する必要はない、只強權に加はらないことが必要だ、只生きた處を抜き去つて、その後人工の無生物を植へるものではない、只革命の成長を妨げるものを排ければよい。であるから現在の大革命に寄與する者は、輕卒亂暴な、獨り合點の人間ではない。こんな者は、自分が闘つてゐる罪惡の原因が暴力にあることをさとらぬのである。そして盲目的に、無思慮に、現在の暴力を破壊して、自分の新らしきものを以て之

に換える。起つてゐる革命に寄與するところある人は、何物をも廢せず、何物をも破壊せず、自己の生活を強權より遠ざけ、争はずして、その上加へられる、あらゆる暴力を堪え忍び、權力に干與せず政府に義務を負はないのである。

露國民は大多數農民である。彼等は只今のやうにして暮していかなねばならぬ、農耕を業とした共同の生活をせねばならぬ。只決して政治行動に參與し、それに義務を負ふてはならぬ。

露國民が此固有な共同生活を益々行へば行ふ程、その生活に強權の政府が干渉する可能性が少くなる、政府干渉の口實が愈々少くなり、その權力を遂行するに助力する者が愈々少くなつて、此權力を廢することが愈々容易になる。

人間を御互に闘はし、土地の使用權を剝奪した權力のなくなることだと。強權から解放された人間は最早戦備もいらねば、御互に戦争もせずすむ、そして土地に近づくを得て、自然に、彼の人間に共通固有な、最も愉快な健全な、且つ、道徳的な農業を營むを得、その下にあつて人々の努力は、自然との争闘に向けられ、又人との争闘に向けられずこれによつて總て他の勞働の生れ出で、只暴力によりて生きてゐた人々に忘れてゐた其職業に向けられるのである。

政府の義務を拒絶することは人を必然に農業生活に導く。農業生活は人を最も自然にして、斯る生活の下に、只農業状態のみに見出される社會の小さな團體組織に導くのである。

斯る團體が個々に生活して行くのではない、只一つの經濟的、飼養又宗教的の協約が相互の間に行

はれるのは甚だ嫌であるが、之は自由な承認を経たもので、従前の、權力に基く政府の法律命令とは全然相違したものである。

權力の廢止は人間の協合を不可能ならしめない、却て双方合意の協合は、權力に基く協合の破れた時に成立するのである。

壊れたものの跡に新しい、堅固な家を建てるには舊い壁を取り拂ひ、石の上に石を積んで新に造らねばならぬ。

人の間につくられる結合も、權力によつて出来た結合が破れた後に出来るのである。

二二 文明はどうなるか？

併し人間が造り上げた一切のものは什麼なるか、文明はどうなるか？

四足で歩むことを教へることに就て、ウォルテールの書いた手紙『猿への復歸』が——或る自然の生活に復歸することであると人々は言ふ、其人々は私共が今日御蔭を蒙つてゐる文明は偉大な幸福であると信じ、文明の果實の一つだにも失ふ考がないのである。

「何と愚昧なことだらう、地上地下の電氣鐵道、電燈、博物館劇場、記念碑のある私共都會の代りに、草深い田舎にいつまでも世を送るとは」と、斯る人々は云ふ。左様、そしてロンドン、紐育等大都市の所謂スラムス(貧民窟)女郎屋、銀行や、内外の敵にそなへる爆彈や、監獄や、絞首架、百萬の兵士やをそなへた都會にね、と私は言ふ。

「文明、我等の文明は偉大な幸福である」と、人々は言ふ。けれども斯く信じてゐる人々は、中には嘗に此文明の中に住つてゐるのみならず、又文明により生活して、全然満足して生活し、只此文明の存するが爲めに、勞働者の難儀に比ぶれば、殆ど怠惰といふべき生活を營んでゐる。

是等の人々は——王、皇帝、大統領、華族大臣、文武官、地主、商人、技師、醫師、學者、藝術家、教師、聖職、記者——此文明の偉大な幸福であることを堅く信じて、之を失ふどころか、之を變改することすら思はぬのである併し國民の大多數たる農夫に訊け——スラヴでも支那人でも、印度人でも、露西亞人にも——人類の十分の九に訊け、斯くの如く非農業民たる人々が尊ぶ此文明は幸か不幸かと。不思議なことには、其者共の答へは全く異なるであらう。彼等は自らの要するものは土地、肥料、濕氣、日光、雨、收穫と、農業をやつてゆくに必要な、簡易な道具とであることを知つてゐる。併し文明に就ては彼等は全然知らないか、

文明を楽しんでゐる人々は、文明は總ての人間に幸福だと言ふが、彼等は此問題に於ては批判者でも、檢定人でもない、局外者である。

私共の科學的進歩の遙かに抄取つたことは無論である。けれども其進歩のあとを誰が辿つてゐるか？勞働者の背に跨つて生きてゐる少數の人間だけではないか。文明を楽しむ凡ての人に使はれる勞働者は、只時たま文明の餘光に接するだけで、依然五六百年以前の生活を續けてゐる。若し彼の生活

が改善されたと雖、彼の狀態と、富者のそれとの距離は決して少々ならざるのみか、却て六百年以前に比べて遙に大きいのである。私は、多數の者が思ふやうに、文明を絶對の幸福でないと解してゐるが人が天然と争闘して造り上げたもの凡てを抛棄せよとは言はぬ。併し人間に造られたものが正しくその幸福に用立つことを知るには、前人が是を享受せねばならぬものであつて、一部少數のみに限るべきでない、自分の幸福をその子孫に傳へる積りで他の者の爲めに剝奪されるべきではないと、私は言ふ。

私共は埃及のピラミットを見て、是を建築すべく命じた者と、その命令を實行した者の殘酷、暗愚とを恐ろしく思ふのである。けれども今日私共が市に建て、誇つてゐる十階乃至三十六階の建物も同様殘酷愚昧である。地球の周圍には草木、清水清淨の空氣。日光鳥獸があるのに、人はその恐ろしい努力を以て他の者から日光を圍ひ、草もなし、木もなく、又あらゆるもの、水も空氣も汚れ、食物は腐り、生活は困難で、不健康な處に風に揺れる三十六階を建てる。是は嘗に斯る馬鹿氣たことをするのみならず、又それを矜る所の人々の社會が明かに發狂してゐる證據ではあるまいか？、だが是は只一例ではない。自己の周圍を御覽、諸君は一步毎に埃及のピラミッド式三十六階を見るだらう。

文明の辯護者達は言ふ「我等は人類のつくつた凡てが確固りしてゐるやうに、悪い點は改める覺悟である。如何にも、醫者が自分に吩咐することなら、只一つ自分の墮落した生活は元のまゝとして置く條件で、何でも従ふ積りの、悪い生活で自分の位置や健康を失つた、道樂者も同じ事を言ふのである。私共は斯る人々に對して曰ふ、自分の狀態を改善せんとならば、今までの生活を抛ねばならぬと

キリスト教徒にも同時に之を言ひ、悟らせねばならぬ。

無意識の、或は往々意識した誤謬で、文明を辯護する人々の爲すものは、只道具である文明を目的結果、又は幸福なりと常に思ふことである。けれども事實、社會を支配する人々が善良となつた時に於てのみ、それは幸福となるのである。爆發瓦斯は道路を開くには非常に有益であるが、爆發に入れば非常に危険である。鐵は鐵となれば有用で、砲彈となり、牢獄の門となれば恐ろしい。

印刷物は好き感情や、賢い思想を弘布することが、出来るが、又墮落した、嘘偽のそれをも巧みに傳播する。文明が有益か有害かは、その及ぼす社會に對して善か悪かによつて決定するのである。私共の、小數が多數を制する此社會では、文明は大惡である。是は單に少數の支配者が多數を苦める無用の道具である。今は上流の者が、彼等の文明と稱するものは、文化と稱するものは、少數の無爲の徒が、莫大な勞働者を奴隷となす手段であり又その結果であることを悟るべき時である。

私共の救ひは、従前の路を踏まず、既に造つたものを止め置かず、私共が間違つた路を踏み、沼に陥つたので、それから抜け出さねばならぬ事、私共が所有するものを留め置かうと心配せず、却てどうにかして堅い岸に立つ爲めに、自ら曳すつてきた一番不要なものを、思ひきつて抛り出すにあると悟るべき時である。

賢く、善良な生活は、只自らの前にある多く、行爲や、道のうちから、一番道理な、一番善いのを選び出すことによりて成るのだ。而してキリスト教徒は今の處、二のうち一つを選ばねばならぬ、則ち多數を困らして奴隷となし、少數の者に最大の幸福を與へる文明か、乃至は、遠き未來のこととせず

今日只今此少數の爲めに文明のつくつた幸福の一部又は全部、只人間の大多數を困窮と奴隷となり解放するに妨げある此幸福を拒否するかにある。

二 多くの自由と一個の自由

今日或る個々の自由が説明されてゐる、則ち言論の自由、印刷出版の自由、選舉の自由、集會、團結、勞働の自由その他いろいろであるが、是は、現在の露國革命家の如き人々が、自由に就て間違つた考へをもつてゐるか、又全然自由といふものを理解してゐないことを示してゐる。併し自由は簡易にして解し易きもので、只人の意志利益になした行動を求める權力が人の上に臨まぬことをいふのである。

此自由の無理解と、此無理解より起る、或る人々が或る他の人々に或る行爲を許せばそれが自由だとするところに甚しい大弊害がある。

畢奴隷が日曜日に教會に行くことが、暑い日に水を浴び、又は主人の仕事の暇なとき自分の衣物を縫ふのが自由であると思ふと同じ種類の考へである。

一時、習慣や迷信を離れて、國家——どんな極端の軍制國にも又どんな極端な民主國にもせよ——に住む人民を視察し、自らは自由と想像して、恐るべき奴隷の状態に在るのを見るのは必要である。

人は何處で生れても、其上に、自分には全然知らない、そして自分の生活を規程する人間の群は存在してゐる。彼は此規程で彼を爲し、是をしてならぬので、政府が完全に組織されば愈々此規程が緊密になるのである。誰かに、どうか誓はねばならぬ、則ち編制、發布せられるその法律を導奉すべく約束せねばならぬときまつてゐる、どうして何時結婚し得られると極まつてゐるのである（彼は只一人の妻を娶れるのだが、女郎屋を利用し得られる）妻と如何にして分れ、如何にしてその子供を扶養し、如何にして法律に従ひ、如何にして背き、又如何にして誰にその財産を遺し、譲り渡すかといふことが決定してゐる。斯く／＼の法律違反には、如何にして、又誰に裁判を受け、又處罰せられるかきまつてゐる。何時、證人として又は陪審者として裁判に立ち合はねばならぬかが決定してゐる人に手傳つて貰つたり、働いて貰つたりすれば如何程の報酬を出すと決つてゐるし、其者が一日に働く時間、其者に與へねばならぬ食物すらちやんと決つてゐる。如何にして、何時自分の子供に悪疫豫防の接種を爲さしめねばならぬか、きまつてゐる。斯く／＼の病には斯く／＼の方法を、自分と、自分の家族と、その動物とに施さねばならぬと決つてゐる。自分の子供を出すべき學校も決つてゐる。彼が建てる家の廣さや、堅牢もきまつてゐる。犬や馬や、動物を飼ふこともきまつてゐる。どう水を用ゐて、道のなくして何處を行くといふことも決つてゐる。以上の事や、なほ其他多くの法律規程を犯した者に對する罰もきまつてゐる。人が従はねばならぬ又最も民主的國家の人民でも言ひのがれの出來ない（とても全部は知られないのだ）規則の上の規則法律の上の法律を算へ盡すことは出來ない。此處に於て此人は自分に入用な鹽、ビール、葡萄酒、鐵、石油、茶、砂糖、その他いろ／＼のもの

買ふに自分には分らぬ或る事にむかつて、又祖父、曾祖父の時代に誰かよやつた借錢の利子を支拂ふ爲めに、自分の勞力の大部分を割かねばならぬ状態に置かれるのである。又處を移轉しても、遺産を受けても、隣の者に何かしても皆同様自分の勞力を分たねばならぬ。是以外彼が働き、又は家を建て、又は野を拓くその土地に向つて、更に一層大きく彼の勞働の著しい部分を要求されるのである。

か、獨逸とか、露西亞とか大國の自由民であらうと思ひ、まるで御者がその使はれてゐる主人を矜るやうに自らを矜るのである。

墮落せず、薄弱ならぬ精神をもつた人に此様な恐ろしい、賤しい處に陥つて、私かに言ふのが自然ではあるまいか

何れの國家にか屬するのが人類生活に必要であるといふ信仰は非常に強くて、人はその理智その善心、其直接の利益の命令に従ふて行動することが出来ぬ程である。

政府迷信の故に、その奴隸的境遇を續ける人達は、籠の戸口が開いたのに、一つは習慣から、も一つは自分が自由であることを悟らず、束縛の中に居る小鳥と同様である。

此迷妄は、獨、墺、印度、加奈陀、濠洲其他、殊に露國の農民の如き自家の要求に満足してゐる人民に於て、特に奇怪である。是等の國民に取りては、彼等が満足して從屬するその奴隸的境遇に、何の必要も利益もないのである。

都市の者共が斯如く行動せぬのは、彼等の利益が支配階級のそれと密接して、自分等がゐる奴隸的境遇が利益であるが故たるは知れてゐる。

ロツクフェラーが國の法律に背くを欲しないのは、此法律が大多数人民の利益を無視して、自分に幾億弗をつかませ保有せしめるからである。ロツクフェラーの支配人も、又その下の雇人も、その又下の雇人も矢張り之を拒否し得ないのである。都會の人は斯如くである。之は昔の貴族の家付の農奴と同じで、奴隸は即ち彼等の利益であつた。けれども何せ露國民の大多數たる農民は、此自分に用もない權力に穩しく従つてゐるのであるか？

ツーリスク州に、ポーゼンに、カンサスに、ノルマンデーに、愛蘭土に、又加奈陀に民衆が棲んで

ゐる。ツーリスクに住む人達はベテルブルク、カウカース、バルチック洲や、滿州や、外交的奸智をもつた國家の事業に何の關係もない。丁度それと同様ポーゼンにゐる民族はベルリンや、東阿弗利加をもつ普魯西亞と、アイルランドに居るものは、埃及やボアやロンドンを持つ不列顛と、加奈陀に居る者は紐育や比律賓をつも合衆國と何の關係もありはしない。併し此民族どもはその勞力の一定部分を捧げねばならず、軍備や我ならぬ、外の誰やらが計畫した戦争にすら参加せねばならず、我ならぬ誰やらかきめた法律裁定にも義務を負はねばならぬ。彼等が説得さるるのは眞實である。此彼等の生活に最も重大な性質を帯ぶる事皆に於て、彼等の知らない人々に従つて、何千人のうち一人を、知りもしない人から選んで、代表させるのは他の人に従ふのではない、自分自身の爲だと。併し之を信ずる者は、只自他を欺くを欲し、又欺くを必要とする者のみである。

國家に屬して、人は自由であるを得ない。國家愈大にして、強權の必要愈々大に、眞の自由の可能が愈々少ない。英露墺の如く種々雑多な民族より成る國家は、その結合を保つ爲に非常に強大な權力を必要とする。瑞典、葡萄牙、瑞西等の如き小國に於ては、人民の結合を維持するにはより小なる權力を要すれど此小國家に於ても、強權の要求を市民が拒むことは依然として面倒で、不自由權力の量に於ては敢て大國と變るところがない。

薪を束ねて、その束を維持して行くには、強い繩と、或る程度の緊縮が入用である如く

。薪と薪との間の相違は只その置かれた處にある、之は直接繩に縛られぬが、彼は縛られるといふ點にある、併し薪を一

緒に縛るのは、薪がどう置かれてあらうと、皆同じである。強権的政府も之と同様で、専制であらうと、立憲君主制であらうと、少数政治であらうと、共和制であらうと同じでめる。若し人が強権で結合されると、別言すれば少数の者が他の者を法律の威力で支配することとなれば、権力は遂に一方に傾き、一部の者が他の上に立つこととなるのである。一方に於て之は暴力となり他方には金權（金權）となつて現はれる。相違は只一の強権的國家組織の下では、強力は一部人民に多く與へられ、他國では別なものに一層餘計に與へられるに過ぎない。

國家の強権といふのは珠數を繋いだ黒絲のやうなものだ。眞珠は之れ——人民。黒絲——之れ國家。珠數が絲につながつてゐる間は、代り合ふ自由はない。珠數が皆一方に寄ることが出来る、そしてその方には珠數の間に黒い絲が見えないが、その爲め他の大部分には絲が露き出しになる（專制）珠數を處々平均して置き、その間々に適當に黒絲をまぜて置くことも出来る（立憲制）各珠數の間に僅かに絲を出して置くことも出来る（共和制）併し絲に珠數が繋がれてゐる間、絲が除かれぬうちは、その黒絲をかくしおほふせることが出来ない。

國家が有つて、それを維持するに必要な權力が如何なる形に於てもなくならない間は、自由といふ詞にて昔から解釋せられた、眞の自由は有り得ない。

『けれども國家が無くて人は什麼して生きてゆかれやうか？』と、人は常々訊く。斯る人々は、各自は兩親の倅、祖父や先祖の子孫で、其先祖達が選んだ職業をしてゐる、特に、彼等は、佛人、英人、獨人、米人、別言すれば、アルジール、安南、ニース其他をもつた佛國、印度、埃及濠州、加奈

陀等の殖民地をもつた英國、内輪揉のしてゐるいろ／＼な國民をもつ國。雜多な人種と廣大な國家たる合衆國の如き、又露國の如き國民の一人と思ふことだけに慣れてゐるのである。斯る風に馴された人達は斯く無意義な結合に屬せずして生活するは、恰も數千年以前の人々が神に犠牲を供へず、又自らの行爲を判いてくれる土師（土師）がなければ暮していかれぬものと思つたと同じことを思つてゐるのである。

一體人は何等の政府にも從屬せずに、如何して暮していけやうか？

これは全然今の通りに暮していくのだ、只彼の恐ろしい迷信にとらはれて今やる彼の馬鹿けた醜惡を止めるだけである。今の通りに生活するので、決して自分の脊族から自分の勢力を奪つて、税金、献金、關稅などとして愚かな仕事に捧げ、又其人が設けた裁判や戰爭に加はることではない。

然り、此我等の時代に於て何の意味もない迷信は彼の億兆の上に、臨む、愚昧な、是認し難い權力を數百の人間に附與し、且つ是等億兆から眞の自由を褫奪するのである。加奈陀、カンサス、ボヘミア、小露西亞、ノルマンデー等に住む人々は自分等を英、北米、澳、露、佛等の公民であると信じ、又之を屢々矜るうちは自由にはなれない。又、露、英、獨、佛といふやうに、不可能な且つ無意味な結合を保つて始めて成る政府が其國民に眞の自由を與へることは出来ぬ、只それとは同じからぬあらゆる立憲——君主、共利、又は民主的狡計によりて爲される所謂自由だけである。重なる、又自由のなき疑もなく唯一の原因は、國家である。人は國家がなくとも自由を剝脱され得る。併し國家に屬する人間は自由であり得ない。

現在露國の革命に加つてゐる人々は之をさとらない。是等の人々は露西亞國家の公民に對する様な自由を人民に與へようとしてゐる。之が行はれてゐる革命の目的なるかの如く想像して、併し革命の目的及びその最終の結果は、革命家達の見る處とは遙に距つてゐる。此目的は國家の強權から自由となるにある。強大な露國民の表面の腐敗に對して、所謂る智識階級と、工業労働者と稱せらるゝ都市階級の少數者の間に起つてゐる誤謬悪業の錯雜した事業が此偉大な革命の方へ進んでゐる。錯雜した、大部分、復讐、怨恨、虛榮等の卑しき動機に基く此行動は、露國民に唯一つの意義をもつてゐる、則ち、それは何を爲してはならぬか、又何を爲し得られ、何を爲さねばならぬかを示さねばならぬことだ。一つの政府の暴力悪行に代ゆるに他のそれを以てするの無益を示し、其心にある政府の尊信と迷信とを破壊せねばならぬのである。

露國民の大多數は、現に起つてゐる革命が新たな形、あらゆる革命の暴虐をふるふを觀て、前に自分等が苦みながら頂いてきた國家の權力が悪いばかりではない、今現はれてきた新らしいものも同様に悪い、そして是が悪くて、彼が善いといふことはない、双方とも悪いので、國家の權力から一切避けねばならぬものだ、その方が遙に安易で、且つ爲し易いと、悟り始めた。

國民、殊に露國民の大多數を占める農民は今日まで組合の組織で生活してきて、政府の必要を見なかつたが、今の事件を見て、人には鎖鑰のも、鐵のも、長いのも短かいのも鎖の一切不用なる如く、專制も、民主も、政府の必要がないことを悟つた筈である。人民はどんな別々な自由をも求める要がない、只一つの眞實、安全にして、簡單なる自由が入用である。

そして例の如く、一見至難の問題の解決は最も簡單なのである。今日の如く、あれやこれやの自由を得る爲めでなく、只此一つの眞實、完全な自由を得るには力で政府と争ふの必要はない、只人民にその奴隷の境遇を知らせないことの出来るいろ／＼な代表制の手段を考へることでもない、只一つ、人民が義務を負はぬことだ。

政府に義務を拒むには、神に義務を負ふ、即ち善き精神的生活を送らねばならんがためである。只人が斯る生活、即ち神に従ふことによりてのみ、彼は人に義務を負ふことをよして、自由の身となり得られるのである。

自身に言ふことは出来ない『私が人に従はぬようにして呉れ』と。人は只萬人に對する神の至上、普遍的な律法に義務づけられた時に於てのみ、人間に従はぬことが出来る。都會の有産階級がするやうに他人、殊に農民の仕事に生活して、此至高な、普遍的な、相互扶助の神の律法を犯しては、眞の自由は來ない。如何に至上の律法を彼が履行するかに於て人は自由たることを得る。其履行たるや、都市の工業社會では至難といふよりも、殆ど不可能である。其處では成功は人ととの争闘を基礎とするからである。それは只、人の一切の努力が自然との争闘に向けられる農業生活に於てのみ容易に、且つ可能

である。

そこで人間を政府に負ふ義務から又人工的の統一たる國家から解放するには、彼を先づ以て、自然にして、悦ばしい、且つ最も道德的な、暴力によらず、誰にも近きやすい相互協約に従ふ農業生活の團體に入れねばならぬ。

此處にキリスト教國民に起すべき大革命の眞諦が在る。

此の革命が何を齎らすか、如何なる徑路をふるか、私共には知るべき必要はない、併しそれは成就すべく、又幾分は既に人民の心に成立してゐるのであるから、避け難きものたることは、私共に分つてゐる。

結論

人類の生活といふものは、只時が愈々人間が是迄經來つた路の眞偽を示し、又陰蔽されたものを示すことにある。生活は以前の原則の嘘偽を見て新らしい原則を立て、之に従ふにある。人類の生活は、個人の生活の如く、古きものより新らしき物への出生である。此出生は、必ず其誤謬の自覺と、それよりの解放とを伴ふものである。

併し生活のうち個人に於けると同じく、總て人に一時以前になされた此誤謬が暴露せられ、之を矯正すべき運動が起る時がある。此時が革命である。而してキリスト教國民は今や斯る状態に彼等自身を發見するのである。

キリスト教が現はれて、人類一般に對する、至高にして最大の幸福を與へる律法相互扶助の律法は只一つであること、その眞理を人々に確證した、そして何ぞ此律法が生活に實現されなかつたかといふ理由を示したそれは人々が、幸福の爲めには、暴力の使用が必要であり、又効果あるものと信じ、報復の法律を正しいと信じたからであつた。キリスト教は暴力は常に破滅的であつて、報復は人間によりて用らるべきものでないことを教へた。けれどもキリスト教徒は此律法に従つて生活せんと欲ひながら此一般的な相互扶助の律法を受入れず不本意にも異教的暴力の律法の下に生活をつゞけたのであつた。斯る生活の矛盾は生活の罪惡、外的便宜、小數者の奢侈を強め、キリスト教國に於て大多數の隸屬と困厄とを増大した。

近頃に至り、キリスト教國民の中、小數者の罪惡と奢侈、大多數の者の困厄と隸屬とが最高潮に達した。特に既に久しく農業の自然生活と、所謂自治の詐偽にかゝつた人々の間に甚しくなつた。此人民は、其内に自分を見出す矛盾や、自分の境遇の悲惨に苦み、あらゆる救済を求め、帝國主義、軍國主義、社會主義、他國領土の侵略、あらゆる争闘、關稅、科學の修養等一切、但し彼等を唯一のもの、自己、國家、祖國の迷信を離れ如何なる國家強權とも斷つことだけは除外して――

その農業生活の結果、半は自治の詐偽のない結果、その多數数になると、主として權力に對してキリ

スト教的關係をもつてゐる結果、露國民は、自分の政府が曳き込んだ殘虐、無用にして、不幸に戦争の後、彼等が奪はれた土地の返還の要求が満たされないで、何れの國民にも先立ち、現代キリスト教徒の厄災の基く主因を感知し、その結果全人類に向つて立ち、彼を彼の不必要な苦難から唯一の救ひたるべく此大革命がそのうちに起るのである。

茲に、今露國に始まつてゐる革命の意味がある、此革命はまだ歐洲や米國には始まつてゐないが、革命を露國に喚び起した原因は凡てのキリスト教國に向つて共通である。日露戦争は、戦争に於ては異教徒がキリスト教徒に優越することを示した。キリスト教國は今、其無制限な軍備競争の極點に達してゐる、そして土地に對する天然の權利を奪はれた結果、勞働國民の不滿は一般である。

露國民の大多數は明白に、彼等によりて長らく忍ばれてきた困厄の原因は、權力に屈從したことで露人の前には二つに一つを取らねばならなくなつてゐることをさとつた。則ち、賢明にして、自由の生活を拒むか、乃至政府に義務を負ふことをやめるか孰れか一方である。

又自分等の生活の迷信と自治の詐偽から此ことを今見ないにしても、間もなく歐米人も此事を認めるのである。彼等が自由と稱ふる大國政府の權利に干與することは、彼等を益々大きな奴隸の境遇と、それより生ずる辛酸とに彼等を陥れた。

増大する辛酸は必然に、彼等を唯一の遁路に導く、即ち政府に奉仕を止めること、政府に奉仕をやめた結果國家の威力による統一を破ることである。

此大革命を完成するには人々が國家、祖國は只架空のものだが、生活と眞の自由とは現實である。

故に生活や自由を、國家と稱する人爲の結合に犠牲として供ふべきではない、却て眞の生活と自由の爲め、國家の迷信と、それより起る人に對する罪ある奉仕とより擺脫すべきである。

此人々が國家及び權力に對する關係の變更こそは古き世の終り、新しき世の始めである。(一九〇五年十月—十二月)

平和論集(終)

大正十三年二月一日印刷
大正十三年二月十九日發行

定價金七拾錢

平 和 論 集

著 者
發 行 者
印 刷 者
印 刷 所

神 田 豐 穂
神 田 豐 穂
東京市日本橋區數寄屋町一丁目
關 根 慶 寛
東京市牛込區早稻田橋町三六二
早稻田印刷株式會社
東京市牛込區早稻田橋町三六二

發 行 所

東京市日本橋區數寄屋町壹番地
株式會社 春 秋 社
電話東京二四八六一番

トルストイ名著名集

石田三治譯 **茶食論と禁酒論** 假四六版 定價金四拾五錢 送料金六錢

高谷道男譯 **簡易聖書** 假四六版 定價金八拾錢 送料金八錢

福永挽歌譯 **家庭の幸福** 假四六版 定價金七拾五錢 送料金八錢

加藤一夫譯 **我等何を爲すべき乎** 假四六版 定價金壹圓八拾錢 送料金拾四錢

柳田泉譯 **十二月黨員** 假四六版 定價金八拾錢 送料金八錢

加藤一夫譯 **子供の智慧** 假四六版 定價金四拾五錢 送料金六錢

春秋社譯 **民話** 假四六版 定價金八拾錢 送料金八錢

トルストイの思想を全世界に流布せしめしに就いては、フリス・エー・ブレスの効を没すべからず。曩に吾邦勝古の大出版たりしトルストイ全集を完成せし吾社は、茲に江湖の熱帯に促されて該全集中の名篇を選出し、茲に極めて簡素低廉の小冊子として頒布す。……『簡易聖書』以下『民話』まで未刊

宮島新三郎譯 **人生論** 假四六版 定價金八拾錢 送料金八錢

木村 毅譯 **藝術とは何ぞや** 假四六版 定價金壹圓 送料金拾錢

細田源吉譯 **私の懺悔** 假四六版 定價金四拾五錢 送料金八錢

加藤一夫譯 **宗教とは何ぞや** 假四六版 定價金七拾錢 送料金八錢

加藤一夫譯 **我が宗教** 假四六版 定價金壹圓貳拾錢 送料金拾錢

加藤一夫譯 **力ガザツク** 假四六版 定價金壹圓五拾錢 送料金拾貳錢

トルストイ名著名集

片上伸著

定價金壹圓五拾錢
送料金拾貳錢

トルストイ傳その他

發行所
東京市神田區
表神保町一〇
春秋社

内 序
トルストイの家庭論
トルストイとその夫人
トルストイ記念の一夜
トルストイの宗教的的人生觀

批評壇の第一人者で、かねて露文學の最高權威なる片上教授の、ライフ・ウ・アークとして寧日も研鑽を放たれざるはトルストイである。本書はその成果の一片で、他日大成さるべき大トルストイ評傳の基礎とも言ふべきもの、傳記以外に、全著作解題、宗教觀、家庭觀、その夫人の全五篇より成る。復興帝都の出版界に劈頭此の名著を掲げて見え得るは社同人の大きいなる誇である。



23
60

終